

---

# 自殺にまつわるエトセトラ

しいたけ。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

自殺にまつわるエトセトラ

### 【Nコード】

N9114N

### 【作者名】

しいたけ。

### 【あらすじ】

自殺未遂をしてしまった。四月の終わり、高校生活初めてのゴールデンウィークを前にして。

飛び降り自殺に走った少年、原島耕。自殺未遂をきっかけにして、彼の生活にほんの小さな変化が訪れる。話したくない生徒に話しかけられ、見覚えの無い女生徒に抱きつかれ、口の悪い先輩に暴言を吐かれ。

そんな小さな変化を通して、彼自身も少しだけの異変を自覚すること。

高校一年の五月から始まる、ほんの短い期間で動く少年の姿を描く、学園青春小説。

## 1・自殺未遂をしてしまった。

1・

自殺未遂をしてしまった。四月の終わり、高校生活初めてのゴ―ルデンウィークを前にして。

音楽準備室の窓を割って、古くなったオルガンをその窓際に引張って足場にし、窓枠上方に出張った換気口へと腕をかけてがむしやりに屋上へと這いのぼり、僕の不満を白日の元に晒すため校舎のかけつぷちで叫んだ時のこと。一人の女生徒に邪魔をされたのだ。その女生徒は入学当初、個性のかけらもないステレオタイプな生徒から変な噂を立てられるような、ちよつと「お高い」存在だった。確か随分と話しやすいながらもそれなりの気品があり、同学年の様々な生徒が頭をへこへことさせながら興味を持った、とかいう話を廊下で聞いた気がする。単純に、彼女の容姿が抜群に良かったからだ。僕は思う。彼女が誰に対してもそんな応じ方をするのも、そのためなんじゃないかと思った。

「自殺寸前の男子生徒がいるときいて飛んできた！」と、彼女が邪魔に入ったのは僕が屋上の端で叫んでから一分ほどしてからだった。大きな瞳を星屑のようにきらきら輝かせて、学校の最上階にある一年生教室の窓から身を乗り出してはしゃいでいた。

僕は誰かを楽しませるために自殺をしようと思ったわけではないので、嬉しそうに口元を歪ませる彼女を見てしまったから急に死ぬという気がなくなった。僕の落下予定地点であたふたとする教師や、ぎゃあぎゃああわめく名も知らぬ生徒や、薄っぺらい携帯カメラを僕に向ける生徒を見て、死ぬ気どころか生きる気も失せた。

それからおとなしく僕は音楽準備室に戻り、オルガンの椅子に座って携帯でネットを始めた。なんてことはない、いつもの無気力に戻っただけだった。そんな無気力さを後押しするかのように、部屋

にやってきた教師たちは僕を拘束し、すぐさま親を呼び、適当な問答をすると、僕に二週間の停学を言い渡した。

個人的に滞りなくこの程度の処分で収めることができたのは、自分自身を愉快犯ということにしたためだ。ひどい悪ふざけということにして、親に殴られ、教師がなんとか制し、自宅で反省ということとでどうにか勘弁してもらえた。

実際には行動の頭から尻まで愉快さのかけらもなかったけれど、あのととき愉快そうだった例の女生徒を、見習ってみようと思った。

## 2・馬鹿で、クズ

2

「どうもお久しぶりです、自殺志願者の原島耕と申します」

五月の第二週。朝のホームルームで馴染みのないホームに向けてごく自然な挨拶をした。反応が一切なく、担任も何も言わず、僕は自分の席につく。言葉にすれば簡単だけど、教室はおそらくどんな楽天家が見てもアウエーだといえるもので、ちらりと向けられるさりげなさを捨てた視線がしきりに刺さる。

友達もまともに作ろうとしていない、部活にも入ろうとしていない、隣の席の人間の顔と名前も一致していないされてもない僕が、突然飛び降り自殺騒ぎを起こして例の女生徒の気を引かせようと画策したのだと思われるのかもしれない。その女生徒の名前も知らないのに。

僕はうんざりして、窓際の自席でさっさと寝たふりをした。

とんとん。とんとんとんとん。

顔を伏せたのとほぼ同時に、机を叩かれる。担任が本日の予定について説明しているところだったが、かなり気の早い人がいるようだ。ホームルーム終了のチャイムが鳴るまでとんとんと叩く音は続いていったが、無視した。

「なあハラシマ君、ハラシマ君」

休み時間に突入した途端、抑揚のない声が寝ている僕の右側から。女子らしい。対応しようか一瞬考えたが、僕はすぐに体を起こし、その相手が横に立っていることを確認する。じっくり見上げると、真っ黒な髪がブレザーのリボンにかかる程度まで伸ばされ、毛先が外側や内側に行儀よくはねた、セットが大変そうな髪型の例の女生徒がいた。前髪は真ん中で分けられ、その下の真っ黒な瞳と目が合う。

「君はなんで生きているんだ？」

「……………は？」

とても正気とは思えない。

僕だけでなく教室内に居た彼女以外の全員がおそらくそう考えたに違いないと思った。しかし、星空のように輝くその大きな瞳は、注目の集まったこの空間でも僕だけを興味深げに捉えている。周りの視線が痛い、室内の空気が痛い、体も何故か痛いと思ったら、机に置いていた片腕が強く抑えつけられていた。

「ああ、ごめん。興味本位で訊いた。なぜいまだにこうして生きているのか、と思ったから」

彼女は僕を抑えつけていた手を離して顔の前で振った。その手の隙間からしっかりと確認したが、やはりこの瞳、この顔、僕の自殺願望を削り取った彼女に違いない。

「別に、死のうと思っただけであんな騒ぎを起こしたわけじゃない」

建前上そういうことにしていた。とりあえず、学校側にも親にもしかし彼女は納得がいかないようで、眉間に皺を寄せて腕を組み、僕を見降ろしてくる。

「嘘だな」

何故か一発で見抜かれた。

「本当だよ。実は目立ちたがり屋で楽しいことが大好きで、この学校でモテモテな人気者になることを夢見てあの事件を起こしたんだ。もちろん賛否両論は覚悟の上、例のあの騒ぎで、まずは名前を学内に浸透させることを狙った。名前だけでも知っているのと知らないのでは、人の印象は随分と変わってくるからさ。簡単に言えば、女の子がぶりっこして他人に媚を売ると近いだろうね」

「なるほどつまり、ハラシマ君はナルシス媚売り乞食か」

「そう。常に誰のおこぼれでも喜んで口に入れるような人間なんだ。それがおいしいかおいしくないかは一回味わってから決める。以前にちよっと、自殺未遂をして注目を浴びた芸能人をニュースで見てね、それが自分にとっておいしいか気になったから、試しにやって

みたんだよ。結果はこれからわかる。ほら、今この教室の雰囲気だつて嫌悪百パーセントで埋め尽くされているわけじゃないし、楽しみだよ」

我ながら、思ってもみないことがぼろぼろと出てくるものだ。このような考え方なんて、正直僕にはできない。不可能だ。

「なら、もういい」

彼女はそれきり僕から顔を背けて、隣の席に座った。そこでつまらなそうに頬杖をついたところ、彼女の席は僕の隣だったらしい。僕が居ない間に席替えでもしたのだろうか。

一時間目の授業が終わった途端、前の席の茶髪の男子が振り返ってきた。

「原島だよな」

「そつだよ」

授業中に気付いたが、やはり席替えをしていたようだった。なぜなら僕は彼を知らないし、現国の教師も教卓に置かれた席順の用紙と一生懸命見つめ合い、教科書を音読させる生徒を指名していたのだ。

「お前意外にファンキーな奴だったんだな。飛び降り騒ぎの前にも窓割ったんだっけ？ 注目浴びるためにんなことする奴普通いねーつて」

「一度しかない人生だからね」

笑う彼に僕がそう言つと、隣で文庫本を読んでいた例の彼女が立ちあがり、廊下へと足早に出ていった。ぱたぱたと鳴る足音が遠ざかっていくのが聞こえるほど、教室は静かになっていた。

「あーあ、やっぱ怖いなあ不知火は」

彼が呟いた。

「不知火さんっていうんだ、あの人」

「あんな有名な知らないのか……って、そうか。原島は連休明けでもまだ停学だったな」



「そうそう。だからクラスメイトも今日初対面って気持ちでいるんだよ」

「じゃあ俺も知らないよな」

「もちろん」

胸を張って言うと、彼は「すげえ失礼な奴だ」と笑った。

「俺は土屋総助つちや そうすけだっつーの。覚えてねーみたいだけど会話するのも初めてじゃないからな。ちなみに、未だにクラス内のポジションがピンと来てない」

「どうでもいいね」

「確かにどっちかっつーとどうでもいいな。俺の名前はどうでもよくないけど。んで、原島は部活とかやらないんだっけ、委員会とかあ、俺は無所属な。もうコンビニバイト始めてるぜ」

その十分間の休み時間は、あたりさわりのない会話でお茶を濁した。彼との会話がつまらなかつたわけではない。僕以外の人間と話した方が彼にとって健全だと思ったために、適当に相手をしてしまった。

「昼は学食？」

それから昼休みまで毎度の休み時間、土屋は僕に話しかけてきた。土屋の中学時代の友人達ともいくらか話したが、いかにも普通な学校生活になってしまっていた。隣の席にいたりいなかったりする不知火さんとは結局一言も話すことはなく、あの時の活き活きとした姿も見ることがなかった。

「そうだね。土屋は？」

「俺も学食。んじゃ行くこう」

土屋の友人も二人誘うことになり、僕らは四人で学食へと向かう。四月当初は見向きもされなかった僕だったけれど、朝に垂れ流した適当な言葉は、あながち間違っではないのかもしれない。もつとも土屋以外は、僕に対するほどほどの距離を見つけようとしているのが容易に感じられた。

僕が入学して三日で気付いたうちの高校の利点は、私立校であるためか学食のメニューの充実ぶりが悪くないことだった。食堂自体もそれなりに大きく、席も十分に用意されている。なので、一年生が席を見つけられずにトレイを持ったまま立ちつくすことはない。僕は三百円の坦々麺を食べることにして、土屋達と空いたテーブルを囲んだ。

「原島つてやつぱり変わってるなあ」

パエリアをつつきながら、土屋の友人である山田が言った。

「何か変だったかな」

「学食の麺類はハズレばつか、つて話は結構有名だ。一旦冷静になつてから食べてみ？」

何故か冷製坦々麺を想像したが、少し落ち着いて麺をすすった。

「……ぼそぼそだ。前は適当に食べてたから意識もしてなかった」

「な。コシもそんなにないし、今度からはやめておいた方がいいんじゃないね？」

「いいや、敢えて無類の麺好きとしてこれからも食べ続けるよ。我が校のラーメンマイスターとかラーメンソムリエみたいな感じで、また知名度が上がる」

僕は何を言っているのだろう。

「原島、これはグルメ山田からの忠告だ。美味しいもんは人生を豊かにするんだよ、そうつまり、豊かな人生のために、麺類は食うなど俺は言う」

すると、山田は隣のもう一人、鈴木と拳を合わせ、最近行った「近所のうまい店」について事細かに説明を始めた。正直どうでもよかったが、土屋も食べながら一応聞いていたので僕も頷きながら聞き流す。

食堂はこの彼らの言葉も一瞬で溶けてしまうほどに生徒が混在して会話を繰り広げ、本当に相互のコミュニケーションが成立しているのかと疑いたくなるくらいのごっちゃ煮状態だ。ちょうど今ほどが食堂の混雑のピークの時間帯で、僕も後ろを通る生徒のせいで何

度かつつとうしい思いをした。

「でさ、俺と鈴木は小学校からずっと同じクラスで」

意識をテーブルに戻すと、山田と鈴木はまだ話している。地元のお店はだいたい食べ歩いた、ということを押さえておけば一応問題はないだろう。土屋はうんうんと聞いていて、興味を持った店の名前と場所を尋ねていた。これが聴き上手というやつなのか。少なくとも、相手に不快感を与えていないように見える。

「ま。そういうことよ。部活の後とかに俺らを頼ってくれればいい店を紹介してやる」

ふうん、と僕は頷いて、話の流れのままに二人と連絡先を交換した。山田らは部活をしているのか訊こうと思ったが、面倒そうだったのでやめた。

席を立って、赤いスープのどんぶりが乗ったトレイを持ち上げる。するとそのとき、ちょうど僕の真正面、二つ向こうのテーブルで食事をしていたらしい女生徒と目が合った。全く同じタイミングで席を立って、偶然にも視線が正面衝突したのだ。

ここ。

「？」

その元気の良さそうなショートボブの少女　といっても最低でも同年以上だが　は、突然僕に笑顔を見せてきた。どこかで見たとような、夏のさわやかCMにでも起用されていそうな素晴らしい笑み。なんと僕は不意打ちを食らってしまったのだ。不躰ながら、こちらも全身全霊で満面の笑みを返すことにする。トレイを持ったまま。

「……何いきなり笑ってんだ？」

「笑ってないよ」

「超笑ってたじゃねーか……」

土屋が不審者を見つけた。つまりは僕の視線を遮った。その隙に少女は居なくなっって、僕は無心で食器を返却しに向かった。

放課後になつて帰り支度を始めた。今日はずっと土屋と話していたせいか、騒ぎについて訊いてくる人間は、朝の不知火さん以外はいなかった。それともやはり、妙な騒ぎを起こした相手とは関わりたくないのかもしれない。まだ入学して一カ月なのだ。土屋も言っていたが、クラス内のポジションというものを確立するためみんなある種必死になっているとも考えられる。

それを考えると、ふと思ひ当ることがあった。

「土屋、いいかな」

ちようど廊下に出ていくところだった土屋を呼びとめ、僕はその背中をぐいと押した。

「どうした？」

「不知火さんについてちよつと」

振り返つた土屋は口をむつと閉じると、廊下の先に躍り出て僕をこまねいた。

「本人はまだ教室だ、とりあえず玄関行こう」

運動部、文化部問わず、部活動がそこそこ盛んなうちの学校では、僕のように放課後になるとさっさと階段を下りていくような生徒は少数派だ。階段踊り場の掲示板には、そんな僕らの足を止めさせようと未だに部員募集の張り紙が自己主張を続けている。僕だつて何か部活動でも始めてみようとか、新しい趣味でも見つけようとか、入学当初はいろいろと思つたりしたけど、結局はどれも選ぶことができなかった。というかどれも選ぶほうとして、全て諦めた。

土屋はそれらに目もくれず、やってきた玄関の靴置き場の土足部分に足だけを下ろすと、「まあ座れよ」と僕を促した。

「それで、不知火について知りたいって？」

僕は頷く。

「確か連休明けに何かあったようなことを言つてたよね。不知火さんは有名人なんでしょ？ クラスでもすでにちよつと別枠的扱いだし、どうやってそのポジションを手に入れたのかなって」

土屋は頭を搔いて、困つたような顔をした。

「あーなんだよ、そっちかよ！」

「こっちからすればそれしかないんだけど」

「んなことはどーでもいいって」

「全然どうでもよくないんだけど、まあいいや。土屋が想定してたのはなんなの」

「そっだよそれだよ、と土屋は僕に向き直った。そして、あー、とか、うー、とか言いながら制服の内ポケットから取り出した携帯を開いたり閉じたりして、変なタイミングでもとっているのか、その後ゆっくり溜め息をつく。

「……原島さー、この前本気で死ぬ気だったろ」

「……………」

「……………」

言葉を出そうか迷った。ここで肯定をしても否定をしても、既に土屋は答えを知っているのではないかと何故か思った。それならそれで別にいいんだけど。

「まあね」

「……やっぱりそうか。いやあ、本当に悪かった」

僕が応じたのを確認すると、土屋は頭を下げた。

「なんで謝られるんだろっ」

「水攻を止めようとしてただけだし、あん時はちょっと都合が悪くて止められなかったんだよ。なんつーか、いや、なんだろう。俺としては人が死ななかったことに感謝するべきなんだけど、自殺したい人を無理に止めるのも少し違うというか……えーっど……。いや、生きてて良かったな原島！」

何に対する弁解かもわからないうちに、土屋は僕の肩を組んできた。素早く払った。

「ストップ話が掴めない」

「質問はどこからでも受け付けてるぜカモン」

「ミナクって誰」

「ああ、不知火だよ。あいつは不知火水攻しりぬゑ。ちなみに名前みなくで呼ぶと

「すげえ冷たくされるから一応注意な」

「はあ……で？」

「え？ で、つて？」

本当にきよとんとした表情をされてしまった。僕からしてみればそれこそきよとんとさせてほしいくらいなのに。

「だから。今の話で不知火さんと土屋の関係がクラスでのものよりもある程度親しいってことはわかったし、そのフォーロウのためかは知らないけど今日、こっちに対して土屋が働きかけをしようとしたのはわかった」

そこで僕はかぶりを振った。

「でもそれは今知ったことだ。その前、自殺しようとしたことについての関係で、どうして土屋に、不知火さんのことについて質問をしようとしたと思ったのが全然わからない。それに、本当に自殺をしようとしたということを断定的に言えたのもわからない。まさか『実はこの前死ぬ気だったんだ、殺してくれ』なんて言うわけも言っただけでもないし、少なくとも今日、そんな素振りを見せていないはずだ」

土屋は僕が話すのをやめたところで、目を大きく開いた。

「……原島お前、やつぱ変わってるな。いい意味で」

そんなつもりは微塵もない。もちろん悪い意味で。

土屋は一拍置くと、口を開いた。

「どこから説明すればいいかわかんないけど、とにかく水玖は変わり者だ。多分お前より変人だ」

「不知火さんは知らないけど、こっちは変人じゃないよ。自殺しそこなっただけだから」

「いや、本気の自殺をしそこなっただけやつが普通に学校来て自然に会話できてるってのはちよつと変だな」

これまた面白い冗談だ。

「それは置いておく。とりあえずだ、水玖は馬鹿なんだ」

「馬鹿なの？」

「馬鹿で、クズだ」

「そこまで言わなくても……」

僕が呟いた瞬間、玄関の靴置き場に影が増えた。

「ん。そこまで言わなくてもいいとは思う。どうだ総助、考え直さないか？」

「あーあー、来ちゃったよ」

うだうだと体を振りながら土屋は顔を土気色に染めた。

あまりにもナチュラルに僕のすぐ隣へ座り込んできたのは、まさに不知火さんその人だった。少し僕に近すぎて、はねた髪が首にこすれてくすぐつたい。

彼女の登場によって玄関の靴置き場で外靴に履き替えずに足を降ろす人間が三人に増えた。まるで青春のページでも現しているようだった。一人だけ顔色は悪くしたままだ。

「あの、不知火さ「原島君」

そしてこの青春の沈黙を破るための言葉が被ってしまった。

「不知火さんからどうぞ」

「じゃあお言葉に甘えて。失礼なことにさっきから、君と総助との話は聞かせてもらっていた。原島君、やはり君は嘘をついていたんじゃないか。まったくもう」

む、と口を膨らませた不知火さんは、異様なほどに雰囲気や緩やかだった。猫でも被っているのか、しかしその被った猫の完成度は凄まじく高い。猫だ。

「それは建前として、ああ言うしかなかったんだよ。それに自殺志願者がクラスメイトなんて、健康に悪い」

「死にたがりか他人を気にするのか、変わっているな。気にしたところで些細な失態、名残、残滓、未練でもこの世に置いていってしまつと、仮に死後の世界があつたとしても既に死んでしまった人間ではそれを取りかえすことができないのはわかってるかな」

「？」

いやに実感のこもつたようなオカルト的な言葉に、僕は違和感を

覚えた。

「水玖、原島はもう死にそうにないって。どう見ても開き直ってる。余計なお世話だ」

「土屋？」

開き直つてると一口に言われるのも少し納得がいかない。というか二人は、どうして僕の頭の少し上の方で会話をしようとするのか。土屋は意図的だろうが、不知火さんは少し違う気がする。随分と一方的な印象だ。

「原島君」

また名前を呼ばれた。不知火さんを見ると、真っ黒な瞳が真っ直ぐに僕を貫いていた。朝から数えて二度目のことで、何故かこの二度目の方に僕は怯んでしまった。

「助けが欲しいなら手を貸してやる」

「……は？」

僕がこう訊き返すのも二度目だ。もうこの時点で僕は、突拍子もない彼女に対してこう返答する術しか持っていないのかもしれない。「そうだ。私が全力をもって手伝ってやるから、心おきなく死ぬといい」

突然立ちあがって胸を張った彼女を見た土屋は、深い深い溜め息をついた。僕も何かリアクションを取ろうと思ったけど、不知火さんのその圧倒的な自信を見て、呆けるというかほとんど見惚れてしまっていた。

僕が心おきなく死ぬ、なんて。

今更だよ。



### 3・首元のリボンを解いて

3・

不知火水玖は最低最悪、魔性の女だという。

何を差し置いても自分が大事、自分がかわいい、彼女はぶれることのない自分の世界の中心に常に在り続け、その世界の揺るぎなさを確たるものにするため、鬱陶しくも他人へと過剰に関わろうとする変人らしい。

その行動に端的な言葉をあてるなら、イカれた偽善者だといえるそうだ。やりすぎ、大げさに考えすぎは当たり前で、中学時代は一年時からの通算で延べ五百人超の生徒教師を巻き込みひたすらに卜ラブルや贅辞の嵐を起こしてきたとのこと。

それも全部、他人のためでありながら自分のために行ってきたというのだからタチが悪いと。外にも内にもプラスな影響をもたらしかかる台風のような太陽のような、わけのわからない。

「助け、かあ」

あのあと土屋が不知火さんを追い払い、その帰り道で彼から聞いたことをまとめるとこんなところだ。そして土屋自身は彼女と幼馴染で、いろいろあつた腐れ縁だそうだ。

僕はといえば、ただただ垂れ流される土屋の文句や愚痴をまとめることに終始していただけだった。不知火さんに関わる話だと、土屋もクラス内で見せる姿と若干違うものを見せるようだと思った。聞き手から完全に話し手になっていたので。もっとも、たった一日時間を共にしただけの仲だ、いろいろと考えて決めつけるのは早計だろう。

それよりも。

不知火水玖について。彼女がどの程度の人間であるか。土屋の話

では、成績はオールマイティ、トップにはなれないがトップクラスには確実に入れるくらいの実力はしっかり持っているらしい。助けてやる、とさも自信ありげに言い放つほどのだからそれなりの力量はあるのだ。

だからといって、僕が両手放して死を受け入れられるような存在に彼女がなり得るとも限らない。僕が求めていたものはもつと観念的で、「将来の夢は宇宙飛行士」と虫歯だらけの病弱で貧弱な少年が本気で言っているようなものなのだ。

個人が誰ともない他人を救うことができるか。他人が他人の無力さを尊重し合えるか。他人は人の助けとなれるか。そんなの、実際には不可能だ。

救いを請うことは自己満足だ。誰かに救いを求めた時点で、既に自分の中で答えは出ているのだ。訓練された救助隊が災害地で行うようなものでない精神的な意味での救いは、いい加減で適当なものなのだ。だから、答えを出せない人間は自殺を考え実行する。実際に死ぬ。自分の「救われ方」を、知ることができなかったのだから。不知火水玖の言う「助け」とは、僕の考える「既に答えの用意された救い」とは違ったものなのだろうか。自殺未遂をした僕に死んでほしいようだが、僕はもう自殺には興味はない、しても無駄だと気付いたのだ。そんな僕に向けて彼女はどんな行動を取ろうとするのか、土屋の話からは掴み切れない。

なんて、明日になれば少しはわかることだろう。

僕は自室の電気を消して、何度もプレイしたRPGをセーブせずに消した。いつも通りに。

「なんで教室ではピリピリしてるの？」

「不知火には高校入学前、俺がさんざん注意したからな」

不知火さんは教室に居る時、授業中も休み時間も問わず、文庫本を読んでいるかノートにせっせと何かを書くくらいの行動パターンしか持っていないようだ。そういえば入学直後に廊下で誰かに話し

かけられているのは何度も見たが、おそらく教室では今のようにも話しかけられていなかった。だから僕もクラスメイトなのに彼女の存在に気付かなかった。

がたん。

で。教室に居ない時のパターンに移行する時は、脈絡なく突然席を立って早足でどこかに歩いてゆく。それを見ていると、僕は疑問をもってしまう。

「注意つて？」

「お前はクラスに友達作るな、って説得した」

「なんで不知火さんはそれに従ってるの？」

「俺の頼みだから？」

ちよつと意味がわからなかったけど、一応僕は納得した。

「つーか、入学した直後の自己紹介聞いてなかったのか？」

「誰の自己紹介も覚えてないよ」

「じゃあ俺の知らないよな」

「もちろん」

胸を張って言うと、土屋は「だと思った」と笑った。

「あいつは自己紹介の時、『クラスメイトは私に話しかけないでください。お願いです。どうしても駄目なんです。この発言を会話の糸口にしようとも思わないでください。絶対に近付かないでください』みたいなことを言った。聴きとれるレベルの早口で、えらい冷たくな」

そんなことを言っても話しかけようと言う人間はいそうなものだけど。多分土屋が言ったような口調じゃなく、冗談のような雰囲気でもなく、彼女はひたすらに教室へ異様な印象を振りまいたのだから。でなければ今の状況はえらく不自然だ。

「でも他の生徒は不知火さんに話しかけてるじゃないか」

「クラスに友達作るな、って言ったただだからな。なんだかんだで同じ中学の奴は俺以外にも居るし、あいつは少し頭がおかしいが人望はそこそこ、人当たりもいい。むかつくことに見た目も悪くない」

褒めてるのか貶しているのか、といえはとも褒めているようだ。しかしそれならば土屋は、どういう意図でクラスに友達作るななどと言ったのだろうか。

「それはそれってことでまあこの話はいいだる。それより、不知火はお前に矢文とか射ってこなかったか？ 昨日の様子じゃ突拍子もなくお前に何か仕掛けてきそうなもんだが」

「不知火さん隣だし、土屋は前だし、この至近距離で気付かないわけ」

「ぼてーん、てーん、てーん、てーん、てん。」

「ええ……？」

何故か古そうなサッカーボールが教室に飛んできた。教室内の視線が一齐にそれに向けられる。土屋はすぐさま動いて、転がってくるボールを拾い上げた。

「うーん……。原島、お前に」

「何これ」

「安心安全生徒活動ボランティア同好会からのお達しだな」

そう言っ僕にボールを突き出した。

「何それ」

ボールを受け取って眺めてみると、「原島耕江」と書かれた小さな封筒がへばりついていて。セロテープを取り外して封筒を開くと中には折り畳まれた用紙が入っている。

『この虫野郎が』

なんと用紙を開いてみると、罵言がでかどかど筆で書かれているではないか。しかも達筆だ。バランスが良く、広げた僕の肩幅にちょうど被るサイズで、背中に貼りつければうまい具合に収まりそうだった。

「なんだろうこのあからさまないじめは」

僕は教室の端のほうでそれを開いたのだけど、背後のクラスメイ

トにも見える位置だったようで、「なに？」とか「うわあ」とか言われていた。そっちはあまり気にはならなかったが、わざわざどうしてこんなことを。

「裏だ、裏」

僕の反対側の土屋は全く動じておらず、用紙に指をさしていた。僕は首を捻りながら紙をひっくり返す。

「……」放課後 部活棟の一階隅 カウンセリング室で』、と。これ、不知火さん？」

土屋は片手で頭を抱えて溜め息をついた。不知火さん関係になるとやっってしまう彼の癖なのだろう。僕はそれを肯定と捉えて、周りのクラスメイトに向けて笑いかけた。

「うっん、面白いね」

カウンセリング室は玄関から右に折れ、渡り廊下を過ぎて真っ直ぐ行った突きあたりにある、らしい。土屋からその場所を聞いて、僕は一人でそこに向かうことになった。なんでも「俺は行きたくない」からだという。僕だって正直積極的に行きたいわけではないが、不知火さんには単純に興味があるから、いかないわけにはいかない。確か、安心安全生徒活動アルバイト同好会だったっけ。カウンセリング室が部室だったりするのか。目の前のカウンセリング室の札を見上げながら、この部屋のドアには窓がないんだなあきつとプライバシーのためなんだろうなあ、と思いながら、引き戸をノックした。

「原島君か」

「そうだよ。入っても？」

「ゆっくりな」

どうして。がらがら。

カウンセリング室、というのは間違いなく嘘だということは部屋の様相で簡単に把握できた。

ドアを開けると、まず部屋の中心には会議室にありそうな長テー

ブルが置いてあり、その上にどっさり和本や紙類が乗せられているのが目に入る。図鑑や地図やマンガや小説があるというのはパツと見ですぐにわかった。壁際にはぼろぼろのサッカー、バスケット、ラグビーやらのボールがダンボールに詰められて並んで、窓の下で変に自己主張をしている。窓際から視線を左の壁のほうに移すと、くすんだホワイトボードや破れた得点板やハードルが放置され、その手前のいかにも古そうなソファに、不知火さんがリラックスして座っていた。

端的に言えば。物置になつてる教室のソファで、偉そうに座っている人がいた。

「やあ原島君。学生生活の手助け、暮らしの安全をどうのこうの、生徒生活改善推進同好会へようこそ」

不知火さんは一人掛けソファに仰向けに寄りかかり、すらりと伸ばした足先でドア側の壁に置いてあるパイプ椅子を指した。僕はそれを引つ張り、とりあえず不知火さんの正面ちよつと右側に腰掛けた。真正面では確実に、彼女の短いスカートの中が見えてしまうからだ。

「して、何の用かな」

これは僕が言ったのではない。不知火さんが言った。

「帰っていいかな」

「すまない冗談だ」

「して、何の用かな？ 他人を虫扱いしておいて」

これが僕の台詞だ。

「君の行動がいまいち読めないから、少し気にかけてしまいたいだよ」

めんどくさい喋り方だなあ。

「他人の行動なんて読んでどうするの？」

「私は誰かを助けてやりたいんだ。どんな些細なことでもいい、どんな大変なことでもいい、誰かにとっての助けができるのなら私は全力を尽くす。君の言葉で言うなら、健康にいいことをしたい」

不知火さんはソファの肘かけに頬杖をついて、足を組みながら言った。どう見ても「助けてやりたい」なんて言葉からの態度ではないが、土屋の言っていた通りならこの仕草にも納得できる。

「そう。自殺志願者、ハラシマコウ。君の手助けをしたいんだよ。何かあるか？ 死ぬなら看取ってほしいか？ 大勢の群衆に見守られて死にたいか？ それともなんだ、一人で孤独に、誰にも気付かれることなく死にたいか？ 屋上から飛び降りようという君なら、大勢の、が最も適切かな」

「強いて言うなら、もう死にたくない」

「なら、どうしたら死ぬ？ 君が自殺に踏み切った理由を追求する気は全くないが、君が死ぬだけの理由を掘り下げていけば、君は結果的にあの時の輝きを見せて死ぬことができるのか？」

「輝きって」

「様々な方面での悩みに溺れる私達青少年は今しか見せることのないくすんだ色を持っているわけだが、私個人の見解としてはその悩みに苦しむ際の私達青少年の姿が一番美しいと思っている。だからこそ、その輝きを近くで見たい。そして磨きたい。磨きに磨き、悩みに悩み、その輝きが私によって失われることは、なかなかどうして、気持ちがいい」

「変わってるね」

悩みを磨くとは、面倒事を積極的に増やすということじゃないか。君ほどじゃない

「これまた面白い冗談だ。」

「まあ、別に君に死んでほしいわけじゃないんだ。君が自殺に至ったほどの悩みがあったのなら、それを解消するために私が尽力してもいい。なにがなんでも一つの目標に突っ走れと言うほど、私は頑固な人間ではないつもりだ」

「……………」

「……………」 どうした？ 急に難しい顔をして」

不知火さんは僕が自殺に至った悩みを解消しようというのか。そ

れが単なる言葉でできるものなら、とつくに解消しているだろう。僕にはそれができなかったから、諦めようと思っただ。簡単なことじゃない。物理的に無理があるとも思える。時間が絶対的に足りていない。それに、僕じゃ無理だ。僕程度じゃできない。もっと僕じゃなくて、そういうことができる能力のある人間が居ればいいのに。

「不可能だ」

僕がこぼすと、不知火さんも難しい顔になった。

「何がだ」

「他人の自殺の原因を、会って間もない君が解消できるはずがない」

「絶対にか」

「もちろん」

胸を張って言うと、不知火さんは立ちあがって僕のすぐ前に歩いてくる。そして、僕を見降ろし、睨みつけた。

「私はそういう類いの言葉が大嫌いだ」

「迫力は十分だったが、僕は怯まなかった。」

「はつきり言わせてもらうけど、君みたいな人間が大嫌いだ。助けてやるなんて、何様のつもりなのかな。土屋から聞いて今ここでも確かめたけど、君の自己満足はかなり狂ったレベルに来ているね。」

「悩み？ くすんだ色？ 美しい？ わけのわからないことをわざわざ言わなくていいよ。君が過去にどんな毒にあてられたか知らないけど、勝手に他人のパーソナルスペースにまで踏み込んで欲しくないな。中学時代はかなり尊大な気分で自分勝手に過ごしてきたようでも、実際にはそれは周りがなくで流されてきただけだと思うよ。どんなに優れた個人でも、社会の中心には絶対になりえない。ああ、「絶対」や「不可能」が嫌いなんだっけ？ じゃあ一つ言わせて欲しい」

不知火さんは無言で僕を見つめている。

「君が人をどうにかすることは不可能だし、それによって他人が本当の意味で揺らぐことは絶対に無い」



「それで話は終わりか」

「まだ無くもないけど、言いたいことがあるなら言っていよいよ」

「じゃあ、聞いていて引つ掛かったところを抜粋して言わせてくれ」  
こほん、と不知火さんは僕をみつめたまま後退し、ソファに座つて足を組んだ。

「私は私の自己満足のために動いていることは確かだが、そのために他人をないがしろにするつもりはない。私の価値観は私に全て依存しているが、世の中的一切合切が自分のためにあるとは思っていない。私が他人の悩みを感じとって喜ぶことは、単純に人間が好きだからだ。それと君はその話の中で私の表現が気に食わなかったようだが、私にとってはわけのわからないことではない。私は自己中心的な性格だからな。それについて理解をしてもらおうとも思っていない、本心を言えばできるものなら誰かに理解してほしい。だが、人とはそういうものだ、完全に理解し合うことはできない。普段の生活を見てみる。誰が誰に対してどんな心を見せているのか、その全てを把握することはできない。君が感じた私への印象も、私にとつては的外れだ。そう、他人が他人を理解することはできない、「絶対に不可能だ」。私が「絶対」や「不可能」を嫌うのは、そんな言葉はわざわざ言う必要のない、解りきつてのことだと知っているためだよ。ああ、あと、何よりも言いたいことがある」

不知火さんは頬杖をついた。

「君は私のような人間が嫌いなようだが、私は君にとつても興味を持つた。君をどうにかしたい、君の悩み、いや、胸に抱える想いを揺らがせてみたい」

「わあ、好きになられても困っちゃうよ」

不知火さんは嘔き出した。

「ある意味でな。否定はしない。言葉は随分と感情的なのに、君の一本調子は変わっていない。面白いよ、君は」

「不知火さんこそ今の話、前もって準備しているのかと思つた」

「以前にも同じような事を言われたからな。君みたいに穏やかな調

子ではなかったが」

何故だか、なるほど、と頷いてしまった。まあ、深く追求する話ではないだろう。

一旦話に区切りがついた気がしたので、ちょっと話題を変えることにした。

「そういえば、ここカウンセリング教室だね？ どう見ても物置だし、なんで不知火さんが住んでるの？」

「別に住んではない」と笑って、不知火さんは窓際に歩いていく。「こつちを見てくれ」と窓の外に指をさした。僕がそこまで行くと、窓の向こうはグラウンドで、すぐ真下では禿げた地面が露出している。土が部分的にきらきらとして粉々になったガラスが落ちているのかと思っただが、この窓は割れていない。

「二年度前のうちのスクールカウンセラーは生徒に死ぬほど嫌われていたらしい。これはその名残だと聞いた」

「要するに追い出されたんだ」

「カウンセラーなのにな、情けない。だから私がこの場所を奪って私の拠点にした。この部屋は物置というか、部活動等の廃品の処理に金をかけたくなかったからこうなった、いわばゴミ捨て場らしい。ドアに窓も無いしな」

ドアに窓もないしな、を妙に強調して、不知火さんはまたソファに戻った。なんとなくグラウンドを眺めたままでいると、野球部がグラウンドをのろのろと走っているのが見えた。ドアに窓がない、なら、カーテンも締めればここはあそこの野球部にも見られない空間なのか。

「今考えたな」

不知火さんの声が背中からかかる。

「何を？」

「『カーテンを閉めれば何をしてもばれないのでは？』と」

「惜しいね。』もしかしてカーテンを閉めればなんでもできるのか

な？』って思ったただけだよ」

僕は振り返った。

「同じじゃないか」

「不知火さんの場合ほど能動的じゃないよ。可能か不可能かを考えたけど、自分の行動を前提にしたわけじゃない」

すると、不知火さんは何故か満足そうに頷いた。

「これは『私の場合』ではない。私が部活を作るにあたって、この教室しかないと抜かした『生徒指導の平松教諭の場合』の話だよ」  
「楽しげだ。どうしてかその理由を考えようと思ったが、なんとなくというか、男ならというか、ここに居る女性は不知火水玖、容姿を言えばかなりのものを誇っている女子高生なのだ。ソファに座る彼女の足、制服のスカートから伸びるほっそりとしたそれを見て、なんとも言えない気分になった。つまりは、そういうことなのだろう。」

「……冗談？」

「事実だ。……いや、正確にはもう違うのか？」

あっけらかんとしてはいるが、不知火さんはどう考えているのだろう。この話は普通に、事件じゃないか。

「大丈夫だったの？」

「ん。何がだ？」

「え、つと……体、とか？」

おお、と手をぽんと叩いた。

「大丈夫じゃないな。完全に再起不能だ」

「そんな……」

こんな美人なのに、見た目には全然問題無さそうなのに、そんなひどいことになっていただなんて。せめて僕が飛び降り自殺騒ぎを起こしていなければ、いや関係無いか。

「不知火さん、綺麗なのにね……」

「な、いや、急にどうして褒めるんだ……違う、同情か？　なんだ、どうしてそんな目で見えるんだ……」

しどろもどろだ。ああ、この話は追求しないほうがよかったんだ。でも、こんな変わり者の不知火さんは、痛ましい事件があったことを気にも留めていない。きつと変人だからなんだ。この人変なんだ。

「おい、変な表情をするな。気持ち悪いぞ原島君」

「良かったら代わりに殴っていいよ。男代表として」

「いやまあ、腕を外して顔を蹴り飛ばしてやったから個人的にはもう十分だが。原島君がそんなに殴りたいなら殴ってやらんこともない」

「え？」

「どうした？」

沈黙が流れた。僕は沈黙が嫌いではないので、ついでに完全に口を閉じてしまった。体感二十秒くらいの静寂、学校内で繰り広げられる部活の掛け声が聞こえる。多分「ふあいおー」。女子ソフトボール部だ。

「あ」

不知火さんが何かに気付いたようだ。

「私が平松に屈したと思ったのか？」

「流れるにそれ以外ないよ……」

頬杖をつきなおして、笑いをこらえるように続ける不知火さん。

「奴は体育教師だったが、私はそれほど力がなくとも強い。それ以前に男はあなると頭が回らないらしくてな、ここにたくさんの道具があることに気付いていなかった。なにより私を襲おうなど、せめて学校外でやればよかったものを。襲った事実さえ存在し訴えられれば、成功。あ、駄洒落ではないからな。の有無に関わらず懲戒免職あたりは見えるだろう。私は『たすけてー』と叫んで、首元のリボン解いてからしっぴかりと叩き潰してやったし、あれは時期も悪かった」

「時期？」

「ああ、原島君は停学処分を受けていたか。実は君みたいな生徒の力になるうとこの教室をあてがわれた時の話なんだが、五月の頭は

部活動がそろそろ活発になる頃で、生徒は部活棟の何処にでも居たんだよ。いやまあ、もしも下手をすれば妙なモノをあてがわれるところだったかもな、くくくく」

ああ成程、そういうことだったのか。しかしまあ、この学校の教師は怖いなあ。

「つてことは、不知火さんが有名になったのつてそのせいだったんだね」

「ん？ 私は有名だったのか？ まだ部として活動を始めていないのに」

黒い瞳をぱちぱちさせて、外にはねた髪をいじりながら驚いたような表情を見せてきた。自分本位な人だというのに自覚がないのも違和感があるけど、事実は事実だ。

「ああそうそう。それでだよ、原島君」

「本題？」

「その通り、と言いたいところだが、私の要件だ」  
不知火さんは足を組みなおす。

「君の自殺の理由は未だに見えないし、話す気も解決する気もないならそれでもいい。事を他人に強要することも無いことはないが、特にそういつたことを好いているわけではない。だがもつと個人的に、私は君に興味を持ったとさつき言ったな？」

「うん？ 話が見えないんだけど」

にい、と薄い唇が半月のように。

「簡単な話だ、うちの同好会に入れ。まずは部に昇格させないと格好がつかない。まあ、今なら顧問がつかないから気楽といえば気楽なんだが、私は納得がいかない」

「……は？」

思ったよりも話せる人だ、と感じていたところで、彼女はまた突拍子もないことを言い始めた。というか本当は、僕個人のことなんてどうでもいいんじゃないかこの人。なんだか自己中心的という言葉があまりにもふさわしくて、笑ってしまいそうになった。

僕は半笑いのまま、どこから持ち出したのか「よろしくな」と手に押し付けてきた入会届の紙を眺めてみる。なぜだが確信的に、この用紙一つで僕の生活をさらに大きく変化させると思い、そこに至るまでにそう時間はかからなかった。

つまりはそれだけの魅力を不知火さんはこの短時間で僕に見せつけ、うだうだと物を考える余地すらも、彼女は与えてくれなかったのだ。

#### 4・気持ち悪くなったよね

4・

翌日の昼。教室で購買のパンを貪りつつ、僕は土屋と向かい合っていた。学校生活三日目となると慣れてくる、というのは気が早すぎる気もするけれど、僕は停学明け以降は完全に開き直っているため心労を抱えることもなく、ごく自然に。

「何がなんだか……もしかして俺はまとも理解しちゃいけないようにマインドコントロールでも受けてんのか」と、土屋が目を白黒させながら言った。

「だから、昨日不知火さんに呼ばれて、その流れで生活安全志向なボランティア同好会の活動に加担することにしたんだよ」

「わけわかんねー……」

同好会の名称はまだはつきり決まっていな。不知火さん自身、今のところちゃんと決める気もないらしい。ちなみに入会届に書かれていた学校側の登録名は「生徒生活ボランティア同好会」になっていた。正直曖昧すぎる。

「それでさ」

「俺は入らない」

「誰か紹介してよ。土屋は何故か無所属を強調してたから入らないとは思ってたし」

「おいそこはポーズだけでも誘ってくれよ」

「そういう無駄な流れ嫌いなんだよね」

「性格悪いな……不知火がお前を誘う理由が納得できる気がしてくる……」

土屋は教室内では「不知火」と呼ぶようだ。実は今も隣で不知火さんが弁当をもくもく食べているけど、土屋はチラ見すらしない。

しかし、この前の二人を見る限りでは特別仲が悪いようにも見え

なかった。そうなると変な盟約でも取りつけたに違いない。変人の不知火さんと腐れ縁なら、少なくとも土屋は変人のはずで、きつと変な関係を築いているのだ。傍から見れば変な人であろう僕に、わざわざ絡んできたこともある。

「不知火さん？ 土屋が手伝ってくれないよ」  
呼んでみる。

「……………」

しかし、無視。土屋を見ると、僕が手をつけていないカツサンドを勝手に食べようとする感じの動きを見せた。面倒なので無視すると、おとなしく自分の分の続きを食べ始めた。

何故不知火さんはクラスメイトとは友達にならない、もとい、教室内では誰とも会話をしようとしないのであるのか。いくら土屋に言いつけられたからといって、それに素直に従うタイプだとも思えない。

気になった。

「土屋、トイレ行こう」

「連れションかよ。俺そういうの向いてねー」

「友達無くすよ？」

「お前に言われる筋合いはない」

そう言いながらも土屋は席を立った。そのまま教室を出るところで不知火さんの視線を感じたのは、多分僕の気のせいだ。

「あのさ、土屋って変だよね」

四階トイレは一年生用。僕の予想した通り、まだ人は少なかった。

「どこが？」

「なんていうのかな。RPGで言えば親密度がすごく上がりやすい」

「馴れ馴れしい？」

「そうとも言っ」

はは、と笑うと、土屋が切り出した。

「ぶっちゃけると、俺も同じことを考えてた。っつーか、お前に遠



慮が無さ過ぎるから俺もそれでいいかって思っただけだ。お前と話したことも俺にとって身近なところだったし。不快に感じたなら悪かったな」

僕は首を横に振る。

「いや、なんていうか、そうじゃないんだよね。不知火さんも似たような感じだと思うんだけど、土屋は相手に対して常に一定の距離を保ち続けようとしてる印象なんだ。歩み寄っても近寄れないし、一定の距離感からは離れてることもない。こんなこと、まだ三日しか話してない相手に言うのもおかしいのはわかってるんだけど」

この僕の言葉は、普通の相手なら間違いなく不快感を覚えるはずだ。お前に何がわかるんだといった具合に。僕もおそらくそう思う。土屋は腕をうづんと組んで、答えづらそうな表情を見せた。

「お前、やっぱ変だよなあ……」

「いやあ、その反応もちよっと変だと思うよ」

普通なら土屋のように、感心したような声は出さないだろう。

「じゃあ、そうだな。お前が何を訊こうとしているのか聞かせてもらおうか。普通に、俺に踏み込んでくるのがちよっと早すぎるだろう。何かに焦ってるわけじゃないんだけどね。それでも時間は有限だから、有効に使おうと思って」

はあ？ と聞き返してきそつに眉を上げたが、言葉にしてくることはなかった。

「結局不知火さんのことなんだけど、どうしてクラス内では誰とも話さないってことにしたんだろう、って疑問を持った。土屋は普通に誰とでも話すしね。不知火さんはそのこと、本気で気にしてないみたいだからお節介かもしれないけど」

「……………あー。そうだな。だから、だよ」

日本語は習得に難しい言語だつてことがよくわかるような会話だと思った。少なくとも、僕はちよっと考えてしまった。だが土屋は続ける。

「原島、不知火に興味持ってるよな。どういう意味でかはお前の頭

ん中に任せるけど、それは事実だろ？」

「そうだね。似てるから」

「誰に」

「知り合いだよ」

土屋は僕の顔を射抜くようにじっと見つめて、やがて口を開く。

「原島の場合はまだいい。昨日の話を聞く限りじゃ、不知火も同様に興味を持っているからな。でも不知火が興味を持つ人間は、不知火に興味を持つ人間に比べて圧倒的に少ない。一握り、雀の涙だ」

「土屋は？」

「俺の話は置いておけ」

結構重要だと思ったのに。

「あいつは変だ。変わってる。見てくれも人当たりも十二分、でも人間としてはおかしいところがある」

「具体的には？」

「どうでもいいことには全く感情的にならない。つつーか、めつちやくちや鈍いのか。最低限の対応をつつがなくこなすだけで、本当にそれだけなんだ。一緒に出掛けたりもするし、遊んだりもする。

笑うし、可愛いし、普通に会話もできる。でも、やっぱり根底は「どうでもいい」で埋まってるんだよ。あいつが他人と全うに関われるのは、「そうすることが普通だから」、それだけだ」

「ああ……もう話が見えてきたよ。凄いわかりやすいね、まるで被害者の会みたいだよ」

「その辺はノーコメントで。とにかく、クラスの集団中に居るあいつがまともに振る舞うと、それに依存したりへばりつく奴が出てくるんだよな。で、そのうち相手が深い関係になったと思って接しても、徐々に水玖と噛み合わなくなってるのがはつきりしてくる。それ、結構へこむだろ？ 極端な話、散々言葉を詰め込まれた人工無能、よくできたプログラムと会話してたようなもんだ、つてのは水玖に失礼か」

おもむろに土屋は水道の蛇口を全部上げて、それぞれから水を出

し始めた。

「でも、他人の悩みを解決したがってるっていうのはその辺に関わってくるんじゃないの？」

「水玖は基本的には、他人そのものに興味があるんじゃない。悩みを解決する自分に興味があるだけだ。悩みを解決するまでに相手がどうなっているても大した問題にはしない」

話を聞いていると、やはり土屋も少し変わっているような気がする。何がどう、ということではなく、全体的に何かが変わる。僕の印象と噛み合っていないような、僕のイメージ中の歯車よりも、少し大きいような。

「聞いた人間が言うのも難だけど、不知火さんのそういうことばるばる言っているの？」

「これは実体験を伴った俺の話だから、彼氏についての下世話な話をし合う方のガールズトークと大差はない」

つつこみ所を個人的に見つけたけれど、今はそつとしておこう。「要するに、土屋みたいな被害者がでないように、不知火さんを説得したってことだね。でも無理に教室で一人ぼっちにさせるのは、人としてどうかと思うよ」

「そうかもな」と言った土屋が水を発射する蛇口を端から止めていく。僕も反対側から一緒に一つずつ止めていくと、残った最後の蛇口から勢いよく水が噴き出して、床を水浸しにした。

教室へと戻る途中に、僕のクラスの一年二組と三組の間で誰かと話している不知火さんを発見した。ぴくりとこちらに気付いた動きを見せた不知火さんは、僕らに向けて手をこまねく。

「ほら、彼が原島君。自殺未遂の常習犯。そしてこっちが総助。私の知ってるやつだ」

不知火さんは両手を僕らに向けて伸ばした。こんな自己紹介があつていいのだろうか。

「おいこら紹介がおざなり過ぎるだろ」

「総助は心が狭いなあ。原島君は全く意に介していないのになあ」  
反応に遅れただけだ、と説明するのも億劫だ。誰に紹介されたの  
かもまともに確認していない。だがしかし、せっかくだから相手が  
不知火さんにどう評されるのか黙って聞いてみよう。

「あたしは風間萌<sup>かざまめぐみ</sup>。今日からなんとか向上ボランティア生活同好会  
に入るね！」

「……」  
「……」

先手を打たれてしまった。そして何故かこの少女　といっても  
同年齢以上だが　に見覚えがあるような気がする。ショートボブ  
で小柄の、元気の良さそうな。

「……」

「あ」

突然僕に向かつて、彼女は最高の笑顔を見せてきた。そうだ、こ  
れは食堂で見た。偶然視線が直撃して、運命の出会いを果たした少  
女だったのだ。

「ええと、原島耕だよ。昨日不知火さんに誘われて同好会に入っ  
たんだ、よくわかんない会だけどよろしく」

いい笑顔だったので、少女に向けて満面の笑みを返す。客観的に、  
百点では、ない。

「知ってるよ！　生きてて良かった！」

手を握って振られた。なるほどかなりフレンドリーな女の子とい  
うことは十分に理解できる。不知火さんも納得顔で頷いて、土屋は  
しかめっ面をしていた。

「可愛いな、小動物系だ」

土屋がこぼす。

「ああ。いいキャラクターを手中に収めたと言っていい。これで部  
の印象は良くなるな」

不知火さんが応える。確かにこの少女はそういう系統だが、まさ  
か本人を前にそんなことを、

「やっぱりそつち系で攻めてくのがいいかなー」

その話に乗るな。攻めるな。

「何、風間さんはどういう何なの？」

「あだ名とか名前で呼んでくれれば変な距離感が埋まるよ。あのね、あたしはフリスビー部やつてるんだけど、フリスビー部は一年生少ないんだよね。それでたまたま不知火さんが会員募集してたから、入っちゃった。実は不知火さんとは出会って三週間の仲」

いきなり名前で呼べとさらっと言われても困るし、フリスビー部云々と後半部分が明らかに繋がっていないではないか。この子は人に物事を説明する気があるのか。いいやあるはずがない。

「でもめぐみちゃん、誘われたからといってもどうしてボランティアなんてするの？ 水玖はろくでもないよ」

土屋がまともな質問をすると、不知火さんは土屋の耳にアイスピックでも突き刺しそうな表情になった。

「推薦入試のためかな」

「風間さんは合理主義なんだね」

しかし土屋は何故か食い下がる。

「いやいやでもさ、何するんだかもわかんないよ？ 街の花植えとか、ゴミ拾いとか、老人ホームの手伝いとか、そういうの全くしないかもよ？」

「いやいやいや、あたし的には経歴に「生徒活動推進向上同好会（一年時～三年）」とか書かれてたら高感度アップするし、面接で聞かれたら超誤魔化すし、それだけでいいんだよね」

「ああそつだ総助、お前も福祉るか？ 他人のために汗を流すことはわりと素晴らしいことじゃないか、萌のように推薦狙いの保険でもない」

「誰がやるか。福祉は動詞じゃねーし、お前の目的はそんなんじゃないねえだろ」

不知火さんは不満そうに口を尖らせたが、土屋は無視して教室の中に入ってしまった。

「土屋くんだけ、ぴりぴりしてるね」風間さんが呆けた顔で言った、と思つたら、「耕くん耕くん、土屋さんと仲良いの?」なんて言いつつ僕の腕を引っ張つてきた。突発的に名前と呼んできたその図々しさに、僕は少なからず恐怖を覚えた。

「悪いつもりはないけど」

土屋側がそうしている、と僕は思っているから。

「そっか。じゃあ不知火さんへのフォロー、ちゃんとしてね」

「……?」

念を押してこなくても、少なくとも悪い方向に持っていくつもりはないんだけど。

「じゃあ、放課後に部室でな」

「うん! 後でね」

風間さんが手を振りながら三組教室に帰っていく。僕はそれを見送る不知火さんを見て、思ったことを口にした。

「なんで敢えてあの人を?」

「ん? 嫌か?」

「嫌いじゃないよ。腹黒を前面に押し出すような矛盾を抱えてる人ってわけでもなさそうだし。でも不知火さんとは合わなそうなタイプじゃないかな」

「大丈夫。私は雑食だからな」

そんなこと訊いてない。

しかしそれを言い残して、不知火さんも教室に戻ってしまった。きつとまた、無言モードに突入するのだ。

その後、少し土屋は不機嫌だったので特別変わった話もしなかった。やがて放課後になったところで、僕は鞆に荷物をまとめてすぐにカウンセリング室に向かう。行かない理由は無い。

ノックをしたが、そういえば不知火さんは掃除当番だ。風間さんはきつと不知火さんと一緒に来るだろうし、ここには誰もいないだろう。ドアを引こうとすると、やはり鍵がかかっている。不審者で

も居るか期待しようと思ったけど、ドアの前で立ちすくみそんなことを考える僕の方がきつと危ない。

「耕くん早いね！ 不知火さんは？」

風間さんがやってきた。学生鞆と、何か大きめの荷物を背負っている。部活の為の指定のジャージあたりか。

「掃除当番だよ。うっかりしてた。風間さんは不知火さんと来ると思ってたんだけど、すぐに来ちゃったんだね」

「じゃあチャンスだ！」

「何が……」

部活棟の一階隅となると、やはり人は少ない。学校本棟の玄関から右に折れて真っ直ぐといっても、部活棟へは外付けの渡り廊下を挟んでいるために、本棟側から部活棟の動きを直接見ることは難しい。なにより僕らの居る場所は人の多い玄関口からそこそこの距離がある。それにまだ部活動自体が始まる時間帯ではないため、部活が始まる寸前の、この人の居ない僅かな間。

だから、これはすぐに頭を切り替えればそこまで妙な問題にはならない。

何の話かと訊かれると、答えづらい。

「ふっふっふ。一応、体温はあるんだ」

こちらの意見としては、女の子は柔らかい匂いがして、風間さんは本当に小さい、身長は僕の胸ほどまでしかないんだなあ、というところだ。その時点では、いっばいっばいだった。

これだけ回りくどく言うのは正直に恥ずかしいからで、要するに僕は同年代のかわいらしい女の子に突然抱きつかれたということ。真正面からうまく咀嚼することができなかったのだ。

「気持ち悪くなったよね、ケンくんは、ええと、なんていうのかな、うん、死人みたいになってるよ、ね、そんなケンくんから見たあたりはどうか、変わったかな、まさか同じ学校だったなんてびっくりだよ、前と同じ格好なら、ケンくんもわかってくれたのかな」

何がおかしいのか、といえばこの状況全てがあまりにも不自然で、

中学時代でもここまで理解しがたい妄想もしたことがないくらいだ。シチュエーションについての造詣は人並みだけど、とりあえず僕はもっと自然な感じが好きなのだ。

だが、だけど、けれど。僕にはもっと大きな、おかしな引っ掛かりがあった。

「ねえ『ケンくん』？ どしたの？」

どうして彼女はそのあだ名を知っているのだ。

その名で僕を呼ぶ人間なんて、もういないと思っていたのに。



## 5・愛してるぞスクールライフ

5・

小学生が漢字を間違えるなんてよくあることだ。

未と末を間違えることなんてザラにあるし、雷と電を間違えることもなくはない。天と夫を間違えてみたり、特に遣と遺を間違えることなんて小学生じゃなくてもあると思う。

これが手書きだと、わかっけていてもいなくても、書いた書かれた、読んだ読まれたでそういうミスが多くなる。作文を書いて先生に赤鉛筆まみれにされて返される人だって居た。

僕が「ケン」とあだ名を付けられたのも、そういう些細なミスがきつかけだった。

小学二年生の時、国語の授業で「自分の名前を漢字で書いてみよう」という授業があった。紙を回され、自分の名前を自分で書き、担任に戻す。そして戻ってきた紙の名前を担当が読んで、正しい名前だったら返事をする、というものだった。この授業は今やると、もしかしたらちよつとした問題になるかもしれない。

僕はそこで、自分の名前を書いた。朝しつかり親に聞いたので、間違っていないつもりだった。しかしそれを前の席の女の子が、「鳥になってるよ」と笑って注意してきたため、顔を赤くして急いで「原鳥」を「原島」に、書きなおした。

回収の命がくだされ、紙はさつさと集められる。次々と名前を呼ばれていくが、確か正確に名前を書けている方が多かった。

「えーっと次。ハラシマケン、いるかー？」

わあっと笑いが起こった。ハラシマは僕しかない。僕は手を挙げようか迷ったが、間違はなく「原島耕」と書いた筈だった。

「おお、居た居た。ハラシマケンでいいんだな」

僕は手を挙げた。その時は自分は絶対間違っていないと信じてい

ただ。先生は笑って、「って、なんでやねん」とかいう下手なノリツッコミのようなことを一人でやった。そして僕の元にやってくるよ、「でもなみんな。多分、原島は間違っってはなかったんだよ」と言う。

提出した紙には「原島耕」の「耕」の上部分がすり減った、「原島耕」という名前が書かれていた。「鳥」を「島」に直した際、上の一部分が消えてしまったことに気付いてなかったのだ。先生は黒板まで戻ると、僕の正しい名前と、間違えた名前を書いて説明を始めた。

「うっかりミスだけど、これからはこういうミスはなくさないといけないな。でも原島はここで間違えたから、もう失敗しない。まーそうだなあ。消しゴム一つで偶然名前が変わるなんて面白くていい例を出してくれたな！ 原島に拍手！」

そんな字は知らなかったから理不尽な指摘とも思っただけれど、何故か拍手をされたので気分は良かった気がする。それからたまに同級生にふざけて「ケン」と呼ばれたりもしたが、子どもは飽きが早いのだろう、授業からせいぜい二週間までしか続かなかった。

僕の記憶が確かなら、しつこく僕を「ケン」と呼び続けたのは「鳥」と「島」のミスを指摘した彼女一人だけだった、はずだ。

「ケンじゃない。耕だよ」

「知ってるよ？」

風間さんの名前はついさっきまで知らなかった。小学校は学年二クラス、総勢七十人弱、フルネームを聞けば思い出せないほど記憶に疎くはないし、風間さんの見た目からして、元が良いのだから男の僕の記憶に無いはずがない。

それに昔のあだ名に縁があったとしても、ほぼ初対面の彼女に抱きつかれるようないわれはない。どういう意図か、死体だと呼ばれるほど嫌われているとも、いや、原島耕を嫌っている可能性はある

か。

「ていうか風間さん、いきなり抱きつかないで」

「なんで？」

「本能が大変なことに」

「嘘」

何故か一発で見抜かれた。咄嗟の言い訳だが、嘘というわけでもないのに。

「ケンくん、やっぱりすごい雰囲気変わった」

「そうかな。昼休みからだから、だいたい二時間くらい？ 確かに言われてみれば、風間さんに対してものすごい不信感を持つてるかもね」

風間さんは抱きついた状態から僕の肩を軽く突き放して、腕一本分の距離を置いた。

「……なんで……？」

そして、急に泣きそうな表情になってしまった。

冷静に考えて、僕は彼女を泣かせてしまうくらいの言葉は投げかけてはいないと思う。しかし、昨日話した相手が相手、不知火さんは極度の変人であると確信した上でああまで言った。その名残だったら彼女に申し訳ない。僕が彼女に不信感があるのは事実だし、それだけの行動を風間さんはとった。だからといって、それを言っただけが悪い、とふんぞりかえる気はないのだ。

「……すいませんでした言い過ぎました」

一瞬で考えを簡潔にまとめ、僕はその場で頭を深く深く下げた。

女の子を泣かせてまで僕の我を通すなんてそれこそあり得なかった。とりあえず謝って、この場をスルーしてしまいたい。あだ名についてはもう少し落ち着いてからそれとなく話してみよう。

「え、あ、そこまで下げるの！？ そんなに謝ってこられても困るよ！ 嘘泣きだから！」

「ん？ 原島君に萌か。部屋の鍵も取らずに何をしていたんだ？」  
今の声を聞いても僕の伏せた頭は情景を捉えることはできなかつ

だが、状況はわかる。部活棟の隅で深々と頭を下げる僕と、嘘泣きでも半泣きで困った顔をする風間さんが居て、やってきた不知火さんが真つ黒な瞳で僕らをまじまじと見つめているのだ。

それを思うと、なんとなく、僕は見動きを取らずに胸の内だけで身構えた。

「あ、不知火さん？ なんでもないよ、大丈夫だよ」

やはり風間さんははぐらかした。同時に、不知火さんの気配が一瞬消えたような気がした。

「……なるほどな。つまり原島君は」

「違うよ」

すかさず僕は頭を上げる。

「まだ言っていないぞ」

「めんどくさい言い回しで変なことを言いそうだったから」

「君は私をなんだと思っているんだ」

「変な人」

「君ほどじゃない」

これまた面白い冗談だ。

不知火さんは「まあいいか」と言っつて、カウンセリング室の鍵を開けた。風間さんが僕を睨んできたような気がしたけど、目を合わせたくなかったから気付かないふりをした。

「では早速、改めて自己紹介をしようじゃないか」

不知火さんは部屋に入るなり、部屋の隅のホワイトボードを引っ張って、ソファの横に置いた。赤と黒のペンを二本取り出して、まず黒のペンで自分の名前を書く。僕と風間さんは鞆や荷物をごちゃごちゃした真ん中の机の端に乗せ、パイプ椅子を出してホワイトボードの前に適当な距離を開けて座った。

「自己アピールタイムは三分。超過は幾らでも許すが、三分に満たなければ罰を与える」

僕は携帯を見た。

「どんなシステム？」

「そんなシステムだ気になるな」

せつかく質問をしたのに一蹴。やはり不知火さんは自己中だった。　「では　私は不知火水玖、ホームルームの一年二組では「語らぬ女神」と呼ばれている。……ああ。むろん嘘だ。わけあって私は教室内ではあまりしゃべらないようにしているだけだ。正直とても寂しく、泣いてわがままでも喚き散らそうと考えたが、仕方がないこれは宿命なのだ。そう、宿命。フェイトだ。私はその宿命に従うと同時に他人の悩みを解決することを生きがいとしているためにこの会を立ちあげることにしたんだが、その具体的なPRや部活として正当性のある活動規範を考えようとするもまとめられなかった。そのせいで昨日は寝れなかったな、夜更かしは苦手なんだが無駄に頑張ってしまった。ここだけの話、就寝時間は十時前が基本なんだ。寝覚めが良い。だから眠い頭での結論、勝手にやらせてもらうことにした。どうせ生徒会は形だけ、教職員は先の事件の様子から生徒に対してあまり強く出てこないことがわかってる。つまりこの学校においては私を力づくで拘束するものは無いと言っている。すなわち、私は私のために私の納得がいく楽しい学校生活を送ることを可能にしているわけだ。至れり尽くせり、これはあまりに好条件。他に特色がないからといってわざわざ進学校とのたまってしまった馬鹿のおかげで、ほどほどの私立校に入ってしまうという中途半端な生徒たちが集うこの場所、きつとその中途半端さに悩む青少年は山のように海のように、まさに私のための温床だろうな！　さあこの部屋を拠点に悩める生徒達の未来に重くのしかかる現実という鎖を碎き割り、私と共に人助けの楽しさを知ろうじゃないか！　愛してるぞスクールライフ！　愛してるぞ！」

とりあえず拍手した。風間さんもしていた。緩急をつけた話し方で、携帯のデジタル時計は三分と五秒を過ぎていた。

「不知火さんってなんか面白いよね」

「こついうのを冗談で言っていればね」

半泣きは収まっている。風間さんはにこにここと笑って、僕に囁い

た。

「質問はあるか！」

一方、だん、とホワイトボードを叩く不知火さん。ストップパーが壊れているのか、板がぐるんと回転して危ない。それを見て、僕は手を上げた。

「どうぞ原島君」

「なんで黒板使わないの？」

入り口のすぐ右の壁、今の僕らの背後の壁には、普通に黒板がある。

「チョークは消耗品だからな」

ペンもだよ。

「他には？」

「はい不知火さん」

「どうぞ萌」

「要するにカウンセラー代わりなの？ 部屋も部屋だし」

「そうと取ってもらってもいい。私はいかなるニーズにも応えられるよう柔軟に構えておく。実働込みのカウンセリング、うん、それでもいいな」

ふうん、と風間さんは頷いた。

「次、原島君！」

ああ、僕なんだ。

ペンを突き出されたので立ちあがり、おとなしく受け取ってホワイトボードに名前を書いた。アドリブで三分話せなんて、面接かなんかじゃないんだから。そういえばこの学校の面接は一分間だったかな。僕は何を話したっけ。

きゅっきゅつ。

「はやくしろ！ 間に合わなくなっても知らんぞ！」

不知火さんは自分の弁を振ってテンションが上がってしまったというらしい。赤ペンでホワイトボードに何かを描きながら、僕の方を全く見ずに意味のわからない言葉で急かしてくる。何の話か知らない。

いけれど、別に急ぐようなことでもないだろう。

「はあ」

何を話そう。

.....。

どうしても話すことがなかったため、不知火さんの印象と今の話を適当に混ぜ、この会長につき従うことを宣誓した。しかしなんだろう、沈黙が長すぎて四階の吹奏楽部の音がここまでじんわり聴こえてくる。

「.....セクハラだよ」

「私は別に嫌いじゃないが、君の頭は少しおかしいな」  
「これまたひどい。」

僕は不知火さんを客観的に評価して、男の僕が付き従うに足る理由と、彼女の性格を主観的に噛み砕いてプラスにプラスに褒めたただけだ。見方を変えればごく正当だろう。だが風間さんは本気で嫌そうな顔をして僕を見つめてくる。なんだろう、女性の敵とも評されない純粹な嫌悪の対象になってしまったのかな。

「質問は無いな」

「うん」

二人してもうどうでもよさそうに。

不知火さんが僕が話している途中まで描いていたネズミの出来そこないの絵だって相当やばいと思うのに。

「では次、萌。期待している」

「不知火さんにそう言われると困っちゃうかも」

不知火さんは持ったままだった赤ペンを風間さんに渡す。僕はパイプ椅子に戻った。

「さてっと」

きゅっきゅとペンで、風間さんは自分の名前を書いていく。

風、間、萌、の三文字だ、が、彼女の名前はこんな字で書くのか。

「かざまもえ？」

僕が首を捻ると、風間さんはこちらに視線を向けた。  
にじ。

何故かまた良い笑顔を僕に見せてくる。仕方がないので僕は、  
んどこそ客観的に百点の笑顔を無理矢理に作り、風間さんに向けて  
やる。

「……ケンくんさあ。ほんっと、変わったよね」

「？」

しかし、やれやれだぜ、といった具合に風間さんはお手上げのポ  
ーズをとった。まだまだ笑顔が足りなかったのだろうか。少し悔し  
いような。

「ねえ不知火さん。生徒生活の安寧を日々祈る同好会って、会員は  
お悩み解消の相談できないのかな」

「ん？ もちろんできるぞ。私がやりはじめたことだからな、その  
あたりの責任は持っているつもりだ」

そっか、と風間さんが言うと、

「じゃあさっそくいかな」

「任せてくれ。して用件は？」

風間さんは両手を祈るように組み、学芸会で演じるお姫様のよう  
なわざとらしさを演出しつつ。

「原島耕くんを昔の姿に戻してあげるにはどうしたらいいのですか  
？ これは『カザメグミ』の悩みというよりも、『チガサキモエ』  
の悩みなのだけど、あたしはどうしたらわからない。不知火さん、  
お願い」

室内の空気が変になった。

「ん……ん、ん？」

さすがの不知火さんでも、一瞬思考停止に陥ってしまったらしい。  
三度も表情が変わった。

チガサキモエ、ちがさきもえ、茅ヶ崎、もえ。うん、つまりはそ  
ういうことなのだろう。



「……そうならそうと、早く言ってくれば良かったじゃないか」  
僕は口を開いた。

「本当にわかつてる？」

半目で見つめてくるが、ここまで言われて気付けないほど僕は鈍感じゃない。

「もえちゃん、髪、ばつさり切ったんだね。似合ってたのに」

うん、と風間さんは頷いた。いいや、ここはもえちゃんと言うのが正確なのだろうか。

「色々あつたもん。たぶん、今のケンくんみたいに、ね？」

にこ、と彼女は笑った。

僕は思わず、そこから目を逸らしてしまった。

小学生の頃、「ケン」という名前で呼んでくる少女が居た。

彼女は男勝りで、少女というよりも少年的なバイタリテイに溢れていた。運動も勉強もクラスでは一段階優れ、男女を問わないそこそこのリーダーシップを誇った人気者だった。

そんな彼女がある時、「あたしにもあだ名をつけて」と言った。僕だけあだ名で呼ぶのは公平じゃない、なんて意味のわからない理由だった。適当なものが思いつかなかったから、僕は図書室の辞書で調べた彼女の下の名前の読みを変えて、それをあだ名とすることにした。

萌。めぐみ。もえ。

いい加減すぎるという理由で文句を言われ、変な口喧嘩になった。当時は無駄に強かった彼女にやがて手を出され、結局僕は泣かされたと思う。その後、普通に名前を呼んでも何故か怒られ、最終的にはもえと呼ぶことになったのだ。

しかしそんな彼女でも、確かに少女であるといえる部分があった。黒く長い綺麗な髪と、とても柔らかい笑顔を合わせ持っていたのだ。むしろ少女というよりも、女性的だといえるだろうか。と、ここま

で言っても、確かだといえることはあまり多くはない。小さな頃の記憶なんて正確じゃないのだ。覚えていることはもつと、単純なことだ。

僕は茅ヶ崎萌が好きで、何よりもその笑顔が大好きだった。

けれど小学生だった僕が彼女の笑顔を真正面からしっかりと見たことなんて、恥ずかしくて一度もなかった。ましてや笑顔に笑顔で返すなど、不可能だった。

そうだ。四年生に上がる寸前に、彼女が居なくなつたその時まで。重たげな言い方をするなら、僕は彼女の笑顔を、受け止めることができなかった。

## 6・インターバル

6・

「偶然の再会か」

風間さんは僕に向けて部活があるのだと言うと、そそくさと出ていってしまった。

結果残ったのは不知火さんと僕の二人で、不知火さんは当然というか、風間さんの悩みを解消するため、僕に僕と彼女の関係について説明を求めてきた。

「正直この再会を喜んでいいのか、よくわからない」

僕にとって風間さん、もえちゃんは、あくまで過去の人だ。それも小学一年から三年まで同じクラスで、僕の初恋の人であるというだけだ。抱きつかれたことも嬉しいは嬉しいが、「好きだった相手に抱きつかれたから」嬉しいのではなく、「可愛い女子に抱きつかれたから」高揚しただけだ。

どうして今になって、と思う。せつかく今、こうして新しいことを始めてみようという気になったのに、昔を思い出させるような材料が絡んでくると、どうにも動きが鈍ってしまいそうだ。

それにあまりに自意識過剰なことを思ってしまうが、風間さんがこの方向性も決まっていけない設立直後の同好会に入ることにしたのは、ひとえに僕のせいだろう。三週間前から不知火さんと話せる仲間なら、例の事件が起こった段階で会に入るものじゃないか。なにしろ事件の内容がろくなものじゃない、不知火さんを一人きりにしておくのもあまり自然ではないだろう。不知火さんが誘っていなかっただけかもしれないけれど、それでもこのタイミングで入会をしてくるなんて出来過ぎている。

はつきり言えば風間さんが何を考えているか見当がつかないのだ。「喜ぶべきだ」

「どうして」

「私は一期一会という言葉が好きではない」

「え？」

溜め息をつくように言っつて、不知火さんはソファに座りなおし、大儀そうに頬杖をついた。僕は風間さんが去った後からずっと立ちっぱなしだったことに気付いて、パイプ椅子に座った。

「萌の悩みを解消しなくてはならないが、正直昔の君というものに想像がつかないな。どんな奴だったんだ？　今みたいに冷え切った鉄板みたいだったのか？」

「冷え切った鉄板っつて……」

「我ながら適切」

「不知火さんこそ故障したダムみたいだよ」

む、と不知火さんは一瞬口を閉じた。

「私はそれほどトイレにはいかない方だ。それから言葉は選んだほうがいい、受け取り方一つで拳が飛ぶ可能性がある」

「例えが悪かったよ……」

こほん、と足を組みなおした。

「ところで君の話聞く限りでは、君達はそのそそ仲が良かったよんじゃないか。どうしてそんなに不満そうな顔をする？　私と二人だけの空間を期待していたのか？」

「それは間違いじゃないかもね」

「んん、照れるなあ」

そんなことを言うならせめて表情も変えて欲しかった。不知火さんはまるで心理でも覗こうというのか、僕の目をじつくりと見たまま話をしてくる。

「どうして新入部員を嫌がる？　新入会員と呼ぶのは性に合わないから、早く五人編成にしたいんだが」

「そうじゃない」

「どうして彼女を嫌がる？　性格は良いと聞く、こんな言い方はしたくないが容姿も良い、第一印象というのは私、私達の活動におい

ては重要なんだ。実際、君も彼女に悪い印象は持っていなかったはずだ」

「そうじゃない」

「どうして過去を嫌がる？　今の君をかたち造っているのはその過去があるからだろう」

「そうは思わない」

「どうしてだ」

「質問ばかりだね」

「君にはこれが最も適している」

確かに僕もそう感じる。直接訊かれればある程度は応える。

「もつともそれ以前に、私より萌と直接話した方が早いな。」「原島耕くんを昔の姿に戻すには」、「と言われても、私が介入したところでは何か変わるわけではないことは承知している」

「ならやめてもいいじゃないか」

「嫌だ」

わがままだ。

「私が君達の昔の関係に無理矢理入りこむことは難しい。なにより、君がそれを許さないだろう？　どうやら君は意図的に過去を切り離そうとしているしな。屋上の件の動機も何かあるのだろうが、その件そのものも君は完全に無かった事にしようとした。ただの、イタズラなんてな。何があつたかは知らないが、自分を殺してしまおうとまで考えた人間がそう簡単に頭を「自殺志願者」から「変わり者」に切り替えられるはずがない。君は本当の意味でおかしいよ、どう考えても。まともな人間としては既に死んでいるのではないかともしわされる。これは私の考えだが、だから、君は過去を見ないようになっているんじゃないか。例えば萌と過ごした時期は君は君じゃなかった。例えば萌と過ごす以前は君は君じゃなかった。例えば萌と離れてから高校生になるまで君は君じゃなかった」

「風間さんを勝手に人生の中心に置くな。それに不知火さんが言った言葉、似たようなことを土屋が言ってたよ」

「人生か。急にスケールの大きな話になったな」

土屋の話はスルーか。

「スケールなんて。人生は大きいとか小さいとかじゃない。生きてるか、それ以外かだよ」

「じゃあ君は？ 『それ以外』の、どれだ？」

「生きてるじゃないか」

「どうかな」

沈黙が流れた。僕は気を取り直す。

「今は風間さんの悩みを解決するんじゃないかなかったの？」

「ついこの前も言ったが、私は君にも興味がある。そして私の行動の優先順位は常に変動する」

「小学校の夏休みの宿題とか全然できなかったタイプ？」

「誰も遊んでくれない、カブトムシが全く見えない時間帯は一日のうちいくらかはあるだろう」

「寝なよ」

「当時のそれは優先順位が低かった。最近はずる寝るのが楽しいのだが」

変わってるなあ。

「……よし、インターバルは終わりだ」

不知火さんはおもむろにソファを立って、その背もたれに乗せていた鞆を掴んだ。

「行くぞ」

どこに。

「やはり、直接話さない限りはこじれた関係の解消なんてできないな。言いたいことをぶつけ合え、遠慮のかけらもない君ならそれができる」

そんなことを言って不知火さんが僕を連れてきた場所は、部室棟の外だった。校舎側の陸上競技グラウンドと、部活棟側のサッカーや野球に使う土のグラウンド。さらに部活棟側には、フェンスで仕

切られたテニスコートが棟を囲むようにぐるりと回る。そしてその辺で血気盛んにあるいは穏やかに繰り広げられるそれぞれの部活を横目に、僕らは部室棟のすぐ横にある、外の部活動用の大きな器具倉庫の前に並ぶフリスビー部を眺めていた。

「掛け声！」部長らしきジャージの女生徒が叫んだ。

「さーん！」何故か三からだった。

すると横一列に並んでいたフリスビー部の右半分が移動し、左半分と向き合う。

「構え！」

そして右半分のほうがフリスビーを横に構えた。

「しゃーっ！」

投げた。左半分だったほうの生徒は、フリスビーをキャッチした。

「なにこれ」

「フリスビー部だな」

そうなんだろうけど、何をしてるのか。

「一年、ぜんぜん甘いよーっ！」

よくわからない、しかも何の練習をしているのだ。

「すいませーんっ！」

風間さんもジャージ姿でフリスビーを追いかけていたが、やっぱりよくわからない。

不知火さんは「他の部活動を見てくる」と言ってふらふらと何処かに歩いていってしまったのに、僕はここから動いてはいけならしい。

フリスビー部の謎の練習を延々と眺めるのは辛い。それにフリスビー部は女子が多いため、ずっとここにいる僕はストーカーの類に見えてしまう気がする。時間が経つにつれて視線がちらちらと僕の方に向けてきたりして、居心地が悪い。僕はとりあえずなんでもない顔をつくるって、ずっと携帯でネットをやった。でも気力は定期的に刺さる視線に向けられて、無気力にはなれなかった。

「耕くん、どしたの？」

やがて部員達が見かねたのだ、風間さんがやってきてしまった。さすがに部活の邪魔をする気はなかったのに、これは不知火さんのせいだ。

「風間さんこそ何かあった？ 今は部活の最中じゃないか」

「先輩たちが気にしてたからあたしが知り合いつてことで来たんだよ。ていうかそのとぼけ方はかなり無理があるよ」

僕だつてわかつてたけどね。それは。

「風間さんと話せて言うから困つてたところだったんだ」

「不知火さんに言われたから来たの？」

「そうだけど」

言つと、風間さんは無言の笑みを向けて「ばいばい」と手を振つた。

「え？」

「じゃあまた明日ね。早く帰らないと、おたけび事件以外にも変なうわさが立つちゃうよ」

「風間さん？」

駆け足で戻つていく風間さんの背中を見ながら、やっぱり小柄だなあと僕は思った。昔は僕より背が高かったのに、女の子は成長が止まるのが随分早いのだ。

不知火さんがここに戻つてくる気もしなかったので、僕はさっさとカウンセリング室に戻ることにした。おたけび事件というワードがものすごく気になったけど、今は置いておく。

戻つてみると、カウンセリング室には誰も居なかった。鞆も僕のものしかない。そういえば不知火さんは、鞆を持って外に出ていたが、もしかして帰ってしまったのか。不知火さんの連絡先はわからない。それだと鍵が返せない。そうすると僕は帰れない、のか。どうせ使われていない教室だし、盗まれるような貴重品もないだろうけど。

部屋を見渡す。やはり微妙に汚く、段ボールが並び、壊れた三角



コーンも壁の奥にあった。この調子なら見るたびに発見が増えそう  
だ。窓の外ではまだ部活動の最中で、野球部が列をなしてダイヤモンドの上をのたた走っていた。フリスビー部もあんな風に傍から見てわかる練習をすればいいのに。吹奏楽とか美術とか、文化系の部みたいに目的をもっと明確にしたり。

窓際にぼうつと立っていると、歩きまわっていた足が僅かに疲れ  
てきて、僕は出しっぱなしのパイプ椅子に腰かけようと思った。

「……………」

ふと魔が差して、不知火さん専用っぽいソファに座ってみよう  
と思った。見た目はかなり古いものだが、その一人掛けのソファが結  
構座り心地が良さそうなのだ。僕以外に誰もいないのに、さりげな  
く近付いてみる。

「……………」

と、ソファの上に鍵が乗っていた。まさか行動を読まれていたか  
！ なんて思ったけど、別にここに放置するのは自然だ。いや、ど  
うなんだろう。

僕はそれを拾い上げて、座った。パイプ椅子のほうに。

一息ついて、不知火さんはやっぱり変わっているなあ、と嘆息を  
漏らしそうになる。

悩みを解決すると言いながら、彼女は何も行動していないじゃな  
いか。結局ケンカの仲裁をしようとする無能な教師のように、一歩、  
二歩ほど下がった地点で当事者に歩み寄るように進言するのみだ。  
まあ、優先順位の話もある。実際には不知火さんは、僕らのことな  
んでどうでもいいのかもしれない。僕のことに興味がある、と確か  
に言われはしたが、僕の関係する全てに興味があるわけではないの  
ではないか。

僕自身に興味はない、僕の考え方や行動に興味があるだけだとか、  
不知火さんしか持ち得ない妙な尺度で一方的な解釈をしているよう  
な気もする。自己中心的である、と自称している以上、そういう考  
え方をしても変ではない。変だけだ。

土屋は不知火さんとどういふ付き合い方をしてきたのだろう。少し考えてみても、不知火さんは色んな意味でかなり難しい相手だ。手玉に取られる、ということはないけれど、こちらが人物像をしっかり掴むことはおそらく、不可能だ。

「……」

帰ろう。

ここまで考えて、立ちあがる。

部活動中の風間さんにわざわざ割り込んで話をしようとしたところで、あっさり帰れと言われてさらっと敗走したのに、僕はそんなことを気にも留めていないじゃないか。まさか男としてのプライドを維持することすら諦めてしまったのだろうか。

差し置いて不知火さんのことを考えてしまうなんて、まるで片想いでもしているみたいだ。

## 7・コミュニケーション

7・

停学明けからの僕の学校生活は、それなりに慌ただしいものなのかもしれない。

基本的に気持ちの慌ただしさは不知火さんを通したもののけど、土屋やその友人の山田と鈴木以下省略達ともそれなりに会話をするようになっていた。元々僕自身、相手を選び好みして付き合っているタイプではなかったので、例の騒ぎを知った誰かが僕へと関わることしかできなかったのだ。

そのことは、僕にとって少なくともマイナスではない。他人と関わることは一般に推奨されることだ。知れないことも知らないことも、コミュニケーションを媒介として得ることができ、必要とされるコミュニケーション能力自体も、人との関わりを増やしていくことでねずみ講式にバリエーションを増やすことができるものだ。

端的に言えば「誰かと関わるのは面白い」、そういうことを示したい。

「おい原島、どうということだよ！」

どうということだと山田に訊かれても、僕は積み重ねたコミュニケーションの結果を日々の生活に還元し続けているだけだ。僕がどうこう、というよりも、僕の周囲がごく自然にそうなってしまうだけなのだ。

僕の机の上には赤色の風呂敷で包まれた小さな物体がある。正面では土屋が椅子に逆向きに座り、右側には机と椅子をずらしてきた山田と鈴木が目を剥いて風呂敷を見つめている。

「隣のクラスの間さんだったっけ、あの人ちっちゃくて可愛いんだよねえ。もっと年齢が低ければ最高なのに」

鈴木が言った。その通りだ。確かに間さんは可愛い。同年代で

ありながら中学一年生のような子供っぽい風貌が可愛い。鈴木に興味は追求しない。

「どういう関係だよ！」

「俺もちよつと気になるな。原島、隠し事は無しの方で頼むぜ」  
まだ夏には早いのに暑苦しく詰め寄ってくる山田と、楽しそうに笑う土屋だ。

「別に、風間さんは片想いしてた幼馴染の女の子だよ。小学校の頃引越されちゃったんだけど、偶然この学校で再会したんだ。でもだからって、わざわざお弁当まで作ってきてもらうなんて、本当に申し訳ない」

山田と鈴木動きが固まった。そして、昼休みが始まった途端に僕の教室にやってきた風間さんから受け取った赤いお弁当の包みと、僕の顔をじろじろと何度も見た。

小洒落た関係にでも聞こえたのかな。

発端は先週の金曜日にさかのぼる。

「萌と原島君は冷戦状態のようだが、そんな二人に私から究極の提案を試してみようと思う。もちろんこれが効果覲面で一瞬のうちに問題解決に至れる最高の手段とは言えないが、時間をかければ丸く収まる方法だと信じている。まあ。私としての正直な意見を言わせてもらうなら、私達の同好会もそろそろ本格的に動きだしたい頃なのだ、君達だけの問題に携わってでは時間を有効に扱えない。私の提案を受け入れ、会の活動と並行してくれば嬉しい。どうする？」

僕が風間さんに門前払いのような扱いを喰らったあと、風間さんは一応部室に顔は出しても、あまり僕とは関わろうとせず、不知火さんが部室の長机でまとめていた書類のような紙束とにらめっこしたり当たり障りのない会話をするのみだった。もともとフリスビー部の活動が月、水、金曜日で、それ以外の日にしか僕と顔を合わせなかったため、すっかり組みあげる前に自壊した関係を修復するきっかけがなかった。

それを不知火さんは見かねたように、こんな提案を振るうとしてきたのだ。ように、とは字面通り。不知火さんは知らぬ間に、生徒のカウンセリング、お悩み相談的な位置づけでちゃっかりと多方面に声掛けをされていて、そちらに手を回したいのだ。

「確かにその机もごちゃごちゃしてきたしね」  
僕は机を指した。

「ああ。メモ等々のまとめだ。日付やら内容を順に整理して、可能なものから手早く崩していかなければな。こういうのは最初が重要だ、信用を得るには初っ端からほどほどの成果をそれなりの早さで提出していくべきだと思っっている」

風間さんはどうでもよさそうな表情でそれらをつまんだり、元々ここに放置されていた古い地図を丸めたり開いたりしていた。僕は訊く。

「それで提案は？」

ん、と小さく返事のような声を出した不知火さんは、長机の前から一人掛けのソファへ背中から倒れ込み、足を組みつつ頬杖をついた。何故だろうか、命令系の言葉を言う直前、不知火さんはこういう尊大なポーズを取ろうとする。

「二人とも、今日から見掛けだけでも男女交際の形式で付き合え。ラヴが生まれてもいい」

この時僕はどんな顔をしていただろうか。まさか不知火さんは本当に頭がおかしいのではないかと苦い顔をしていただろうか。それとも、風間さんを変に刺激しないように無表情をつくっていたのだろうか。もしくはそんなことができるはずもあるはずもないと馬鹿にした笑いを浮かべていただろうか。

「やだ」

風間さんが即座に言った。当然の反応だけど、たぶん僕は反射的に悲しい顔をした。

「萌、君は原島君が嫌いなのではないんだらう？ ジャパニーズであるのに、再会の喜びのために抱きついたらいだからな」

やはりあの時見ていたのか。

だが風間さんは口を強く閉じてかぶりを振る。

「違うよ！ 感動の再会とかあるじゃん！ そういうノリ！」

死人扱いしていたのに。僕にとつてはかなり苦しい言い訳に聞こえるのだけど、不知火さんは頷いた。

「それでもいい。その調子で抱きつければいいんだ。私達青少年は感情や感受性のアンテナがすこぶる高いからな。嘘でも好きだと言いつづければ、いつの間にか自分はそのと自然に向き合おうとする。原島君から聞いたが、君達はもともと悪い関係ではなかった。なら、正面からぶつかり合った方が話は早い。それに萌の性格も加味して私は言っているんだ、萌はもつとストレートな物言いをするタイプじゃないか。というかそれ以前に、萌がこの部に入ったきっかけも原島君の入部を聞いたからだろう。あまり言いたくはないが、目の色が変わったのを私は覚えているぞ。萌に伝えた時は話半分のつもりだったんだがな、これは好機と誘わせてもらった。つまりはそういうことだ。私は萌が原島君に何かしらの期待をしていると踏んだ。私もその一人だと言ってもいいが、とにかく私はそこにつけこんだ。つまりは萌が原島君の存在を介してこの部に望む立ち位置を私自身がはつきり見ておきたいということだ。私のわがままともいえるが、君の望み、解決したい悩みは、原島君を昔の姿に戻したい。結局はそれだ。萌がもともと接触したかった原島君が今と昔のどちらなのかはわからないが、萌が望む方向に持つていくにはやはり萌自身が動くことを推奨したい」

矢継ぎ早とも言いきれないこの早口によって、風間さんは困り顔を見せた。さすがに普通のクラスのリーダータイプであったもえちゃんも、数百人レベルの人間を相手取っていた変人とまともに会話する気にはならないらしい。

「結局さ、不知火さんは何もしないんでしょ？」

僕は言った。この前思っていたことだったので、丁度いいタイミングだ。

「ん？ その言葉が出る時点で、私は君に影響を与えているとも言えると思うが」

「どうして」

「君の言葉を私なりに曲解するなら、『不知火さんがわざわざ言わなくてもちゃんとオレはそうしていた』というところだな。例えて言えば、親に夏休みの宿題の進捗を聞かれ、今やるどころだったと怒る小学生のようなものか？」

不知火さんは親に怒られないタイプだろうなあ、と思った。僕は気持ち僅かにむっとした。

「不知火さんにそう言うのは、本来的な意味で不知火さんが何もしないからだよ。ただ指示、命令を出して傍から眺めて終わり。それで問題の解決になるとは思えないし、それならそもそも当事者同士で」

途中で話すのをやめた。とりあえず反論してみたが、そういう問題じゃない。

不知火さんは足を組みかえる。

「そうだ。君が言葉を止めるのはそういうことだ。もともと君達、この問題の当事者同士には自らで問題を解決する能力があると私は評価している。言葉が上から目線で悪いが、客観的にな。それに私の目的は悩みを解決することで、私が問題の全てに体当たりしていくことではない。私達が青少年でいられる時間は長くないのに、余計な悩みをずると解消できない人間は何処にでも居る。そういう誰かへは、きっかけを与えるだけの場合もきっちりサポートしていく場合もある。物事には常に大なり小なりの解決法があり、私はどれが当事者やその周辺に適しているかを一応は吟味しているつもりなんだ。もともと、他人をないがしろにするつもりはないと言っただろう。君の性格を見る分には私の過剰な介入も嫌がりそうだな」

不知火さんの言葉を思い出せば、こんな返答が来るのは見えていた。悩みが自分の介入によって消えるのが気持ちいい、しかし程度

はそれほど気にしていない、とも考えられた。やはり変わっている、むしろ人間が出来過ぎている。しかしこういう考え方をしているということなら、もっと素直に相手に取り合ってみせるほうが相手も安心や信頼ができそうなものだ。僕もわざわざ、不知火さんの考え方を説明するだけ、という反論をさせられそうになった。

「……別に、不知火さんがやたらと関わってきて嫌がらないよ」  
ある意味で面白いし。

「そうか？」

「心は狭くないつもりだからね」

でしょ？ といった具合で風間さんを見ると、風間さんは随分と疲れた顔で僕達を見つめていた。

「……二人ともヘン……」

「それでもない。」

「……でもやだ。あたし耕くんとは難しそうだもん」

風間さんはそれから首をひねったりきよるきよるとしたり、不知火さんを見定めるような目をして、もすぐに真っ直ぐに見返されたりして、やがて思い出したように言ってきた。

「こつちだつて風間さんをうまくコントロールできるとは思っただけ、不知火さんの方針なら従わないこともないよ」

「耕くんって不知火さんの犬みたいだねー」

番犬にはなれないし、可愛げもない犬なんて誰も欲しがらないじゃないか。風間さんは苛立たしげに腕を組んで、しかし格好はついていなかった。

「ん、私は庇護欲を掻き立てられるタイプの犬が好きだな」

そんなこと訊いてない。でも不知火さんは続ける。

「しかしだ萌、そう言うならこれは罰ゲームとして処理させてもらっぞ」

「罰つてなに？」

「萌、自己PRタイムのルールをもう忘れたのか？」

「あれ先週の水曜日。今もう金曜日だし、そりゃ忘れちゃったよ」



僕は黙っていたが、風間さん同様にルールなんて思い出そうとしても思い出せない。罰、罰。

「発表が三分に満たなかった者には罰を与える。私は間違いなく言ったぞ」

「ああ、確かに言ってたね。風間さんすぐに終わっちゃったし」

正直覚えてなかった。けど、一応話を合わせておく。この風間さんの件は軽く終わらせてしまいたい。

「そんなぁ……………」

肩を落とした風間さんは、目をぎゅっと閉じてうつむいた。一方では神妙な面持ちで両手を顔の前に組み、風間さんに向けて不知火さんが。

「では罰を与える」

楽しみに。

「萌はこれから原島君に尽くすんだ。朝から晩まで原島君の事を考えろ。今原島君は何してるかな。他の女の子と話してないかな。知らないうちに総助とイケナイ関係になってたりしないかな。晩御飯は何食べてるかな。テレビは何を見てるかな。部屋ではどんなことをしてるかな。今日は何時に寝るのかな。くらはいは自然に考えられるようにしてほしい。ちなみに原島君、好きなものは？」

「不知火さんと春巻きかな」

「私か、照れるなぁ」

「……………はぁ？」

「……………ああ……………」

ああ、言葉を間違えた。風間さんが鋭く睨んできた。

「……………最低っていうか、デリカシー無いっていうか、信じられないっていうか、今の流れるにわざわざそれを言うてるのはあり得ないでしょ？ 耕くんケンカ売ってるの？ 売ってるよね、完全に、あたしもね、それなりに大人になったつもりだけど、手を出していいところはわきまえてるからね、ていうか殴っていいかな、殴られる理由はわかるかな、ああ、やっぱり訊かない、殴るからね、あた

し今ちよつと不機嫌だから」

「いや。あてつけとかそういう意味じゃないよ。不知火さんの生態に興味があるだけ。ああ違う、変態的な意味でも無いからね、ずっと水槽の中に入れて見ていたとかそういう。違う。そういうマツドな意味でもないんだよ、なんていうか……ね？」

「ね？　じゃないでしょ変態馬鹿！」

風間さんが冗談でもなんでもなく、真つ赤な顔に半泣きで、脱いだ上履きを思いきり顔に投げしてきた。不知火さんは全く止める気もないようで、頬杖をつきなおして悠々と僕らを眺めるのみだった。

それから頭を何度か引つ叩かれたけれど、容赦をする気はあまりなかったようで普通に僕は泣かされてしまうかもしれないと思った。たぶんその時の風間さんは、間違いなく「もえちゃん」だったのだと思う。

僕がその行動に自然に対応できなかったのは、きつとそういうわけだ。

そんな過程があつたのにも関わらず、何故か月曜日、風間さんは僕に弁当を持ってきた。事前に携帯に連絡を入れてきて、教室で待っていると言われた。「劇物を入れてないよね？」と僕が訊いたら腹を殴ってきて、僕が弁当の包みをしっかりと掴んだのを確認するとさつさと隣の教室に帰ってしまった。

微妙に不安だったけれど、同様に教室に帰ってきた僕は、土屋や山田達に囲まれることになったのだ。

「じろじろ見ないでよ、食べられない」

僕は言う。

「食べるのか？　なんならグルメ山田が毒味をやってもいいがソムリエ的な存在の人は進んで毒味なんてしないんじゃないかな。僕のイメージだけど。」

「幼馴染からの手造り弁当ね。そういう漫画とかいっぱいあるけど、原島と風間さんはそういう趣味が？」

鈴木はちよつと気持ち悪い目を輝かせている。

「お前は正直モテるタイプじゃないだろ？ ずばり何を盛った？」  
ずばり土屋、君の幼馴染が毒物そのものだよ。

僕らは三者三様意気揚々とする男子高校生たちを前に、何も気にしていない体で赤い風呂敷き包みを解く。中には銀色の楕円形弁当箱が二段積み重なっていた。

「上がおかずだな」

山田が言つと、他の二人は「異議なし」と揃えた。こいつらは一体なんなんだろう。この弁当を観察する意義だつて無いだろう。

「うるさいよ」

僕は呟きながら、上と下の箱を並べ、左右に置いた。

「どっちからだ？ 右か、左か」

今度は土屋だ。いちいち彼らに構っていてももう鬱陶しいので、僕はさつさと事を進めることにした。両手でそれぞれの蓋を掴み、容赦なくためらいすらなく持ち上げる。

「春巻きか」

春巻きだった。それも、生春巻きだ。半透明のライスペーパーの中に、エビやレタス、よく見るとニンジンにニラ、もやしや春雨も包まれているようだった。彩り鮮やか、微かに酢のようなすっぱい香りと、磯のような香りがして食欲をそそる。

なんだろう、本当に不知火さんの言つた通りにするため、風間さんは自己催眠でも決行したのだろうか。僕は確かに春巻きが好きだ、生春巻きだつて好きだ。わざわざ生春巻きなんて作つて学校に持ってきてくれる風間さんなんてもつと好きだ。大好きだ。このまま生春巻きを啜えたまま風間さんを抱きしめに行こうと思つたが、そういう柄でも無いのでやめた。やめたくなかつたが、世間体というものが多分にあるのだ。

どちらの箱も生春巻きだ、それはもうそれでいい。好物なのだから仕方がない。

そして土屋達に一口も食べさせることなく完食し、風間さんに感

謝のメールを送った。

「……………」

放課後にもう一度直接お礼を言おうと思って風間さんを探そうとしたけれど、急な便意によって彼女の部活開始時間が来るまでずっとトイレに籠らなくてはならなくなったのは、また別の話だと思いたい。

肉体に負荷がかかるようなコミュニケーションは、僕の趣味じゃない。

## 8・イカれた紐無しバンジー野郎

8 .

学校階段の踊り場にある課外活動用掲示板は、新入生を迎え入れてからは活気がなくなっていた。しかしながら僕達「生徒生活向上推進ボランティア同好会」の宣伝ポスターは学校すべての掲示板の右下隅に常にでかかどその存在をアピールし続けている。

『学校生活に悩みはありますか？

友人関係、部活動、勉強や進路、プライベートな問題まで、私達同好会がお手伝いします！

御用の方はご希望の要件と共に 会長 一年二組 不知火 水玖  
まで

または放課後 部活棟一階カウンセリング室にて 月々金』

と、気持ちの悪いネズミの出来そこないの顔面が宣伝ポスターには描かれ、当のポスターの告知内容までは頭に入っていかなそうだった。

もう数日で六月になろうというある日、不知火さんは突然そのポスターを全部剥がしてきて、改めて作成すると言い始めた。最初のポスター作成を僕は手伝っていなかったため、随分急な話に聞こえた。

「毎月趣向を変えるつもりだったが、そもそもポスター自体に問題があったらしくすぐ変えなくてはならないらしい」

「やっぱりネズミが気持ち悪いんだろうね」

今日は僕と不知火さんの二人だけだった。といつても実質的にこの会で動いているのは今のところ不知火さんだけだ。

僕が風間さんと仮面カップルになることが決定した生春巻き弁当

の日、不知火さんは「そうか」と首肯したのみで、相談者をカウンセリング室に迎え入れていた。部屋の隅で話を拝聴していたところ、その相談者は不知火さんの中学時代の友達で、バイト先の大学生に言い寄られていて大変だとか、そういう話だった気がする。ちゃんとして聞いてなかったが、ほとんどがクラスの中では大声で言えないような自慢話のようなもので、不知火さんはただただ興味深げに頷いていただけだった。

その相談者が満足してパイプ椅子を立った時、不知火さんは「他にまた相談があればまたいつでも来てくれ。友達にも宣伝を頼む」と笑顔で言っていた。たぶん、それが不知火さんの処世術なのだろう。その後すぐに紙のメモを持って「ちょっと出てくる」と言った不知火さんは、おそらく他の相談にも携わっていたに違いなかった。それは蜘蛛の巣を張り巡らせるように、誰かとの繋がりを増やしに行ったともいえるかもしれない。

「違う。このウサギは個性的で目を引くデザインだ……と、思ったいんだが。うん。昨日の帰り、掲示用ポスターの内容で生徒会から注意が来たんだ。『進路』と『プライベートな問題』はそれぞれ教師と個人で対応していくのだということ、書き直せと。ぶっちゃけた話『友人関係』と『部活動』が『プライベートな問題』に被っていると思うんだが、ここはグレーなんだろうか」

剥がしてきたポスターの山を大事に抱えて、不知火さんは不満そうに口を尖らせた。僕はその姿を見つめたが、やはり抱えられているのはウサギではなくネズミの絵だった。

「やっぱり手伝った方がいいかな？」

そう言うと、さらにぶすつと口を尖らせてきた。

「え？ そんな表情をされてもどうしたらいいか……」

「いいかな、じゃない。このことを君に全て任せたいからこの話をしたんだ。最近は生活も落ち着いてきて暇だろう」

「そうだけど別に最初から暇だけど」

普段ここにおいても、部屋に放置されている昔に没収されたらしい

漫画やら雑誌を黙々と読んだり、携帯をいじったり、不知火さんや風間さんとうでもいい話をしたり、汚いボールを磨いたりするこ  
としかやることがないのだ。

にい、と口を曲げる不知火さん。

「では頼まれてくれ。この剥がしてきたポスターの裏に新しいもの  
を書いてくれればいい。貼り出しは今日の帰りに一緒にやるつもり  
だから、それまでにやってくれたら私は嬉しい。それと生徒会の承  
認は気にするな、また注意されたら書き直せばいいから」

もたれていたソファから立ち上がり、不知火さんは小さなメモ用  
紙を一枚ぺらりと取り出して、ドアの方に歩いていく。

「ん……。できれば、だが。可愛いので頼む」  
がららら、ぱたん。

訊いてないけど、その捨て台詞のような要望には応えたほうがい  
いのかな。

「どうしようかなあ……」

それから三十分ほど。

室内に放置されている太い水性ペンを弄びながらレイアウトを考  
えるも、僕の創作センスは皆無なので思いつかないし、可愛いもの  
が描けないことに気付くのにそう時間は掛からなかった。そもそも  
不知火さんのセンスは、なんなんだ。変なものを書けば納得してく  
れるのか。

がろ、が、がっ、がたた、がたたた。

「あ、不知火さん？ ごめん、全然進んでな」

「何よこれ！ なんで開かないのよ！」

いきなり荒々しく部屋のドアが開けられたのかと思った瞬間、知  
らない女子の文句が聞こえてきた。ドアは何かにつ掛ったのかち

やんと開かずに、やってきたらしい女子の腕だけが室内に伸びてきている。

「確かそのドア、ゆっくり開けないと駄目でしたよ」

そんな話を不知火さんはしていたような、していなかったような。最初の日には注意されて以来、特に言われなかったから気にもしていなかった。

「誰！」

腕がぴん、と上に向いて、手を開いた。

「普通に部員の一人です、そちらは？」

「生徒会ですけど！」

へえ。

「ですけど、なんですか？」

「開けてよバカ！」

中指が立った。

「じゃあ開けません。暴言は苦手です」

「開けてください変なヤツ！」

「暴言は苦手です」

「どうせ不知火とつるんでる奴なんてろくなやつじゃないのよ！」

ものすごく面倒くさい相手な気がしたので、僕は彼女を放置することにした。不知火さんと旧知の仲の人と直接会うのは土屋を抜いて二人目、ということになるのだろうか。

どうも彼女は、こちらに敵意を持っているような。

先日の相談者はどちらかといえばギャルっぽい（もともとずば抜けてギャルギャルした人が居るような学校ではない）系統の風貌だったけど、不知火さんを嫌っている様子は見えなかった。繰り広げられていたのは上っ面だけの一方的な自慢話でも、不知火さんに対して迷惑をかけてやろうとか、愚痴を聞かせてやろうという感じではなかったのだ。もっとさっぱりした私生活トークというか、ただの『内緒な恋バナ』というか、『恋バナ』は死語か。

「開けてっば！ なんなのよもう！」



だんだん、とドアが叩かれる。不知火さんを嫌っているような口ぶりのこの人は、一体どんな関係なのだろう。というか、こういう攻撃的なタイプは不知火さんと合うのだろうか。少なくとも風間さんレベルの攻撃性で限界、辟易してしまう僕とは合わないけども。僕は長机に椅子を寄せて、一息ついてポスターを眺めた。

「難しいなあ」

ああ難しい。不知火さんはいろいろと難しい。

「……………」

ドアの向こうがおとなしくなった。腕は何故か突っ込まれたままだ。僕はその細い隙間を覗いてみようと思ひ、近付いた。純粹に興味があつたのだ。

「あのさ」

「はい？」

その途中で声がかかる。

「あんた不知火とどういう関係？」

「普通にクラスメイトですけど」

「……………ですけど、何？」

うわあ、まるつきり僕の返しを真似てきた。

「……………ですけど。クラスで不知火さんと話したことはありません」

「は？ じゃあどうやって絡んだの？」

「土屋、あー、不知火さんの中学時代の友達と知り合ったついでで、なし崩し的にこうなりました」

素直に答えてしまつていいのかな。

「……………」

それに、ドアの奥の雰囲気がちよつと変わった気がする。

「……………へえ。てことは土屋君、不知火と話すようになったのかな。他には何かある？」

「は？ いや、得体の知れないあなたに話すようなことはないですよ」

この人は土屋とも知り合いなのか？ ということは同級生か。僕

が何気なくドアの隙間を覗いてみると、ブラウンの瞳がぎらんと見返してきて、目が合う。

「つウウウウかまえたアアアアッ！」

がごん、とおそらく彼女は顔面をドアにぶつけつつ、そこから腕がさらに伸びて僕の腕を掴んだ。すごい握力であつという間に僕もドアに引き寄せられてしまい、相手の気配がドア越し至近距離で感じられて妙な感覚だった。

「不知火！ 部員の一人を捕まえた！ 中に居るならドアを開けて出てきなさいっ！」

ああ、とりあえずこの人も変だということがわかった。

「不知火さんは居ませんよ、ていうかこれ、わざとドア止めてるわけじゃありません」

「嘘つくな！ わたしは嘘が！ 大嫌い！」

だけどこの人の自己紹介川柳は嫌いじゃない。

「じゃあ外から回って見てきますか？ それともこのまま手を繋いで不知火さんが来るのを待ちますか？ ああそういえば、真っ暗闇の洞窟で出会った男女の話がありましたね。彼らはその洞窟の中で不安や恐怖と戦いながらお互いを励まし合い、その会話の中で何を思ったかトチ狂ったのかこの洞窟を無事に出られたら交際を始めようだとかいう約束をしたんですよ。それで数日後、彼らが太陽の下に出た時、お互いの肌の色が違うことに気付いて……さて、二人はその後どうなつたんでしたっけ。個人的には二人には幸せになつて欲しいのですが、当時は人種の問題もあつたりして、結局語られていないかもしれませんが。ううん、この場合はどちらに」

「話長いけど今手繋いでないしそもそも全く関係ないからねこの状況。つか当時っていつの話よあんたアホじゃないの」

「良い話じゃないですか。結ばれたなら」

「うん。とりあえずドアの向こうのあんたとは間違いなくソリが合わないことが確定したわ」

「じゃあ不幸な話ですね」

「わけわかんないしキモい」

正直否定できなかつた。言われてみれば僕は突然何の話をしているのだろう。洞窟なんてこの現代社会とはあまりにもかけ離れていて想像の余地もない、非現実でしかないのだ。

「ですね。なら、もつと身近な話にしましょう。これは友人の話なんですけど、そいつはとにかく食堂や飲食店に入るのが大好きな奴で、最近は市外の方にも手を伸ばしているんですよ。それでそいつ、イタリア系の喫茶店に行ってそのマスターと口論になったらいいですよ。なんでもマカロニとパスタが」

「聞いてないしウザい」

そうだ、山田と鈴木のつまらない話をつまらない僕がしてもしょうがないじゃないか。

「ところで生徒会が何の用ですか？」

あ、と息が詰まったような音が聞こえた気がした。

「ポスター！」

「ポスター、はい」

そこで彼女は咳ばらい。

「ポスターは生徒会の承認を受けないと貼っちゃいけないし、掲示していい枚数も規定で定められていて十枚だけなのよ！ 不知火ったら手当たりしだいに貼るわあのキモいネズミの絵が全面的に出てるわ無駄にポスターが大きいわ文章の表記も課外活動の域を越えてるわで注意させたのに、なんか無視されたから来たのよ！」

「ああ、あれってやっぱりネズミですよ、ウサギじゃない」

「うん、キモ可愛い感じの」

「キモいですよね」

.....。

何故ここで黙るのだ。僕の間が悪かったのか。可愛くないと思っ  
ているのは僕だけか。

「ええと、不知火さんは一応無視してなかったみたいですよ。すぐにポスターを剥がして、新しく描き直すように言いつけてどこかに

行きましたので」

「目に余りそうだったから作成には生徒会が立ち合うか、下書きの提出を求めるとも言ったはず。このドアの様子じゃ、そうではなかったみたいだけどね」

もしかしたら不知火さんはちょっと抜けているのかもしれない。

「だから開けてよ！ 開けないとあんたの制服のブレザーのボタン取るわよ！」

親にいじめられているかどうか心配されるじゃないか。それは勘弁してほしい。

「わかりました、わかりましたから、一旦離してください」

「逃げる気？ 窓から逃げたつてすぐに追いかけるわ」

「そこまで悪いことはしてないつもりです」

ここでまた沈黙した。この人は今のところ、再開した学校生活で最もやりづらいな。

「……いいわ」

手が離れる。僕はドアの様子を見て、とりあえず押してみた。

「やだ触るな！ いま胸が『ぐっ』てなった！」

こいつ頭おかしい。

「はいはいすいませんすいません」

ドアを勢いよく開けたら突っかかって開かなくなる。大方古くなつたレールが勢いに負けてずれるというところだろう、そう思っただけなのに。仕方ないのでドアの左右を持って、軽く上に持ち上げた。

「ごが、と音がして、やはりずれていたドアがレールの溝に戻り、するすると動くようになった。

「直った？」

「はい。入るならゆっくりお願いします」  
「がらがらがら。」

ドアの向こうが徐々に露わになっていく。まさに僕の眼前に、まるでカーテンでもペロリと開けるように。

「げっ……あんたもしかして、『おたけび事件』の原島とかいう奴？」

僕の正面には苦い顔をした茶髪パーマの女子が居て、先程の暴言に似つかわしくない柔らかそうな容貌だった、性的な意味で。そして視線を胸のリボンに合わせたところ、グレーの布地に緑色の筋がいくらか入っている。リボンとネクタイは一年が赤、二年が緑、三年が青色になるので、彼女は二年生であるということは確認できた。生徒会だし、敬語を使っておいて間違いはなかったようだ。

「いいや、そんなことより。」

「そうですね……そのおたけび事件って、もしかして有名なんですか？」

「相對する先輩は変なものでも見るような目をしながら、小刻みに何度か頷いた。」

「奇しくも僕の突発的とも衝動的とも言えぬ、しかし計画的でもないずさんな行動は変な名称をつけられていた。」

「飛び降りるんだか降りないんだか。あれ、部活棟の屋上だったし、昼休み終わった直後だったし本棟の教室から凄い見られてたからね。あんた気付かなかったの？」

「部活棟、といえども音楽準備室などの特別教室は基本的にこっちに置かれているため、確かにそうだ、隣の本棟から見えないこともない。僕も何人かは確認した。」

「先輩がつかつかと無遠慮に中に入ってきたため、すかさずパイプ椅子を出す。」

「でもすぐに騒ぎは終わってたじゃないですか」

「携帯で撮ってた人が結構いてさ、あの時は話題に良くなってたわよ？ 授業中でも先生にネタにされてたわ、不謹慎で不快な感じで」

「ひどい教師もいるものだ。自殺をネタにするのは場合によってはとても洒落にはならないから、絶対にやめたほうがいいのに。そのまま僕がぼろっとしていると、先輩はパイプ椅子に座り、苛立たし

げな顔で部屋中心の長机へ椅子をずりずり引いて移動して、ポスターを掴んで眺める。

「改めてみてもキモいわね……」

化石でも見つけたような顔で呟いた。

「あ、先輩は絵とか描けます？」

「なんで」

「不知火さんにポスター製作頼まれたんですけど、なかなか案も思い浮かばないし絵も描けないんで。先輩が描けるなら生徒会の立ち合いも必要ありませんし、滞りなく話が進むんじゃないんですか」唇を軽く噛んだ先輩は急に立ちあがって、黒板のほうに歩いていた。

「基本暇な生徒会的には悪くない提案だけど、わたしには絵心がないし、個人的に不知火の手伝いをするのもちよつと嫌」

話しながら適当に取った短いチョークで何かを描き始めているが、確かに途中経過では何を描いているか。

さらさら。

「できた」

「なんですかこれ」

「ネコ」

完成形が大小様々な四角と三角の塊だった。その中にわざとやったんじゃないかと思うくらいひどい象形文字がところどころに刻まれ、古代文明の石碑のようになっていた。

「描いてる間は毛並みとか陰影とかもちやんと想像してるのよ？」

再現力が圧倒的に劣ってるだけ」

「なるほど、お手あげですね」

僕が適当に言うと、先輩は片眉を上げてヤンキーのような顔になった。

「お世辞でも褒めなさいよこのジャンキー」

「はあ。おたけび事件での扱いがわかったような気がしますよ、ヤンキー先輩」

「……………ああ？」

そのまま、何故か僕は睨みあったまま全く動かなかった。僕からすれば空気が思いのほか重くて、動けなかった。

でもジャンキーだよ。きっと僕はおたけび事件のせいで、頭のイカれた一年生と認識されているに違いないんだ。「変な奴」と言われる頻度が常人のそれとは言い難かったし、たまに廊下や学食で受ける不快な視線も、汚物を見るといっより珍獣を見るような方向だったような気もしてくる。

「この一年坊主が……。思ったよりかわいくないのね」

反論しようと思ったけど穏やかにはいかないだろうし、無視することにした。

「原島君、途中経過を見に来たぞ」

さらに二十分くらい無言の空間を維持し続け、そろそろ僕も動いていいんじゃないかとペンに手を伸ばしてポスター製作でもしようかなあとか思った丁度その瞬間、救世主がやってきた。

「不知火さん助けて、変な人が」

「ん？」

僕が声をかけると、不知火さんは入り口に立ったまま瞳をぱちぱちとさせて部屋を見渡した。

ぴたりと視線が止まったのは普段不知火さんが座っているソファの上で、現在はわけのわからない先輩が勝手に使用してふんぞりかえっていた。

「あら」

先輩は海外ドラマでのキャリアウーマンの吹き替えの声みたいな良い声を出して不知火さんを迎えた。やはり顔見知りのようだが、不知火さんはきょとんとしていた。だがよく見てみると、不知火さんは驚いていまいち動いていないようにも見える。体が微妙に震えているような。

「不知火さん大丈夫？」

「……………」  
「どうしたの不知火？ わたしがこの学校に通ってることをまさか忘れてたとか？ 昨日生徒会に注意に行かせたのにスルーしたみたいだし、気にも留めてなかったのかしら？」

行かせたって、この人は一体何なの。

「…………アキ！」

突然、悲鳴のような声をあげて不知火さんが飛び出した。

「ばっ、ちよっ、こっち来ないで！」

カウンセリング室は特別広くもないので、だらりとソファに寝そべって入る入り口から飛びこんでくる人間は避けられない。

「久しぶりだな！ そして相変わらずの感触だな！ むしろ太ったんだな！」

「離れるバカ訴えるわよ！ ていうか太ってないわよこの拒食症！」

一人掛けソファの上で二人がくんずほぐれつで重なり合い、不知火さんが先輩の体に過剰に腕を絡め、顔を真っ赤にして笑っている。僕はここに居てはいけないのではないか、という強迫観念のようなものに駆られるが、こんな不知火さんを見るのは初めてで、目を話さずにはいられない。なんとというか、男としても。

「拒食症なんて生まれてこのかた無縁で健康だ！ というか私は太った！」

「嘘だ！ わたしに嘘は通らないわよ！ こんな細い足して何が太ったよ！」

ああ、先輩の手が不知火さんの足に。

「んんっ、触り方が卑猥だぞアキ！ そうかテクニシャンに成長したのかよかったな！」

「成長してないわよアホ！ ウザいウザいウザいもう離れろってば不知火！ ほらいたいけな青少年が物欲しそうな顔で見てるから！」

否定はしない。僕は笑顔で頷く。

「そっだ原島君こっちに来い！ こいつは親友のアキだ！」

「来るな！ 絶対来るな！ それにわたしはこの子の親友じゃない



！」

「いけず！」

不知火さんってこんなキャラだったのか。普段から読めないところがあるけど、まさか親友の前ではこんなにも百合百合した姿を出してくるなんて。

僕は一旦冷静になって、とりあえず長机にうつ伏せにもたれた。

先輩が睨んできた。

「あ、あんたそこからスカートの中見ようとしてるわね……！ 目ぶつ潰すからやっぱりこつち来なさい色魔！」

嫌だ。

「そうか。アキは生徒会長になっていたのか……」

普段の口元を歪ませるようなにやりとした笑みではなく、にこりと口角を上げた綺麗な表情で不知火さんは言った。

「だって去年の二年生に立候補者がいなかったのよ。それで一年のわたしが推薦されて、知らないうちになあなあで決まっちゃった。

ウチの学校、生徒会は完全に任意だし、仕事も大してないしね」

先程の絡みにやられたのか、ふらふらとパイプ椅子に戻った先輩は疲れた顔で応じる。

「生徒会長。へえ、務まるんですね。その性格で」

「ぶつ飛ばすわよヒモナシ、仕事なんてほとんどないって言うてるでしょうが」

どうも僕はこの人とは合わないらしい。最低でもこの人だけにブツ飛ばされたくはない。

「ヒモナシ？」

不知火さんが首を捻った。

「イカれた紐無しバンジー野郎」

唾を吐き捨てるように言い放った。

「面白いな、今日から私も呼んでいいか？」

「駄目だよ。ていうか不知火さん、今日の活動は？ こつちのほう

も終わってないからこんなことしてる場合じゃ、間違えた、こんな暴力的な生徒会長に構ってる暇はないんじゃないかな。ただでさえ同じ空気を吸ってるだけでなんだか気が滅入りそうなオーラをぶんぶん振りまいていてうんざりで、換気扇とこの部屋の全ての窓を全開にして空気の入れ替えをするか、今すぐに、可及的速やかにご本人にお引き取り願いたいんだけど、さっき聞いた話じゃそれも許してくれなさそうで」

「ああ。野球部のピッチャーがキャッチャーと険悪になってチームの雰囲気が悪いそうだ。だから私は部長に練習メニューの強化を長つたらしくそれっぽく提案した。計画立てができれば私が綿密にトレーニング法などを調べつつマネージャーの手でも借りて今日明日中に作るつもりだったが、部長は一応賛成してくれてそういう方向で進めていくそうだ。確か高体連の時期だし不自然ではないだろう」

今日の活動は？　しか聞こえていなかったのだろうか。しかも解決方法がスポ根風で、効果的とは言いつれない気がする。

「不知火、あんたなんか楽しそうね」

先輩が唐突に言った。

「そう見えるなら万々歳だ。印象も良くなるし、なにより事実楽しんでる」

「そ。じゃあ今日はこれから空いてるの？」

「原島君がポスター作りに悩んでいるから手伝おうと思う。さっき私達でナニをしようとした件で話もあるからな」

ふうん、と先輩がにやりと笑って、不知火さんと一緒に僕を見てきた。別にナニをしようというわけでもなかったのに、僕へ向けられる二人の視線こそ、人によってはいいモノに成りえるんじゃないかと思う。僕がそういう性癖じゃなくてある意味良かった、悪かった。

「それじゃあさっさと作っちゃおう。生徒会長さん、帰っていいですよ」

「何か適当な理由をつけてあんたを殴るつもりだからここに居るわ」  
「……はあ、そうですか」

未だに名乗りもしないこの先輩は、全然面白くない冗談が好きみたいだ。

夕方になると校舎内もちょっと静かになってくる。各部の片付けの時間はだいたい同じだということが最近の何もしていない活動で唯一知り得たことで、僕は初めて何か活動をしなからそれを体感することができた。

「そろそろ下校時刻か」

不知火さんがペンを置いて、思い出したように腕時計を見つめている。

「原島、結局字ヘタだったわね」

夕方までの時間で、生徒会長、海原空姫先輩（うしほなまき）の僕への呼び方はなんとか普通になった。不知火さんが「いい加減にしてもいいだろう」と言ってくれたので、「ジャンキー」「心停止」「ムツツリハゲ」

「豆」などからなんとか「原島」になったのだ。

「味があると言ってもらえると喜びますよ」

「字が、ヘタよ。普段はもっと細いモノ握ってるんだからしょうがないんだらうけど」

「……………」

訴えてやりたい。

「最後できたぞ」

不知火さんがせつせと描いていたネコの出来そこないの絵があがった。

ウサギがネズミに見えるような致命的な失敗はしていないが、ヒゲが太いし目が人間のようでネコ特有のネコ目らしさが無い。毛深いおっさんだ。

そして僕はそのポスターに、

『学校生活に悩みはありませんか？』

友人関係、部活動、勉強やファッショナブルな問題まで、私達同好会がお手伝いします！

御用の方はご希望の要件と共に 会長 一年二組 不知火水玖（すらつとしてます！）、一年三組 風間萌（ちっちゃいです！）に！

または放課後 部活棟一階カウンセリング室にて 月々金 十六時以降より

いつでもお待ちしていますので、気軽に遊びにきてください！』

と書かなくてはならない。

もちろん、僕の一存でこんなことを書くわけではない。なにより風間さんが迷惑を被りそうだし、ポスターにこんなことを書くのはちょっとセンスを疑う。読む側の気持ちにもなつて欲しい。恥ずかしすぎる。会の趣旨に反していそうな内容だし。どうしてか生徒会長はスルーしているし。

「はい、お疲れ様不知火さん。これ書いたら終わりだね」

「そうだな、少し疲れた」

絵を描けるのが不知火さんだけで、十枚の大きめのポスターにじっくりと書いていては意外と時間がかかった。

「そっいえば風間さんに連絡入れてなかった」  
「がらがら。」

僕はポスターの字を間違わないように書きながら、ふと思いついたことを口にした。

「萌がどうかしたのか？」

「一緒に帰る予定だったんだよ。先に部活が終わった方が連絡入れるって」

「まだこっちは活動中だ」

確かに。

不知火さんの視線はぼうつとして、横に並ぶ僕と会長の背後を捉えていた。おそらく本当に疲れているのだろう。すぐ終わらせようと気を取り直すと、視界の横で先輩が急に目を光らせた。

「ね、原島。その子ってあんたの彼女？ この『ちっちゃいです！』ってその子だよな？」

「男女交際の真似事はしてまずけど、彼女じゃありません」

「なにそれ。許嫁かなんかなの？」

「は？ 許嫁なんてものが居るわけがないじゃないですか。先輩もお茶目というかわ変わった冗談をいいますね。風間さんとはちよつとこの前変なことになって、お互い好きでもないのに形だけ付き合うことになったんですよ」

背中が急に重くなつたような気がした。気のせいだろうか。

先輩が詰め寄ってくる。

「なに、もしかして不知火に命令されたから？」  
近い。

「百パーセントそうってわけでもないんですけど、先輩に話す義務もないし、そんな気分にもなりません。邪魔なんで離れてください」

「ナマイキ。言いなさいよそれくらい、二時間弱を共に過ごした仲でしょ？」

肩を組んできた。甘い匂いがしたが、気持ち踏ん張って文字を書き続ける。なんで不知火さんの知り合い関係はやたらと馴れ馴れしいのだろう。こっちにしてみれば気が楽だけど、変だ。

「……あ、その風間さんって子の名前を書く時手つきがゆっくりね。愛がこもってるの？ なかなかキモいわよ原島」

「なんでそんなものを風間さんに込めなきゃならないんですか……」  
他人の名前を書くときは気を遣うものなんだ。

「耕くん耕くん」

と、急に肩を叩かれた。

ここで少し僕の動きは止まった。状況を整理してみる。

今、僕は生徒会長に肩を組まれ、その状態で長机についてポスターを製作していた。正面には不知火さんが居て、ぼうつとどこかに僕らの背後に視線を向けている。つまりはここに居る人間全員が僕の視界内に居るはずなのだ。しかし、今僕は肩を叩かれた。先輩の手は、組んだ手が僕の顔の横に、もう一方は机に置かれていた。不知火さんはもちろんソファに座ったまま。

それは何を示すか。そうだ、「第三者がこの中に居る」。いつだ、僕は何故気付かなかった。老朽化が進んでいるこの棟、部屋のドアが開かれることなど感知できないはずがないのに。それも僕を「耕くん」と呼ぶだなんてこの学校にその該当者は一人しかない。

もう一度不知火さんを見る。

「ん」

ああ、突然の風間さんの登場に動じていない。そうか君は、唯一この状況の変化を傍観していたということか。

「耕くん」

弱々しく僕を呼ぶ声、悲しそうなそれが背中に痛い。先輩は既に振り返って、声の主の様子を確認している。

「あらら……この子が風間萌ちゃん、かな？」

「はい……」

慌てて振り返ってみると、制服姿の風間さん。わざわざ部活の後だというのに、着替えてここまでやってきたのだろう。

ポスターの宣伝通りその姿は小さくて、どうにか僕も声をかけようと思う。

「ぐす……」

いや、思った。思ったけれど、行動に移せなかった。

風間さんの僕を睨むような瞳が、涙目になっていたのだ。

「あー、あの……」

「耕くん……」

客観的な見方をすれば、僕は間違ったことはしていないはずだ。

原島耕はこれこれこういう意見を持っていて、ただそれを口に出し

ただけなのだ。人間全てがそんな即物的でいては、物事はまかり通  
つてくれないというのはだいたいわかつてはいるけれど。

「あたし、耕くんのこと好きだよ？」

「……はい？」

急に何を言い出すのか。

「あたしは好き、すごく好きだったし、今の耕くんもちょっと変だ  
けど、ストレートで好きだよ、そういうところは変わってないから  
ね、それにね、今だって、部活が終わったら、って話覚えてくれ  
たし、あ、あたしね、終わったから一応来たの、連絡する前に、あ  
たしが連絡入れずに来たらなんて言うかなって、もし連絡入れてな  
かったことを言ってくれたら、やっぱり耕くんはやさしいでしょ？  
でね、今こっそり入って、不知火さんにアイコンタクトして、気  
付かれないようにしたらね、耕くんやっぱり優しいの、でもね、今  
さ、聞いちゃったから、あの、あたしのこと好きじゃないとか、言  
ってたから」

「あの、風間さん？」

「あのね、あたしにはわからないんだよ、そういう人を好きになる  
気持ち、あんまりピンとこないの、えっと、いろいろあつたつて言  
つたでしょ、ね、だから、そういう感じの、好きって風な気持ちに  
なつたのって、今まで耕くんしかいなかったと思つたから、わから  
ないから頼ってみようと思つたの、不知火さんが変な提案をしたか  
ら、あたしは乗っかるう、って、だから、失礼だけど、耕くんを昔  
よりも好きになつてみようと思つたの、あのね、お弁当も、ほんと  
はほつといて傷んだ生春巻き食べさせたんだけど、あれ、真正正銘  
あたしがつくつたんだよ、おいしいってメールくれて嬉しかったか  
ら、もつと食べてもらいたいって思つたの、あのね、そういうのが、  
好きってことなのかなって、だから今日もね、いそいで制服に着替  
えて、ジャージの子と帰るの、やでしょ？ だから急いだの、一緒  
に帰るから、耕くんと一緒に帰って、どんなことがあつたのかな、  
とか、聞いたり話したりしたかったからね、ね？ だから、だから



嫌いとかどうでもいいとかうざいとかうつつとうしいとか言われたら、あたしどうしていいかわからないから、あの、泣いていいかな、なんか、泣きたい、すごく泣きたいよ耕くん、ねえ、ねえ……」

おどおどとした様子で涙をただ流しにする風間さんは、焦点の合わない目で僕をじつと見つめていた。あまりに突然のこの風間さんの変わりように、どうしていいかわからない。

「大丈夫かな。ね、萌ちゃん、こっちおいで」

「……え？」

先輩が風間さんと呼ぶと、風間さんは涙を拭きながら首を捻り、先輩の元へ。一度拭いても瞳からは雫がとめどなく零れ落ちて収まる様子を見せなかったが、先輩は意に介さず、近付いてきた風間さんをいきなり抱きしめた。

「……っ？」

「よしよし、確かにちっちゃいねえ」

風間さんは泣いていたためなのか耳を真っ赤にして、置き場の無い両手を宙に浮かせられるがままに抱かれ、撫でられる。

「会長さん、何やってんですか……」

僕は気の利いていない言葉だけをこぼしてしまった。

「うっさいわね、わたしが悪かったんだから泣かせてあげてるんでしょうが。正直言つてよくわかんないけど、わざわざ女の泣き顔まで見せることはないわ」

先輩が悪いところなどないと思うが、僕にも色々とよくわからないことが多い、口を出すことができない。僕なんて、未だに風間さんへの対応の仕方すら考えつかない。

「風間さん？」

「……なに？」

先輩の胸に埋もれたまま、風間さんはくぐもった声を出した。

「あの、そう。風間さんのことが嫌いなわけじゃないんだよ」

口に出す。多分問題は、このあたりだ。

「どちらかといえば風間さんのことは好きだし、生春巻きの件は今

聞いてちよつとショックだけど本当においしかった。連絡だつて、風間さんと一緒に帰ることを意識していたから頭に残っていたんだと思つよ」

「うん……」

「でもだ。君がそうして泣くほど悲しい気持ちになつている理由がわからない。それに、嫌いとかうざいだとどうでもいいだとか、そんな君自体を否定するようなことを言ったことは一度も無い、と思う。小さい頃、ちよつとした悪口は言い合ったかな。それくらいだ。君を本当に嫌いになったことはない。でも、同時にその程度なんだ。君の悪い部分をすっかり見つめられていない、だから心底好きになつたとも言切ることはできない。本当に好きなら、悪口を言い合おうという気持ちになるのか、それも含めて受け入れるものなのか、あるいはその逆か、どんなものはさっぱりわからない。『身近な可愛い女の子』の君を当時確かに好きだった、君と別れた時も寂しかった、それでも泣かなかつた。きつと昔のそのことは、何か勘違いのようなものなのだと思う。君が当時、特別な存在だと感覚的になんとなくで思ってしまっただけだ。単純に、親しい異性だったから。泣く理由は人の尺度の問題だろうけど、だからこそ君の言葉が理解しきれない。今、君を慰めたいって気持ちも半端なもので、それ自体も嘘かもしれない。つまりはまあ、きつとなんだけど、こういうことをしていたって、こういうことになつていたって、結局は」

「原島君、黙れ」

急に不知火さんに遮られた。

我にかえつて周りを見ると、先輩は僕を冷たい目で、風間さんは先輩を見るからに強く抱きしめ、声も出していなかった。

どうしてそうなる。

「いや、ただ」

「悪意で言っているんじゃない。君に反感を抱いたわけでもない。だが、黙れ」

不知火さんは足を組み、頬杖をついて言う。

「空姫、萌を送ってくれないか？ どうせ暇だろう」

不知火さんが言うと、先輩は嘖き出しながら言う。

「……不知火あんだ、そういう役回りを高校でも押しつける気？」

「面倒見は抜群にいいからな。本当に感謝している」

「まだオツケーしてないわよ。ったく、仕方ないわね……」

そう言った先輩は足取りのおぼつかない風間さんと一旦部屋の外に出て、小声で話し始めた。僕は不知火さんと向き合ったまま、その間何も話せない。

「不知火、それじゃあこの子送ってくね。家の方向は同じだって  
数分が経って、廊下から先輩が顔を出した。

「すまない空姫、埋め合わせはする」

「そ。信頼してるからね、その言葉」

がらがら、と戸が閉まる。

「……さて、下校時刻だし、ゆつくり帰ろうじゃないか」

不知火さんは中途半端になっている最後のポスターを整頓して学生鞆を掴んだ。

最後のチャイムが鳴ったのは、ちょうどその時だった。

本当にゆつくりと歩く不知火さんの背を追いながら、僕は首を捻り続けた。そこまで変なことを言っただつてもりは、ないこともないが、伝えるべきことを伝えたはずだ。

鍵を返しに行くぞと言われ、僕は職員室へ行く不知火さんのあとをついていく。部活棟一階端から本棟二階までは地味に足を食う。

そこまでの廊下には誰も居らず、ただただ静かだった。

「君は自分が変だということを実感しているはずだ」

その途中で、突然不知火さんは言う。

「さあ」

「……ごめんな原島君、今ははぐらかさないでくれ」

振り返らない背中からの言葉だったが、穏やかな調子だとすぐに

わかるものだった。

「別に、自分が変だとは思っていないよ」

「本当にか。あんなことをしておいて、私と言葉を投げ合っていていてもそう思うのか」

「そう言っつてことは、不知火さんは自分が変だって自覚してるっ  
てこと？」

「君が変だと思ったから君に合わせたんだ。所謂、素面の私でな  
シラフ？ 酔っていない？」

「それはどういう意味なのかな」

「君は変だということだ」

「冗談で言っているようには聞こえない。

職員室に着いて不知火さんが鍵を返却し、一緒に玄関にやってくるまで言葉が出なかった。

「バスは行つたな。ではゆるりとバスを待とうか」

学校前のバス停に来て誰も居らず、確かにもう行ってしまった後らしい。時刻表を見るとあと二十分は来ないようだ。

「……それで？」

「そうだな。話を戻すか。君は少し変わっている、と」

「不知火さんも十分変だよ」

「私はわかっている。自分がおかしかったのだと一旦結論づけた。

そういうものであったのだと受け入れ、今をゆるゆると過ごしている」

「ん？ 不知火さんが『わかっている』、とかいう以前に、誰でもある程度は自分で自分をリサーチしているとは思うよ。的外れでも勘違いでもなんでも、自分はこういう人間なんじゃないかって考えることが全くないって人、少数派じゃないかな」

「違う、君はそのくくりの中で変だと言っているんだ」

不知火さんは自分の髪をつまむ。

「どうして？」

「自分の中の自分が完全に剥き出しになっている。こういう人間だ

と決めつけた本来的な君じゃない君の自意識が拡大して、表層に現れている。意図的か無意識か、深的部分が逆転しているのか、細かいことは知らないが、そういう人間は変だ」

「面倒な言い方だね」

「じゃあ端的に言えばいいか？」

「うん」

「馬鹿なことを言い出す前に自制しろ。世の中の人間は物心がついた段階で多かれ少なかれ無意識の自制心を持っている。だが君の場合、こと他人との交流に関して明らかにそのタガが外れている、壊れている。君は私を壊れたダムだと言ったな？ それは正しい、私は敢えてそのようにした。君が君自身を評するなら、それが適切だと判断したんだろう」

不知火さんが何を言っているのか余計に分からなくなってきた。

「不知火さん、支離滅裂になつてきてない？」

「そうかもしれない、そうではないかもしれない。私は、私を両立させるのがあまり得意じゃないんだ。君とこうして過ごしているのも、私が自己中心であるためなのだと思うていたが、違うのかもしれない」

腕を組んで、車道をぼんやりと眺める不知火さん。

「いいよ、落ち着いて。要するに、不知火さんは何が言いたいの？」

「ああ、そうだったな。もっと直接言わなければ伝わらないことは多分にある。私が後悔をする前に、君がこれ以上変になってしまわないように、私がもう一度噛み締めなければならぬことがあるのだった。これを言わずに何を言うか、回りくどい言葉は必要ないな。言いたくはないが、君には言わなくてはならない。君は、私と同じで変だから、これから間違えてしまうことがあるかもしれないんだ」

「うん？」

毛先のはねた髪を真っ直ぐにしようとしているのか、落ち着かない様子で髪をいじっている。

「私は過去に君のような振る舞いを見せた結果、大きな罪の意識に

苛まれることになった」

「何があつたの？」

不知火さんは僕に向き直り、弱々しく笑った。

星空のようであつた真つ黒な瞳には今、星は映っていない。

「人を死なせた」

「へえ」

これまた変わった冗談だね、不知火さん。

それから僕は不知火さんの言葉を待つてみたけど、バスがやつてくるまで不知火さんは一言も話すことはなかった。後ろに下校する生徒が並んでいたからかもしれないが、違ふと思う。不知火さんの泣き出しそうな顔は出会つてから初めて見たんだし、状況的なものでない、もっと込み入つた理由があつたほうが、面白いじゃないか。

「ごめんね、耕くん」

翌日の朝、早めに学校に呼び出された僕は、風間さんと教室前の廊下で向き合った。

風間さんは少し目が赤く、寝不足になっているように見えた。

「いやいや、僕の方こそ、ごめん」

僕の方こそ、何だろうか。

「いいよ、大丈夫。もう普通に過ごせるから」

「そう？」

「うん。じゃ、それが言いたかっただけ」

教室に戻っていく。

僕はその姿を見つつ、二組の教室内から飛んでくる視線を数えた。それなりに居る。その視線を受けながらも、今日のお弁当が無いことを残念に思った。

「あ！ お弁当渡してなかった！」

教室から驚いたような声が響いた。三組側が変にざわめいて、二組のいくらかの人間も三組の壁の方に頭を向けた。まるでイルカがエサでもまかれていたようだ。

風間さんが顔を赤くして出てくる。手には赤い風呂敷に包まれた弁当箱が持たれている。ちなみに毎回の弁当箱は僕がすっかり洗って返しているの、弁当を受け取る日は基本的に隔日になっている。「はい、今日の！」

「ありがとう。メニューは取って訊かないで okay」

風間さんは「おいしかったら文句言わないでね！」と言って、早速で今度こそ三組教室に帰っていった。本当に普段の調子に戻ってくれたようで、軽く僕も手を振る。

「……おい原島、お前彼女の弁当に普段ケチつけてんのか……って、逃げんなよ……」

ちやうど登校してきたらしい学生靴を持った眠そうな土屋と目が合ったが、反応し辛かったため無言で教室に入った。

ホームルーム開始のチャイムが鳴ると、同時に不知火さんがすたすたと教室に入ってきて、普段通りの無愛想を教室に振りまいてくれた。

どうやら僕の学校生活は、今日も滞りなく始まってくれたようだった。

「……おい原島……お前は彼女が作ってくれた弁当に文句をしきりに話しかけてくる土屋のこの話題だけは無視した。」

放課後。

カウンセリング室に行くと、今日も不知火さんが慌ただしく動いている。なにやら早くから掃除と整理整頓をしているらしかった。昨日の書きかけのポスターも部屋の隅に追いやられ、不知火さんは今まさに箒で教室を掃いている。

「ん、原島君遅いぞ、遅刻だ」

入り口のこちらを振り向く不知火さん。足元のホコリが舞って、くちゅんと控え目なくしゃみをした。

「頭痛が痛いのか？」

「意味がわからんがちよつと力仕事を頼みたい。適当な部屋に侵入して、椅子と机と、チョークと黒板消しをかつぱらってきてくれ」  
そんな山賊みたいなセリフを言われても。

「何セットくらい？」

「パイプ椅子と長机のキャパの問題もあるし、六つくらいがいい。それとできれば、かつぱらったことがバレないように色んな教室からだと良いんだが、それは君の裁量に任せておく」

「わかった。でも何に使うの？」

「テニス部の勉強会だ。部員が馬鹿すぎて、今回の前期中間で一教



科でも赤点を取ると次の市民大会に出させてもらえないらしい。特に団体戦はやばいと」

「でも不知火さん一年生でしょ？ 部活単位で勉強受け持つて大丈夫なの？」

「私は団体戦に出られるよう一年を補い、二年のほうは自分の勉強に集中させる。それに一応、私は思いついた時に勝手に勉強しているから、とりあえず高二くらいの現国古文漢文は余裕、英語も余裕地歴公民はなんでも来い、数学は教科書見ればいい、化学と物理は嫌いだ。とは言っても今日はどうせ暇な助っ人を呼んだから、その点はぬかりな……つくしっ！」

不知火さんはくしゃみをして、せつせと床を掃く。

助っ人が誰か、もう登場する前に察しがついたけど特にそこについては言わないようにした。背後に居たりしても面倒くさい。

「三年生は？ もう引退だろうけど勉強見るくらいならしてくれらんじやないかな」

「二人だが幽霊部員だと言って……っちゃっく！」

「そうなんだ。とりあえず窓、開けた方がいいよ。そのくしゃみ不知火さんらしくない」

「そうか、窓のせいか、そうだった、忘れてた……。ああ原島君、悪いがそっちは頼むからな」

いそいそと窓を開ける不知火さんの背中をちらりと見て、僕は部活棟を適当にぶらつくことにした。僕と入れ換わりで風間さんも来るのなら、こっちを手伝いに来てくれないかな。

歩きまわりつつ、部活棟の各特別教室やらを眺める。文化系の部活は音楽室や理科準備室などを部室として利用しているところもあるんで、活気があるところは本当にやかましい。活気が無いところはうちの部室のように無い。

ふと考えてみれば特別教室に普通の机はあるのだろうか。とりあえず運搬が楽な同じ階層の一階には、人数の多い運動部用の各部室と、家庭科調理室と被服室、コンピューター室あたりが開放されてい

る。そのラインナップに持ち出せる机は無かったはずなので、僕は二階を歩いているんだけど。

その途中、

「あら。女の子を泣かせた甲斐性ナシじゃん、きー」

面倒くさい茶髪パーマの上級生が手を小さく振りながらこつちに歩いてきた。本棟との渡り廊下は確かに一階と二階にある。偶然この人と出くわしても不思議ではないが。

「語尾に『きー』が付くようになったんですか？ 別に先輩の顔面じゃ萌えませんよ、リアルなんで」

「萌え？ あ、原島ってソツチ系の趣味あったんだ、まあ確かに変態っぽいし、納得っちゃ納得。ていうか何、リアルって。わたしは正真正銘ここに居るわよキモいわね」

萌えと言ったからといって変態扱いして欲しくないけど、僕の一存ではどうにもならないことは世間の目が言っているので、反論する気にもならなかった。

「リアルっていうのは立体的な、ああ間違えた、ゴツイ顔だってことですよ。すいません、立体的は本当に間違いです。勘違いして目鼻立ちのくつきりした美人だとか勝手に思いこまないようにしてくださいね。先輩みたいなタイプはそういう傾向ありますし、婚期逃しますよ」

「婚期？ 原島は高校二年のわたしにそんな心配してくれるの？

かわいいとこあるじゃん。あ、もしかして今のうちにつば付けておいて『目鼻立ちのくつきりした美人』に成長したわたしに手エ出そうとか思っちゃってるわけ？ 無理無理、あんたデク人形みたいだし頭おかしいし甲斐性ないし」

「高校二年？ え？ …… すいません、不知火さんの父兄の方で、ここのOBだと思い込んでました。なんでこの人老けてんのに制服着てんだろうとか思っ、触れちゃまずいと思っただんですよね。なんか猫背ですし、髪型がおしゃれ諦めた専業主婦みたいですし、肌につやというか水分ありませんし、干ばつした不毛の大地が見え

ました」

睨んできた。

「チツ……っのやる……実際若い相手にんな常套句なんて堪えるわけないでしょ。通用すると思ってるのが逆に腹立つ」

「でも髪型が主婦みたいなのは事実ですよね」

かつと目を開いて、ふわふわした茶髪を両側から掌で持ち上げてへたな雑誌の媚売りナント力系みたいな髪型アピールしてきた。

「これは地毛！ 天然素材！ 毎日手入れもしてるわこの節穴が！」  
「ふふ、そうですね。よく似合っていて可愛らしいですよ奥様」

僕は笑顔を見せた。

「キモい」

先輩は歩き出し、背筋を不自然に伸ばして僕の横をさっさと過ぎ去っていった。階段のほうに向かっているところ、やっぱり先輩が不知火さんの言う助っ人なのかな。

三階まで上って適当に歩きまわっていると、四階の吹奏楽部が練習を始めたのがわかった。ぶわー、とか、ぷおー、とか、各パートの練習が混沌とした音色を奏でる。帰る頃にはちよつと合わせたり合わせなかつたりしているようだけど、最近はあるに耳に入ってきていないというか統一感もないような。

思えば、パート毎に練習をしているなら場所も色々必要になるんじゃないか。階段を上る。

四階には自習室が三部屋あった。内装は一般教室と同じで、追試とか補習にでも使われるのかな。実際に自習をする生徒は放課後のホームルームで勝手に勉強すると思う。

そして現在そこには吹奏楽部がそれぞれに入って練習中だ。持ち歩ける管楽器隊が中心で、席はそこそこ空いている。

ここから机と椅子を拝借しよう。そう思って、こそこそと侵入する。練習を中断してこちらを見てくる人もいたけど、特に何かを言ってくるような様子もない。机を持ち出した。

「原島君、大変か？」

「まあまあ大変だよ」

一階から四階を往復して机と椅子を降ろすなんて、普通の体力しかない僕にはかなり厳しい。でも、一応運動部である風間さんは来ていないし、先輩は中で携帯をいじっていて手伝わないし、不知火さんは部屋の整頓をしているし、やれるのが僕しかない。

「ならもう無理しなくていい。あとは私が持つてくるから待っていてくれ」

「そういうわけにもいかない」

「いや、さっき思い出したんだがこの一階の器具室に確か古い物があったはずだ。チョーク類もあったはずだから、ちょっと行ってくる」

「あ、不知火さん？」

すぐに本棟側へ早足で向かって行ってしまった。確かに疲れてはいたけど深刻なほどではないのに、申し訳ない。

「さすが甲斐性ナシ」

先輩も居るし。

「不知火さんの行動が早すぎたんです。さすがに悪いとは思ってますよ」

長机に並んでいたパイプ椅子の一つに座って、その一番端に居る先輩を見た。さつき手ぶらだったような気がしたけど、教科書等を持たなくていくらい勉強ができる人なのだろうか。

「……あ。先輩は生徒会活動とかは無いですか？」

「基本的に無いわ。どうせ他には変な男しかいないし、そいつら生徒会室に入り浸ってるし何かあっても勝手にやるから」

本当につまらなそうな顔をして携帯の液晶を眺めている。

「でも不知火さんの件って先輩が指示したとかなんとか言ってますんでしたっけ」

「顎で使える奴らだもん」

「……へえ、そうですか」

訊きたいのはそつちじゃない。  
がらから。

「ごめん遅れましたー！ 数学の課題出し忘れてたんだよね！」  
言葉を選ぼうとしていたら、風間さんが慌ただしくやってきた。

「萌ちゃん！」

「空姫さん！」

待つてましたと言わんばかりに先輩は立ち上がった。そのままひしつと抱き付いた二人はまるで見せびらかすように僕に視線を送ってくる。特に風間さんが調子に乗ったような嫌な表情で、もしかして変なことでも考えているのでは。

「空姫さん！」

何故かこつちを見てもう一度。

「空姫さん！」

もう一度。

「コラ原島ア！」

「なんですかもう」

先輩なんて何故か僕を呼んだ。

「ジェラシー感じなさいよ！ まさかその若さで不感症！ 超キモい！」

「急に言われても困ります。あと不感症じゃないんでお二人のそういうの正直悪いもんじゃなと思いますからいつそそのままお願いします。風間さんやっぱりちっちゃいね、ほほえましいほほえましい、天気の良い休日の公園みたいで和むよすごい和む」

「うわあああああん！ 耕くんが人類愛に目覚めてくれないよお  
おおお！」

風間さんは顔を赤くして先輩の胸に顔をうずめる。実際のところ、どちらかといえば僕は人類愛の方には目覚めていないこともない。

「嘘泣きされてもちよつとね」

「嘘泣きまでばれてるよおおおお！」

隠してないんだからそりゃあ、ばれるだろう。

「開き直ってアタックしても相手にしてくれないよ空姫さあああ  
ん！」

「この野郎もつとがつつきなさいよ！ まさかその若さで打ち止め  
！ 超キモい！」

風間さんの頭を抱えつつ目を見開く先輩が信じられないほどウザ  
い。

「先輩のその変なノリが今一番キモいです。それに風間さん、アタ  
ックって相手に直接行くものなんじゃないかな」

そこで僕は席を立ち、二人をスルーして一旦廊下に出て、不知火  
さんが帰ってくるのを待つ。姿が見えたら僕が机を運ぼう。部屋に  
居ると気が長いほうの僕でも不快感が凝り固まって体を悪くしそ  
うだ。

無心で入り口から外を覗く。背後の二人がごちゃごちゃと文句を  
言いつつも会話をようやくまともに戻した頃、不知火さんの姿が見  
えた。

「あれ……？」

不知火さんが机を持っているものだと思ったら、知らない男子生  
徒が机を運んでいる。その後ろにも数人、スポーツ会社のロゴがで  
かかどついた縦長バッグを担いでのしと進行してくる。

偉そうに先頭を歩く不知火さんの姿がどこかのボスのようで、す  
ぐに僕は部室に戻った。

「風間さん廊下見てよ、ちょっと面白いよ」

「なに？」

ひよこひよこことこつちに歩いてきて風間さんは廊下に顔を出した。

「……総回診？ 大名行列？」

「それっぽいね。廊下の脇で頭下げてる人が居ても不自然じゃない」

「いやいやさすがにそれはちょっとヘンだけど。でもなんか、不知  
火さんてああいうの似合う」

「うん。人の上に立つ姿がもう板についてる感じだ」

僕は軽く笑って、接近してくる行列を眺めた。本当に、違和感が

ないというか、そうあって当然というような顔が清々しい。

「……そだ。耕くんってさ、やっぱり不知火さんみたいなタイプの人がいいのかな？」

「誰々が、とかじゃないかな。見てて飽きない人なら誰だって好きだよ」

何の気なしに言ってみると風間さんは軽く首を縦に振って、「ふうん」と唸って部室に引込んだ。

不知火さんがやってくる。僕が廊下に顔を出しているのに気付いて、少し歩くのを速めてきた。

「ああ原島君。こちらがテニス部の方々だ」

「だと思つたよ。こんにちは、一年の原島です。とりあえず中入ってください」

僕は不知火さんと入れ違いになって、テニス部の前で軽く頭を下げた。男女合わせて十人で、十人十色ともいえぬどこからどう見ても普通の人達が並ぶ。

「君けっこう有名だよ。俺は二年部長の小柳。一応よろしく」

僕は軽く頭を下げて、小柳部長についていく他の部員達にも適当に挨拶をした。見たことのある顔が居た気がしたけど、確かクラスメイトだ。

テニス部達がさっそく部室に入ると、不知火さんは鞆をこそこそとやっていて、他の二人は横に並んで彼らを迎えた。

「こんにちはみなさん。わたしは海原空姫、そしてこちらが」

風間さんの頭に手を置く先輩。

「風間萌です、よろしくおねがいます！ 背が低いことは気にしてません！ ていうか今日って何の集まり？」

先輩は異様なくらい落ち着いたトーンで、風間さんは体育会系な挨拶だった。テニス部は部長と副部長が挨拶するのみで、後には必要なら聞いてくれということ荷物を置き始める。僕はその様子を、窓際に立って眺めていた。

「では、各々席についてくれ。足りているはずだ。萌、説明するか

らついでに聞いてほしい」

海原先輩のように特に関わり合いがあるような先輩でもない人がいるのに、不知火さんは普通にいつも通りの口調だ。図太いというか。

「さっそく話していた通り、これからテニス部の前期中間試験の赤点対策をしなければならぬわけだ。私は一年生、確か六人だったか？ そちらの指導を中心にやらせてもらう。一応私も二年の範囲はある程度抑えているが、海原先輩がどうせ暇だからそちらに聞いて欲しい」

不知火さんが手を先輩の方に向けると、先輩は柔らかい笑みで軽く会釈をした。似合わない。

「もつとも時間は十分、あと約二週間もある。逆に言えば、試験一週間前の部活動禁止期間よりも早く練習を中止させた君達テニス部が赤点を取ってしまうことなどあってはならない。私のプライド的にも、君達の置かれた立場的にもな。だからここは本気を出してみようと思う。あくまで私の本気だ、君達の本気を出すか出さないかは別問題だが、私の本気にぶつかってきてくれれば成績が無駄に向上すると思っっている。ちなみにカンニング法ではない、正攻法で正面からだ。実際のところ、赤点ギリギリなんて本当なら一夜漬けてもできる、が、それでは意味がないと私は考えているのだ。ここは高得点を取って貯金でも作り、顧問を一度黙らせてしまえばいい。そうすれば少なくとも次回は、テストについていちいち口を出されることはないだろう。根拠は全く無いが」

不知火さんの声を聞いていてふと思っただけれど、僕達一年生は高校初めてのテストを受けるのにどうしていきなりそんな条件がついたのだろうか。これは一年生に問題はない、元々居た二年三年の問題なのではないか。

「質問はあるか？」

テニス部員はそれぞれルーズリーフや筆記用具を出しておとなしく座り、もう準備万端な様子で不知火さんを無言で見ている。



「では始めよう。まずは数学、次に英語。その次は暗記物で、現国は私の授業ノートを参考にする予定でいかせてもらう。今日は初日だから、テストの対策をなぞる程度にな。残った二年生は同じ教科を同じ時間自習。先程も言ったが『困った時の海原空姫』。これが合言葉だ」

「もうやだ不知火さんったら、そんな合言葉今初めて聞いたわ。それに言うておきますけど、わたしそこまで勉強できないんだから。あんまり難しいこと聞かれると……うーん、やっぱり困っちゃうかなあ……」

先輩の微妙に媚を売るようなギリギリで売っていないような態度に悪寒が走った。思わず表情を苦いものにしてしまい、そこでなぜだか先輩の間接視野から視線を感じた。瞳はこちらに向いていないのに、全体の雰囲気などでなく、直線でダイレクトにプレッシャーを受けているのは気のせいなのか。

勘違いだと自意識過剰か、だったら何事も無かったような顔で僕も勉強しようかな、と立ったままぼんやり思っていると、風間さんがちゃっかり長机の空いた席、海原先輩の隣に座って一緒に始めようとしている。ならばと僕も、先程四階から持ってきた机と椅子について、不知火さんの説明を適当に聞くことにした。

数学はわかりやすかった。ほぼマンツーマン指導状態なので、わからない部分を聞くとすぐに問題を段階分けして細かく説明、その場で例を出して理解をさせる、を繰り返す。実際に慣れれば式の展開なんて、凡ミスをなくせば高得点が容易に取れるものだとすぐにわかった。範囲が狭いので、あとは地道に問題演習をしてミスをなくせばいい。

英語も難しいことはやっていないので、単語さえ覚えていれば意味は通るとのこと。要するに授業でやった文を書く、読む、それだけ。化学、世界史も同様に、水兵がどうのこうの、とかそういう語呂合わせを中心にした暗記で、ひたすら何も見ずに書くということ

を優先させていた。

問題は現国だった。不知火さんの授業ノートは、とても参考になるものではなかった。

「不知火さん、これひどいよ」

僕は思わず言ってしまった。

「ふん。ノートを開いた瞬間の君達の表情を見た段階で察しがついたさ」

何故か顔を背けてふてくされている。

「なんでウサギが手紙を持って泣いてるの」

「これは登場人物の心情を私なりにだな……」

不知火さんは板書をしっかりと取らないタイプだったのだ。数学は教科書と問題集、英語は教科書本文、以下も同様に教科書を中心にして認識を共有することができるが、現代文は中学から、だいたい教科書本文に直接書かれていないことをテストで聞かれるため、変なことを問われても対応できるよう、一応板書が必要な教科なのに授業中にいきなり集中してノートに向かう不知火さんを何度か見たが、こんなわけのわからないイラストを描いていたなんて。なんとさえばいいのか、普通の女の子らしい。

「他のノートも見たいな」

風間さんは現国のノートを取り上げて楽しそうに眺めている。まあ、勉強疲れの最中に見るにはちょうどいいのかもしれないが。

「……みんな一応ノート取ってるよね？」

僕は一年テニス部員に確認した。全員頷いたので、とりあえず致命的な問題はなさそうだ。

「どうする？ 不知火さん」

一方、不知火さんは鞆から他の大学ノートを取り出して誇らしげに風間さんに開いていた。化学だった。

「実は先日の授業中フラスコが上手く描けた」

「うわっ……フラスコの中でギチギチに変な生き物が詰まってるけど、これなに？ なんか上手いっていうか、すごい」

「カモノハシだ」

「ごほん、と僕は咳払いをする。鋭い笑顔でカモノハシとか言っている僕も僕はツツコミ気質では断じてないので横からは口を出せない。」「んん……とりあえず。急ピッチで話を進めたが、入学後最初のテストということで範囲も狭いため、今回の調子を意識して毎日取り組めば九割は取れるだろう。暗記中心、書き出して読む、を繰り返せば、教師の作るテストなんて余裕で高得点だ。……そうだな、あとは寝る前に、今日何をやったかを具体的に思い出せ。思い出せなかったところがあれば無視してそのまま寝て、次の日の朝にもまた同じように思い出せ。さらに覚えていることが減っているだろうが、それでもまだ覚えていたことは少なくとも二日は忘れない。約二週間もあれば、それを毎日繰り返して今回のテスト範囲全てを丸暗記することもできる」

不知火さんはこれまた根拠の無さそうな話を繰り返して、テニス部はへえ、といった具合に耳を傾けている。こんな話で簡単に納得していて、いつか詐欺にでも遭ってしまったまいだろうか。

「空姫、ああ、海原先輩、そっちはどうだ？」

そっちは、と言っても二年生はすぐ近くで黙々と、たまにこそこそと話していたくらいで真面目にやっていた。

「今のところ問題なさそうよ、少なくとも赤点はあり得ないと思う」「うんうん、と小柳部長が頷いた。

「俺達は前回結構怒られたからね。今は授業聞いているから、自分達でやればなんとかなるはずなんだ。てか、一年もそれなりに出来るみたいじゃん？ 一年は自信ないとか言ってる、俺達も余裕はそんなにないから困ってたんだけど、不知火さんのこの感じなら大丈夫そうだ」

「そうか。では今日は解散しよう。とりあえず顔合わせと心構えは教えたので、何か詰まったり質問があれば遠慮はしなくていい。私が居るかはわからないが、原島君か萌なら居るかもしれない」

「僕は大体居るけど、勉強はちょっと」

「ん、おつかれさまだ」

不知火さんは立ちあがり、風間さんの見ていたノートを奪ってぱたんと閉じた。

テニス部員も一緒に立って、声を揃えて「お疲れ様でした！」と挨拶をする。

僕は頭を下げ遅れたので、一足先にドアの方に回って、出口をゆっくりと開けておいた。

「私達も帰るか」

「そうだね」

机と椅子を隅にまとめて、僕達も鞆を持った。

「結局先輩も最後までいましたね」

不知火さんが部室に施錠して、今日は四人で部屋を出た。普段は風間さんと二人だったり不知火さんと二人だったり三人だったりするけど、横に並んだ先輩が普通に馴染んでしまっているような。

「別に。わたし暇だし。ね、萌ちゃん」

「え？ あたしは暇ってほどじゃないですよ、今回のテスト簡単そうだから頑張っちゃおうとか思ってますし」

「そんなっ」

「えー。そんなショック受けたような顔されても困っちゃいます」

「萌ちゃんつてもっと本能で生きる子だと思ってた」

「あたし地味に推薦狙ってますからねー」

僕が話を振ったのに、そのまま二人は前を歩いて軽いやり取りを始めてしまった。そのため、少し後ろで不知火さんが首を捻りながら歩いていることに気付いたのは僕だけだった。

「どうしたの？」

声をかけると、不知火さんは傾けていた首を反対側に倒して、眉間に皺を寄せた。

「ん、いや。忘れていたことがあったような、無かったような。特に重要なことでも無かった気がするが、やっておいた方がいいよう

な

「そういうことって結構たくさんあると思うけど」

「む。むーん……んー……」

「やばい不知火さんが電波を受信してる。」

「……そうだ空姫、鞆はどうした？」

「え？ と先輩は振り向いて、手ぶらであったことを今思い出したような顔をした。」

「そうだった。生徒会室に置きっぱなし……めんどくさいわね……」  
「どうして生徒会室に置いたままにしておいたんだ」

「だって後で戻るつもりだったのよ。不知火のポスターを承認するために判を押さなきゃいけないから」

不知火さんが自分の手に判を押すようにぼんと叩いた。

「おお……思い出した。ポスターだ、ポスターを貼ってなかった。」

せつかく昨日十人の猫麻呂殿を描いたのに、どうしてこんな大事なことを忘れてしまっていたんだ」

「へえ、あのおっさん猫麻呂殿っていうんだね。貴族？」

「次に貴族のおっさんと言ったら殴る」

「なんか普通に怒られたんだけど。」

「じゃあ今から戻る？」

風間さんが言った。しかし不知火さんはかぶりを振った。

「いや、焦ることもないな。思い出したならいい」

「あんた微妙なところでいい加減なのね」

「私は柔軟なだけだ」

先輩の言葉もさらりと受け流して、不知火さんは僕らの先頭に躍り出ると、振り返って勝ち誇った顔を僕達に見せてきた。

「それにもう、バスが行ってしまっからな」

くるりと軽く身を翻し、はねた黒髪がびよこんと揺れる。そんな姿に僕はふと、あることを思い出した。

「ってことは不知火さんって、テニス部に教えてた暗記法、日常的には使ってないんだね」

「なんだそれは」

きよとん顔を向けてくる不知火さん。

「寝る前に思い出してー、ってやつ。昨日あれだけ時間かけたんだから、ポスターの件くらいなら覚えていそいなものだけど」

ああ、と不知火さんは前を向いたまま返事をして、本棟と部活棟を繋ぐ、外に剥き出しになっている渡り廊下に立つと、

「嘘も方便」

と大きめの声で言い、そのまま早足になった。その足取りはまるで逃げるような仕草で、いたずら好きな小さな子どものようにも見えた。

「ええ……じゃあ今日の教科別勉強法自体、どうなの……？」

「あたし今日帰ったら実践しようと思ってたのに……もーやる気なくした……」

「あーあ、生徒会室行かないとなあ……四階まで行くのたるっ……」  
残った僕らはそれぞれに落胆のような色を浮かべさせ、彼女の姿が遠ざかるのを見つめていた。結局、「先輩が一人で帰るのは可哀想だ」と風間さんが言ったので、バスに乗ったのはむしろ不知火さんだけになり、追及もすることもできなかった。

まあ先輩の鞆はすでに施錠されていた生徒会室のせいで回収できず、四階まで上がったのに今度は職員室に降りなければならなくなつて。まったく、不知火さんはポスターの件忘れてるしノートへの落書きが判明したし、どうみても部室の鍵だつて返してないし、風間さんもお弁当を僕に渡し遅れたけどおいしくて嬉しかったし先輩との茶番はちよつと迷走してたし。

今日変なことをしていないのは僕だけで、ちよつとした優越感を覚えた。

「あ。あのー、原島くん、でしたっけ？」

「はい？　そうですか」

部活棟四階の生徒会室から僕らが立ち去ろうというところ、知ら

ない生徒が話しかけてきた。

「私、吹奏楽部なんですけど、練習を見に来た顧問の先生が自習室の机が足りないって言ってたんですよね。それで私達になんて減ってるのかって聞いてきて」

「えー……っと、はい」

「持っていったの原島くんですよ。みんな見てましたから、明日の放課後までに戻しておかないと怒られちゃいますよ」

「はい……わかりました」

「それじゃ、よろしくおねがします」

ふふ、と笑われ、その生徒は去っていった。

これは僕のせいなのだろうか。

「何やってんのよジャンキー、あんた奇行が癖になってるんじゃないの?」

「耕くんしつかりしてよ、部に迷惑かけちゃったらたぶん不知火さん機嫌悪くなるよ」

ああ、責められているということは、僕のせいなのかな。

## 11・ドツペルゲンガー

11・

ある日の休み時間、テストめんどくせえなんて話をしていたら土屋が突然変な顔になった。

「どうしたの土屋」

「いや別に？」と酸っぱいものでも食べたような顔で僕の右側を顎でしゃくる。

不知火さんの席のほうだ。

「あ、そっか、私の勘違いだった。ごめんね不知火さん」

「気にするな」

不知火さんが教科書を持ったクラスメイトと普通に話していた。

少なくとも僕の見たところでは初めての光景だが、普段から部内でべらべら喋っているし、特に違和感もない。よく見れば相手は例のテニス部の人だったようだし。

土屋に目を戻すと、両眉に力が入っていた。通常より鋭角よりだ。

「……なあ原島、やっぱそんなもんなんだよな」

土屋が言った。

「何が？」

「は？ 今話してたる。世界史なんて習っても現代人が倣うようなことは一つもないってこと。今までの人類の歴史を作ってきたのは歴史を振り返ってきたような奴じゃないし、背景が違いすぎる」

「全くそんな話してなかったよね」

「そうだったな」

「ていうか何その持論」

「俺は過去を振り返らない主義だってことだ」

「ああ、未練がましい台詞を土屋から聞いた記憶は並行世界の僕のものだったみたいだ。最近記憶が混濁しててね、突然わけのわから



ない先輩に理由もなくキレられたりしたような気がしてひどく気分が悪くなる時がある。こんな経験した覚えがないのに、確かに頭の中に残っていてさ。それで最近ちよつとそういうオカルト的な方向に興味を持ったんだけど、そういえば幽霊とかって信じてない人のところには出てこないよね、もしかして並行世界とか異世界の解釈も信じていない人にとっては何の影響もないわけで、実際に他の世界が存在するんじゃないかって思ったその瞬間に他の世界が完成するとか思ったわけ。つまり僕がそれを信じたことによって土屋が未練がましい過去を僕にだらだらと垂れ流してきたような気がするんだけどさ、土屋は並行世界なんてもん信じていなさそうだし、いや、僕は信じているから知らない先輩に怒られたような記憶はあるんだよ？ 経験はないけど。で、もしかしたら土屋が僕に未練がましい過去を語ってきたのはこの世界、つまりここに居る土屋が話してきたことであって、過去を振り返らない主義とか言ってるこの土屋と矛盾するんじゃないかって不安になってさ」

教室のドアが開いた。

「きりーつ、れい」

日直が言った。

「せんせー、原島が滅茶苦茶めんどくさいんで無視していいですかー？」

土屋は手を挙げた。

「いつものことだ。相手してやれ土屋」

この国語の教師は対応がいつも適当だ。

「そんな」

教室がくすくすと笑う。

「……でも、土屋が言うことが事実だったのならこの考えは即座に棄却されるべきもので、所詮僕みたいな高校生の考えることって中途半端で頭でつかちな知識も無い背伸びしたアホっぽく、辞書と伝聞によって難しげな言葉を持ち出してくるだけで穴だらけなんだなあって思うんだ。そこでふと、実験的にまた別の考え方を提示して

みよつと」

「まだ続けんのかようるせーよお前！」

恥ずかしかつたら最後までやりきってやろうと思ったただけだ。僕は悪くない。

その放課後、一緒に部室に向かっていた不知火さんが思い出したように言った。

「並行世界とは何だ？ 気になる」

「え？」

「総助と話していただろう、小難しそうなことをごちゃごちゃと」

「SFとかでよく扱われる話だよ。元になった理論とか発想とかの詳しい話はよく知らないけど、同時に世の中が二つ存在して片方の世界ともう片方に同じ人物が居たり、とある行動一つで瞬間が無数に分岐したり、とかそんな感じの」

「同時に同じ人間が二人？」

目を丸くする不知火さん。妙に食い付きがいいのは今日に限った話でもない、のかな。

「話の過程でそうなるのもあるね。調べてみたらいろいろあると思うよ」

「並行世界とはドッペルゲンガーの世界か？ オカルトとも君は言うていたし」

「さあ。ドッペルゲンガーとは違うんじゃないかな」

部室に入って、不知火さんは先日貼り忘れたと話していたポスターを取り出した。今日から部活動が禁止になる期間に入るので、色々あつて貼れなかったこれを貼って今日は帰ることにしたのだ。風間さんは急いでいたのかすぐに帰ってしまった、僕らは二人で作業することになる。

「……私がもう一人いればこれを貼るのもあつという間なんだが。やはり叶わぬ夢だな」

夢とまで言わなくてもいいと思うけど。僕は肩をすくませた。

「不知火さんが二人も居たら色々大変そうだね」

「ん。そうでもないぞ」

「そうでもないんだ」

「アリだって働きものが居れば働かなくなる奴が出てくる。私がそうならない道理はない」

「ならポスター貼りもすぐには終わらないと思うよ。ほら、ささつと済ませて鍵返しに行こう」

「それもそうだな。やるじゃないか原島君」

「なにもやってないけどね」

「では行こう。画鋏は勝手に他のやつから奪う」

僕らは二手に分かれて、十枚のポスターを本棟の掲示板に貼ることになる。貼り終えたら各自解散、まあバス停で会うことになるだろう。

しかし何故か僕が先に貼り終えたらしく、バスがやって来ても不知火さんは出て来なかった。

さらに次の週、予定通り行われた前期中間テストは滞りなく、僕もテニス部の件でほどほどに勉強しておこうという気にはなっていたので、七割を切ることは無いだろう。副教科の勉強はほとんどしてないけど。

「今日も部活あんのか？」

全てのテストが終わった金曜日、土屋が僕に言った。時刻はまだ昼前で、これから何をしようかといった具合に他の生徒もまばらに残っている。

「さあ。さすがにないんじゃないかな？」

不知火さんとは、先週は部活ができなかったためほとんど会話らしい会話をしていない。風間さんとはたまに話していたけど、部活のことと特に話題になっっていなかった。

「じゃあ山田の見つけた新しいラーメン屋に」

「また今度ね」

「なんでだよつねえな」

「風間さんに空けとけって言われてるから」

「……………」

土屋はそれきり鬼のような顔になって硬直した。

反応しにくかったので黙ってそこに立っていたら、教室へ風間さんがふらふら入ってきた。

「耕くん耕くん。…………あれ？　なんかつちー怖いんだけど」

「つちー？」

僕が訊く。

「さっきテスト中に思いついたんだけど、今から土屋君のことをつちーって呼ぶことにしたの。あだ名で呼ぶと距離感がなくなるんだよ」

すると土屋がぱあっと明るくなったような気がしたが、僕は出来るだけそつちを見ないようにして、溜め息を漏らすように言う。

「あだ名ねえ……………」

「なに？　言っておくけど耕くんはあだ名で呼ばないよ？」

微妙につんけんして言うてくるのはどういうわけなんだろう。

「じゃあ今から風間さんのことは萌って呼ぶよ。下の名前で呼ぶと今の距離から更に近付ける気がする」

僕が言つと風間さんはぶすつとした。

「あつそ、じゃあ呼べばいいじゃん。あたしはずつと名前で呼んでるのに、耕くんは全然歩み寄ってくれてないけどね」

「そうかな？」

「そーだよばか」

先輩の悪い影響を受けてやしないか風間さん。

「お前ら仲良いな、外でやれよ」

土屋がいつの間にか鬼のような顔に戻っていて、僕らは顔を見合わせた。「どうしようか？」といったような具合だ。僕らが話している合間も徐々に教室の生徒は減っていて、土屋が言っていた山田の姿なんてもうない。鈴木も居ないし、おそらく他の友人ともう昼

食を食べに行ってしまったのだ。

「じゃ、どこ行こうか土屋」

「そうだね、今日はつっちーと遊ぼう」

すると僕らの結論は自然にこうなった。

むしる土屋は困ったような表情になったけど、何度か頷いて携帯を取り出した。

「よっ」

どういった風の吹きまわしなんだろう。

「どういつ風の吹きまわしだ総助」

「そういう風の吹きまわしだよ、水玖」

玄関先で、他の生徒が出ていく波に逆らうように立っていたのは不知火さんだった。不機嫌そうに毛先を指で巻いて、はねた髪をさららにびよこんとさせている。風間さんは僕の隣で二人の出方を伺おうとしていたけど、二人の方はすぐ僕らに向き直った。

「萌達が一緒だったのか？」

「さあ、遊びに行こうぜっ！」

風間さんが僕の肩の先でびくついた。異様なくらい爽やかな顔の土屋は確かに気持ち悪いけど、そこまで警戒することもないじゃないか。

「で、どこに行く？ 主導権は土屋に」

「マジか、俺は人生ノープランだから難しいな」

「……なんだと？」

不知火さんは土屋の言葉を聞くとさらに機嫌を悪くしたようだ。

「お前がダブルデートに誘ってやるから残ってる連絡をしたんだろっ、それなのにプラン立ても無しで私を呼ぶとはまったくいい度胸だな。悪いが眠くて体の調子が良くないんだ、これからだから決めるつもりなら私は帰って寝る。それに、スパッと適当に遊んで適当に見切りをつけて帰るつもりだったんだが、原島君と萌が一緒なら本気を出さなくてはならないし、今の状態では気が進まない」

不知火さんが背を向けると、すかさず土屋が肩を掴んだ。

「待てよ、俺を一人にしないでくれ」

「うるさいな、お前は一人でも大丈夫だ」

なんだろうこの台詞だけ崖っぷちのカップルのような感じの。見ててハラハラするからせめてお互いの顔を見て話して欲しい。

「駄々こねるぞ、俺がこねくりまわしたらもう大変」

「知るか」

見かねた様子の風間さんが、二人の間に割って入ろうと前に出た。「無理させちゃ駄目だよっつちー、不知火さん繊細なんだから優しくしてあげて」

へえ、不知火さんって繊細なんだ。

土屋もその言葉に引っ掛かりは覚えていないようで、控え目に口をへの字に曲げる。

「つつちー？　なんだそれは、お笑い芸人の転回か？」

不知火さんが何故か反応して、こちらによく振り向いた。

「違うよ、誰それ？　土屋君のあだ名だよ。可愛くない？」

「総助は塩の粒程度にしか可愛くないが……」

んん、と腕を組んだ。

「よし、とりあえずは何処かに行こう」

「お、やっぱりノリだけはいいな！　んじゃさっさと行こうぜ！」

「いいの？」

土屋が前を歩いて靴を履き換え始めると、風間さんが心配そうに言った。

「ああ。考えてみれば君達と遊んだこともないし、いい機会だ」

眠いと文句を言っていた割には切り替えが結構早い。このフットワークの軽さは不知火さんらしいけど、そのうち軽過ぎてどこかに吹き飛んでいってしまわないだろうか。

「そう？　別にだるくなったら言っていからね、今日に命懸けてるわけじゃないから」

「ならまずはカラオケに行こう。勝手に総助に歌わせて私は一旦寝

る」

風間さんは笑いながら「それだと寝かせてあげないかも」と言っ  
て、もう先に行ってしまった土屋と同様に、靴を取り出して履きか  
えはじめた。

「結局主導権は不知火さんが握るんだね」

僕が言うと、不知火さんはあくびをする。

「私の手綱は私が握る。居眠り運転は好きじゃないが、他人に握ら  
せるよりは怖くない」

「よく恥ずかしげもなくそんな言い方できるよ」

「やはり眠くて判断力が鈍ってるな」

「なら握ってあげようか？」

「傷害で訴える」

「変な意味じゃない」

僕らのやりとりを黙って見ていた風間さんは、今にも頬を膨らま  
せてきそうな媚びた上目づかいで僕を睨んだ。

「耕くん浮気者だ」

僕は返答せず、一旦みんなで玄関を出た。先に出ていた土屋は何  
故かボウリングのフォームを既に練習し始めていたけど、カラオケ  
に行くことにしたと話すとがっかりした。

「……まあ、そういうつもりでもないことはないけど、いわゆる下  
心もほとんどないと思う」

僕はそのあたりで風間さんの方を見る。

「時間差言い訳？」

「ていうか風間さんもあんな風にわざとらしく怒るなら、むしろ普  
通に殴ってくれた方がやりやすい」

「でも人の目があるし、あたしそっち系で攻めてくって決めたから  
ね。傍から見たら耕くんが百パーセント悪者になるから。あたしの  
に見ても、たらし魔耕くんが百パーセント悪者」

「いやどっち系でも攻めなくていいよ、ていうかたらし魔耕ってち  
よっと面白いね」

僕らがそんな話をしていると、今度は不知火さんが具合の悪そうな顔になって小さく口を開ける。

「……ずるいな……」

「あ？　なんか言ったか水玖」

土屋と僕は気付いたようだけど、風間さんはなにがなんだかといった具合に首を捻っている。

どう言っているのか見当がつかなかったので、聞かなかったことにした。

カラオケなんて、あまり行った経験がないなあと思っていたんだけど。

僕の知っているカラオケは、随分と前時代的なものだったのだろうか。

受付を済ませた段階で土屋の動きが忙しないあと見ていたら部屋に入るなりテーブルに置いてあった二つのマイクのうち一つを掴んで「よっしゃあテスト終わったああああ！」って叫び出したんだけどその瞬間に不知火さんがマイクを引っこ抜いてタバコ臭いソファに倒れ込んだと思ったら「眠いから鼻歌で我慢しろ」なんて言い始めて店員さん苦笑いで部屋のドア閉めて、土屋は「しょうがねえな」とデンモクってやつをいじってよくわかんないBGMをかけ始めたんだ。立つたままね。そこはまあ、許容範囲だ。ここが寝る場所代わりでも特に驚かない。

それで風間さんが寝てる不知火さんの横に座ってさらにその隣に僕が座ったんだけど、何を思ったのか風間さんは勢いよく立ちあがって引っこ抜かれたマイクを接続して、機械の手前にしゃがんでぼちぼち何かいじりだした。「まさか十八番」と土屋が言ったんだけど僕は何故が一瞬、何の話か察することができなかったんだよね。いやあ驚いた驚いた、突然部屋の大きな画面に英語の題字が現れたと思ったら風間さんが耳を焼くくらいの激しいシャウトを始めて、土屋は驚いて僕の横に滑り込んで「なんだ萌ちゃんどうしたんだ」



ってビビってるんだけど僕も同様にちよつとこれはどうなのかなあ  
って硬直して、寝ていた不知火さんのほうを見たらもう睡眠モード  
に入っちゃってるし、一方で風間さんはマイクを握りしめてたりテ  
ーブルに片足を乗せてたり、いや歌は多分かなり上手いと思うんだ  
よ聞いた感じとか声の伸びとかそういうところ、でも音量が明らかに  
部屋の限界を越えてびりびりくる骨の振動がイメージ震度五強  
くらいだし何か剣幕が凄いから土屋も音量を下げていいのか迷って  
るし、耳が痛い耳が痛い、風間さんが僕をものすごい見てくる、ああ  
この世がいかに憎いかを象徴的に表す何かシンボルみたいなもの  
でもなれそんな風間さんが怖い。

って感じで激しい風間さんが二十分くらい続いた。不知火さんは  
やっぱり寝てた。

「趣味はヒトカラです、マイクを持つとテンションが上がります！

おおーいえー！」

顔と目を真っ赤にした風間さんが落ちついた声でそう言ったのは  
僕の耳が完全に遠くなってからで、まともに聞き取れたともいえな  
い。お疲れ僕、お疲れ土屋。

僕と土屋がそんな目配せをしていると、風間さんが「あのね」と  
マイクで。

「最初が肝心だからあえて最低なあたしを演出してみました。だめ  
？」

可愛くころつと小首を傾げた風間さん。こんな小さく控え目な彼  
女のどこからあんな悪魔的な声が出てくるのだろう。僕は放置され  
ているもう一本のマイクを取って、スイッチをオンにした。

「……嫌いじゃないけど、今後は時と場合を考えるように」

土屋が僕のマイクを取った。

「耳がいてー」

「おおーいてえー！」

そこは「おおーいえー」じゃないんだ。

その後は僕も知っているような有名な曲を代わる代わる歌って、

喉が慣れてきた頃に無難に盛り上がりそうな曲を入れたら、土屋と風間さんが常識の範囲内でノリノリになって楽しかった。やつぱり大声を出すとすつきりする。最近では叫ぶことも全然無かったし。

「にしてもこいつ起きねーな」

まともに歌いだして一時間半が過ぎると、土屋が不知火さんを気にし始めた。マイクを持っていた風間さんも、流れていた音量を下げる。

「不知火さんそんなに疲れてたかな？ テスト前になにかしてたっけ？ 耕くん知ってる？」

「さあ、知らない。っていうか不知火さん、普段からなにやってるかわからないところあるし」

「耕くんが知らないんじゃないね」

風間さんのこの言葉が嫌味っぽく聞こえるのは、僕の心境の変化のせいなのかな。

「つーか今気付いたんだけど、腹減ったな」

「そういえばもう二時だしね、なんで何も食べないで来たんだっけ」

「不知火さんが寝たいって言ってたからじゃないのかな？ ね、耕くん」

風間さんのこの言葉が嫌味っぽく聞こえるのは、僕の心境の変化のせいなのかな。

「んじゃダブルチーズバーガーピクルス抜き食に行くか。カラオケで食うほど金もない」

「普通のハンバーガーとポテトでいいや。そんなの食べるとか土屋金持ちだね」

「そしたら不知火さん起こさなきゃいけないけど、耕くん起こす？ 風間さんのこの言葉が。」

「ねえ萌、相手は仏じゃないんだよ？」

僕が見ると、風間さんは肩を落としてしゅんとした。

「……ごめん、冗談っていうか」

「変わってるね」

「それは耕くんよりマシかな？」

「これまた面白い冗談、いや、僕はこういう冗談は言っていないつもりだ。」

「おい起きろ水玖。飯食いに行くぞ腹減った」

なんて話しているうちに土屋は横になつて寝ている不知火さんに声をかけている。少し前に頼んだ水入りのグラスを不知火さんの頬に当てて、もう片手で肩を揺すっていた。

「……………」

起きない。もしかして彼女は寝ている間、五感が死ぬのかもしれない。風間さんのあの歌を寝に入つた段階でスルーできるくらいだ、あり得ないこともなさそうだ。

「……………」

土屋もグラスをテーブルに置いて、首を振って僕らに困ってしまった様子を見せた。

「本当、こいつ何してんだろうな」

うん、と風間さんがソファにぐっともたれる。

「あ、そういえばつつちーって不知火さんと同じ中学でしょ？」

「だよ？」

「昔から不知火さんってこんな感じだったの？」

また藪から棒に。

「ん？ あー、基本的には昔からずっとこんな感じ」

「それってさ、つつちー的には追及していいところ？」

土屋は寝ている不知火さんを見て、考え込むように口をゆっくり開けた。

「聞かれても絶対話さないってことはないんだけど、正直なところあんま聞いて欲しくないって感じじゃねーかな」

「え？」

「なんだ原島」

「いや別に」

「……………んー？」

僕の反応を見た風間さんが若干不満そうな顔になった。

「二人、何か隠してるの？」

「俺は基本隠してないつもりだけど、原島は隠してるっばいな」

「そうなの？」

僕に視線が向いた。

だがしかし、そんなことを土屋は言うが、以前僕は不知火さんのことを直接的にかなり聞いた。もちろん僕から尋ねたこともあったが、最初に聞いた分は土屋から話してきたようなものだ。ただ単に、たまたまそういう気分だったのか。しかし元々昔の事を話したくなかったというのなら少し違う気もする。以前話した昔の話を今になつて話したくなくなるようなことなんて、なかなかあるとは思えない。

「むしろ土屋のほうが何か隠してるんじゃないかな」

土屋はお手上げのポーズで両手を挙げた。

「そりやお前、含みのあるような言い方をしたんだからそういうことだろ。察しろよ」

「やっぱりあるんだ！」

風間さんが土屋に詰め寄る。たじろいだ土屋は、視線を誰にも合わせようとしない。

「それ聞いてきちゃうの？」

「ううん。聞かないことにする」

意外なことに、風間さんはあっさり身を引いた。

「そう？」

「不知火さん、もう起きてるしね」

「……………」

僕と土屋は瞬きを増やし、ゆっくりと頭を不知火さんへやった。

「……………今起きたの。別にこれは盗み聞きとかじゃないもん……………」

もごもごした口調で、聞いたことのない媚びるような声を発しながら目を擦って。上体をゆっくり起こした不知火さんは僕らを向いた直後、大事なことに気付いたようでまたソファに勢いよく倒れ込

んだ。

「聞かなかったことにしてくれ」

頭を抱える不知火さん。耳を赤くしていないかと覗いたけど、赤くなっただけはなかった。

「なにも聞いてないよ、たぶん」

風間さんが言う。

「あくびなら聞いたかな、ごめん」

僕は焦点をずらそうと謝る。

「いーからもう、腹減ってんだからさっさと起きやがれ」

土屋は突き放すように立ってテーブルに置いてある伝票を手に取り、学生鞆を肩にかけて早足で出ていった。

「……代金はいくらだ？」

枕にしていた鞆に手をつ込んで、不知火さんは寝転がったまま尋ねてきた。風間さんが心配そうに不知火さんの顔を覗き込むと、驚いたような顔をする。

「ちよつと待って、不知火さん顔真っ白だよ？ 大丈夫なの？」

「寝ると低血圧になる。それだけ」

それだけか。僕は口を開いた。

「なかなかお疲れの様子だね」

「別に、テニス部をカバーしようとして見事に滑っただけだ。要するに自業自得」

財布を見つけた不知火さんは起き上がって、僕らもそれにならった。部屋を出ると土屋がカウンターの横で退屈そうに立つていて、「飯食う時に返してくれ」と言って僕らを店の外にこまねいた。

カラオケ屋の隣の隣くらいにある全世界にチェーン展開している大人気ハンバーガー店で、僕らはそれぞれ適当な注文をする。金も無限ではないのももちろん大した食事にはならないけど、テーブルが四人できっちり埋まっている分、質素にも見えない。

「で？ お前何やってたんだよ」

そこで普通のチーズバーガーセットを頼んだ土屋は、ポテトを弄びながら言った。土屋が正面に構えた短いポテトの先には、顔色の回復した不知火さんが面倒くさそうな顔でハンバーガーのパン部分を持ちあげている姿がある。

「行儀悪いなあ」

土屋の隣でそれを見ていた僕が言うと、ハンバーガーの上半分を持ちあげたまま不知火さんはかぶりを振った。

「違う、これは無料でもらえるケチャップでハンバーガーのポリウムを底上げしようと思ったただけだ。貧乏症を舐めるな」

そう言って、店員にもらった本来チキンナゲットについてくるケチャップを、剥き出しになったパティにもりもり乗せた。ちよつとケチャップが指について、見つめたままぺろりと舐めた。

「で？ 不知火さんはなにやってたの？」

風間さんが土屋と同じ質問をした。

「だから言ったじゃないか。テニス部のカバーをしようとして滑った。ムキになってたらテスト期間にまで食い込んでな、私にはパシリの才能があるのかもしれない」

全く要領を得ていない。僕は首を捻った。

「まあ確かに、お前はパシリにされるかされないかのギリギリラインに常に立ってるわな」

それでも土屋は何度か頷いた。というか現在やっていることは、言われてみればまるつきりそれだと思う。

「不知火さんをコントロールできるとは思えないけどね」

「さーな。内容にもよるけど、頼んだらだいたい動くぜ、こいつそれは一理ある、むしろ一理どころではいのかな」

不知火さんは僕らのやりとりをハンバーガーをかじりながら聞いていた。はみ出てきたケチャップが口の横について、風間さんが「口裂け女みたいだよ」拭い、むしろむしろと咀嚼し終わると紙コップの水を勢いよく飲んで目を見開いた。

「そう。私の能力に応じた頼みしか受けなくていいんじゃないかと

思った」

いかにも普通なことをこれ見よがしに言った。商売じゃないんだし、その程度で十分だ。

「ごもつともだと思っけど」

「俺もそう思う」

「あたしも」

「ん」

不知火さんは一息ついて、

「いやな、聞いてくれ。例のテニス部なんだが、一学期の最初の試験の段階でどうしていきなり赤点取るな、なんて条件を顧問が出したか気になったわけだ。常識的に考えて一年にいきなりプレッシャーを与えるのは精神衛生上よくない。もともと初めての試験なら、一年はそれなりにやるうと思っ奴が大半だ、ウチの学校ならな。それで先々週の金曜、あの部長に訊いた。前回のテストはだいたいどれくらい成績だったのか、と」

不知火さんはまくしたてるように言っ、水を飲んだ。

「しかしおかしなところがあつた。前回、つまり前年度最後の試験での二年生の成績は、全員アホみたいな点数ではあつたが、赤点は誰も取つていなかった」

「じゃあなんで怒られたの？ 部長さん怒られたつて言っただけで、風間さんが口を挟む。」

「二年のせいだ」

「は？」「え？」

僕と土屋は首を捻つた。

「間違えた、当時二年だった生徒、つまり今は三年生だったな紛らわしい。部長もちよつとアホなのか知らんが、当時顧問に成績を怒られたのは初めてで、内容をよく聞いていなかったとか。だから赤点ギリギリ低空飛行を怒られたのだと思っいたらしいが、本当は違っ。彼らは飛び火しただけだ」

「ああ、先輩の先輩がひどい点数でも取つたの？」

僕はしたり顔で言った。

「惜しいな」

不知火さんが指を横に振ると、土屋が腕を組んだ。

「基本蚊帳の外なんで最初の方からいまいち話がつかめねーんだけど」

「その通りだ総助、今の三年はそのテストでカンニングをした」

「どの通りなんだか……」

土屋は肩を落としたが、不知火さんは続ける。

「校則によってカンニングは二週間の停学となるわけだが、ウチの高校の最後の期末テストはだいたい二月の末らしい。三年はそこで二人ともカンニングをして、そのまま部活には音沙汰無し。復帰後すぐに学校は春休みに突入し、彼らは次年度から受験を控えることになる。まあ、だから、なのかは訊かなかったが、それ以降三年は部活に顔を出していない。現在の部長が顧問に直接部長を任命されたのも春休みらしく、もしかしたら三年のほうと顧問の方では話し合いがあったのかもな」

土屋のポテトに手を伸ばし、ケチャップまみれの食べかけハンバーガーに挟む不知火さん。

「でもさ、それって不知火さんが眠いのと関係なくない？」

風間さんがストローを啜えながら言った。すると不知火さんは苦々しげにハンバーガーにかじりつき、またケチャップで顔を汚した。

「ああ。私は何をトチ狂ったか、その三年共をわざわざ探して声を掛けてしまった」

「……やべえぞ、魔性の逆ナン女、不知火伝説が高校でも発揮されて」

「そんな話はどうでもいい、お前のポテト全部食っぞばっさりいった。」

「で、だ。私は『あのお、テニス部の先輩たちですよねエ』と近づき、なんやかんやを説明して今回のテストについての進捗状況を聞いてやった。するとどうだ、『いやア、課題に追われて手がつけら



れない教科があつて』なんて言うのだ。なら私がどうするか、もう見当はつくだろう」

僕には若干理解しかねるけど、土屋は解つたように頷いた。

「どーせ、『吾輩が課題を受け持つてしんぜよう』とか抜かしたんだろ？」

「それを訊きに行ったのが先週の月曜日だったんだ。そして先に言ったが、先々週の金曜日にはすでに部長からある程度話を聞いていた。ならばと思う、私は思う、馬鹿で実力もなさげな三年が間抜け丸出しな成績を取つてしまつては幽霊部員といえど現部員に迷惑がかかる可能性もあるのではないかと。私はテニス部員が赤点を取らないように手伝つてほしいと頼まれた身であつて、それを黙殺する理由はないと思つていた」

「でもさつき不知火さん、三年は顧問と相談して来なくなつたんじゃないかつて言つてたよね。それに、三年はもう引退だから関係無いんじゃないかな？」

「そのあたりは今週ふと思つたことだ。もう既に手遅れだった。実際のところ今回のテストは、顧問もただ単に、前回の三年の出来事が尾を引いていたために勢いで言つたような側面もあると考へている」

風間さんがそこで、焦れたように椅子に座りなおし、不知火さんの耳まわりで控え目に。

「ねえねえ。ずばり課題つてなんだつたの？」

「数学？・A、？・Bの問題集二十五ページ分。最終的な解答は付いているんだが計算過程は自分で書かなくてはならない。三年はセンターが控えているためか、私の心を噛み殺しにかかるような意味のわからん問題ばかりだった」

「……………」

うわあ、と僕は大きく口を開けて溜め息をついた。

「それですつと、先週の頭から本日金曜の朝までずつと、一人さびしく解いていた。参考書は図書室から借りたんだが、数字と記号と

図形と放物線が口から出て止まらなくなりそうだった」

黒い瞳を微妙に潤ませて、不知火さんはハンバーガーをかじる。

「解けたの？」

風間さんが言った。それは質問していいところなのだろうか。

「ああ。解いた。類題を参考にしたり、なんとか気合でやり終えた。二年の半ばくらいまで個人的にやっていたつもりだったが、応用力が微妙な私にはなんとという苦行だっただろう、結局一から勉強し直して、まともに解答が書けるまで成長したんだ。今の私なら、これからの数学の授業などゴミだな」

「……うん、まあ。解けたならいいんじゃないかな」

僕は一応、「頑張ったんだね」的なニュアンスの声で。

「全然よくないぞ」

不知火さんは土屋のポテトを食べる。

「私自身のテストがもうダメだ。だいたい半分書いて全部寝た。ものによっては唾液が付いていて、ろくな結果にはならないのが目に見える」

「……ったく……」

うんざりしたような顔になった土屋が「本当馬鹿だな」と呆れた声を出して、不知火さんに残りのポテトを押しつけた。

「くれるのか」

「やるよ。お前腹も減ってるみたいだし」

かたじけない、とむしゃむしゃノンストップで食べはじめると不知火さんを、僕らは保護者のようにぼんやりと眺めた。意外と彼女は誰かがストッパーになっていないと変な方向にどんどん走っていつてしまうのかもしれない。今回のこともそうだし、ポスターの件でも最初、生徒会の承認をもらう気はなかったみたいだし。そのうち何か厄介な事件にでもならなければいいけど。

「つい、食ったら手洗えよ？ きつたねえぞ指」

「にえむさとひよくおくがひっこうひててな」

「口に物入れたまま喋んな」

悪態をつくような素振りをする土屋も、不知火さんにちゃんと付き合っただけがいいのに。

そんな僕の視線に風間さんは気付いたのか、肩をすくめてにこりと笑ってきた。

その次の週。

帰ってきたテストの僕の平均点は七割強、風間さんは九割弱、テニス部員は一年二年とそれなりにいい点をとったと聞いた。つまりは結果的に、不知火さんの目的は果たされたということになる。

「やはり私がもう一人、ドッペルゲンガーでもないかと困る……並行世界は人材派遣とかしてないのか？」

「これでもある意味すごいと思うけどな」

しかし、点数を底上げさせるきっかけをつくった本人の成績。

五十の数字が並び続ける答案用紙のなんと壮観なものか。

「まあいい」

テストの束を丸めて鞆にぶち込んだ。

「今日はこれから美術部のデッサン練習台になってくる。別に脱がんなが、私の体は黄金比で構成されているらしく、それはそれは美的に価値のあるバランスを誇っているだとか」

豊満とは言えない胸を張って、この人は本当に何を言ってるのだろう。

「随分切り替え早いね」

「過去にしがみつくのは好きじゃない。昔を振り返るのは死ぬ前にいくらでもやってやる」

「がららら、ぱたん。」

どこかで聞いたような台詞を残して、不知火さんはいつものようにどこかに行ってしまう。

「やっ」

「どうしようか。」

ここに僕がもう一人いれば暇でも潰せるんだけど、そう簡単にも

いかない。

ドッペルゲンガーに遭遇してしまえば目撃者は死んでしまっじやないか。

## 12・やまとなでしこ(前)

12.

今日の面子は僕と不知火さん、部活のない風間さんに暇な生徒会長の海原先輩だ。

それぞれ僕は世界史の課題、風間さんと先輩はなんかファッショナブルな問題に対応するため、とか言って雑誌持ちこんで読んで、不知火さんは今日の相談者を相手にしている。なんてことはないいつもの光景といえるのだけど、なんてことはなくない人は確かにいるんだなあ。

「だからあ、そうじゃないでしょあ？」

「私には判りかねます、勘違いかもしれない」

不知火さんも珍しく敬語らしきものを遣って、それなりにカドが立たないように配慮までしている。先生と話す時もたまにタメ口聞いたりするのに。

「そんなわけないじゃん。……あー使えないわあー、ホンット最悪かも。わざわざこんな最低なところに来たのに、都合悪そうなのでさよーならはあり得くない？」

彼女は憎々しげに部室内に響くほどの舌打ちをして、それまで触れないようにしていた風間さんと先輩まで彼女を見た。ちなみに僕はハラハラしながらずっと見ていたんだけど、その人はそれもちょっと気に食わなかったらしい。

「キミい、こつち見ないでくれないかなあ？　あなた、さっきから視線が気持ち悪い。どんな人生送ってきたらそんなドブみたいな目の色で他人を見れるの？　うん？」

これならまだ先輩のほうが可愛げのある暴言な気がする。もう風間さんなんて可愛いすぎるくらい。

「部員の話はいいでしょう。とにかくもっと詳しく話していただけ

「ませんか？」

不知火さんが不知火さんじゃなくなってるよ。

「そうね……」

うーん、と小首を傾げるその女性。さらりと腰まで伸ばされた真っ直ぐな黒髪が艶めかしい、全校生徒の前でやまとなでしこと評したところ、満場一致で同意を得そうなその姿。

三年五組、峰木美弥みねぎ みやび先輩。

「とりあえず、ぶつ殺す方向で進めていきたいんだけど……」  
「なにが雅だよ、本当に。」

「あの女信じらんない……まだ原島のがマシ」

峰木先輩が帰った後、海原先輩が疲れた声で言った。

「怖いですよ、あんなの見たら先輩なんて全然女の子してます」

「……は？ 別にもともと、わたしは普通の女の子でしょうが。ウザいウザい、原島の分際で何言ってるんだか……」

先輩が僕に向けて虫を払うような動きを見ると、先輩の隣で顎を両手に乗せていた風間さんが半目でこっちを見ていることに気付いた。

「……風間さんなんてもう、おしとやかな女の子にしか」

「そついうのいいからね、たらし魔くん？」

「ここ、といい笑顔を送ってきた。」

僕は完全に外したようだ。

「それにしてもどうするか……面倒事は避けるつもりにした手前、明らかに簡単に断れないタイプの人間が来てしまった」

不知火さんは一人掛けソファで腕を組んで、考え込むように眉間に力を入れている。

「どうするって言っても、断れないならやるしかないんじゃないかな。気は進まないけど」

「私としてもやらないうりたくないで話を終わらせるつもりはない。残念ながら先日の出来事があったとはいえ、私の根底は覆ったわけ

ではないからな。それでも少し、あの先輩は激情に流されているように見える。頼みも頼みで、素直に警察に通報した方が円滑に終わるだろう」

「それ、直接言えばよかったのに」

「個人的に警察の介入は推奨したくない。自発的にかけるなら構わないが」

「なんで？」

「あれは結構まどろっこしいからな。通報したらとても面倒だったとか取り合ってくれなかったとか、それが私のせいだ、なんて言われるのは嫌だ」

要するに峰木先輩とは穏便に別れたいと。

「でもそうなると大変じゃない？ どうするの？」

風間さんが雑誌を閉じて不知火さんに言う。不知火さんは頬を掻いて、口を僅かに尖らせた。

「仕方ない……とりあえず今日は解散だ。峰木先輩がまた来るのは明後日と言っていたし、私達は明日、まともな会議をしよう」

時刻は五時ごろ。

部活の終わりにしては随分と早い時間だったが誰も異論を唱えることもなく、それぞれ帰り支度をした。

「あー、峰木先輩な。部活つつーか、運動部やってる奴ならほぼ全員知ってるだろ」

翌日の昼休み、山田が自分で作ってきたという弁当をつつきながら。

「だってあの超人超美人だし？ 彼氏とか今までつくったことないらしいし？ それでいて礼儀正しいし？ 弓道部のエースでこれから件大会控えてるし、袴にぴったり黒髪ロングストレート、街歩いたらスカウトされてたとかいう話もなかったっけ？」

「全然知らなかった……」

「まあ確かに、お前には風間さんがいるし不知火さんとも仲良いみ

たいだもんな。恨めしいカスだよこの野郎」

山田が言い、鈴木が無言で頷く。往々にして不快なコンビネーションだ。

「でも峰木先輩、実際はあんまり性格良くないっばいよ」

「へー、そうなのか」

土屋が興味なさげにパンをかじった。山田はそれを見て首を捻った。

「……今日の土屋は何なんだ、やたら反応悪くないか？ バイトで絞られたのか可哀想な奴め」

「俺がバイトでへマするわけねーだろ」

「あれ、土屋ってバイトしてたんだっけ」

「前言った。駅前のコンビニだよ、部活終わった奴らがよく俺の顔を見に来たりしないこともない。なぜなら俺は人気者だから」

「そういえばあそこ混むから全然行かないなあ、それにどうでもいい」

すると土屋は変な顔になった。

「それがどうでもよくねーんだよな……」

「いや、土屋は人気者じゃないだろ、大丈夫か？」

「だよ。やっぱりどうでもいいよ」

僕と山田が珍しく同じタイミングで突っ込んだ。土屋は更に変な顔になる。

「あ？ あー、そっちじゃねー。さすがに冗談、俺もこの学年でのポジションは微妙に見えてきたところだ……とうっ」

土屋は背を伸ばし、食べ終えたパンの袋を丸めてゴミ箱に投げ、見事に外した。ちょうど通りがかった女生徒がそれを捨て、口を縦に大きく開けた土屋は両手を合わせて謝ると、女生徒は苦笑いで軽く手を振り返した。そして土屋は僕らに向き直り、腕を組み直す。

「それで何がどうでもよくないの？」

「……最近長々と立ち読みする客が一人増えたんだけどさ……めっちゃ俺睨んでくんのね……マジでなんもしてねーんだけどさ、タバ



コとかカウンターに叩きつけるし、小銭とか投げるように置くし、しかもその間常に俺をガン見」

「土屋はけっこう考えてること顔に出るタイプっぽいから、そのせいでと思うけど」

「営業スマイル舐めんなんて、中年ウケは良いぞ」

腕を組んだまま、突然土屋は「いらっしやいませー」と笑顔で言いだした。

「……どうよ」

「不快だよ」「不快だな」「キモい」

僕、山田、鈴木、の順で。複数で話しているとだいたい黙って聞いている鈴木も口を挟んできたくらい残念な代物だったらしい。山田は呆れ顔で口を開いた。

「今の感じじゃあ『こいつ舐めてんのか』って思われるだろ。そりゃ睨む奴は睨む。俺もそんな接客をするところはあんま行きたくない」

「お前らなあ、これでも無愛想な奴より全然マシだって。同じコンビニの大学生の先輩いるんだけど、一年以上やってるのに態度めっちゃくちや悪いからな」

「じゃあそつちに怒ってるのかもよ、本当に接客に問題ないならね」と土屋は急に目を丸くして表情を緩めた。

「それは……あり得るぜ……!」  
正直それはどうなんだろう。

「へえ、ていうかつつちーってバイトやってたんだね」

そんな昼休みの話を風間さんにした。今日のフリスビー部は普通に先輩に連絡を入れてサボるらしく、僕らは一緒に部室に向かっていた。

「バイトね……萌はバイトとか興味ないの?」

「あたしはどうか、どんなの向いてそう?」

「やっぱり接客かな。にこにこするの得意でしょ」

「……………別に苦手じゃないけど」  
微妙な間があったのはなんだろう。

「なに？」

「ほら、にこにこする相手は選びたい年頃じゃん」

「なにそれ、どういうこと？」

「え、そういうことでしょ！もしかしてわざと言ってるの？今結構恥ずかしいこと言ったんですけど！」

ふくれて学生鞆を両手でぶらぶらさせる風間さん。下手なことを言つと振りかぶつて殴つてこないか心配になる。

「……………ああごめん、そういうことね」

「絶対わかつてない！耕くん最近どんどん鈍くなってない？」

鈍くなつてる、と言われると困る。もともと僕は鋭い方ではない。けれど風間さんは納得がいかないようで、歩きながら左右に振れる幅が大きくなつてきた。

「そんなに鈍くなつてるかな？」

「なつてるよ、昔の耕くんっぽく」

……………そうなんだ、知らなかった。

「二人とも仲良いわね、あてつけ？」

そこで僕ら以外の声が挟まれた。そちらの方を向くと、部活棟の階段の上から海原先輩が降りてきていた。

「あ、空姫さん早いね」

「不知火が部室開けとけつて。どうせ暇だし来ちゃったわ」

「あれ？てことは不知火さんは後で来るの？」

「そうなんじゃない？めんどくさいからそこまでは訊かなかったわ」

風間さんが左右にふらふらしていた勢いのまま、鍵を手に持った先輩の元にてけてけと歩いていく。そのまま僕を差し置いて会話を始めたので、部室に着くまでぼうつとすることに。

「結局あの女のこと、どうするのかしら」

先輩がふと言った。

「わかんない、今日不知火さんと話してないからなあ。空姫さんは何も聞いてないんだ」

「ええ。それに不知火もそんなすごい解決策考えてるとは思えないわ。あいつ根本的には結構いい加減だし」

確かに、それはなんとなく分かってきていることではある。不知火さんは性格的には特殊なタイプといえるだろうけど、発想やらが特筆して変わっているともいえない。いい加減というか、たくさんの物事に対して切り詰めて考えてないだけでもいえる。もっとも行動力がある分それは表面には見えにくい部分かもしれない。

「そうなの？」

風間さんは気付いていなかったのか。風間さんこそ鈍いなあ。

「そうよ。なんでもできる人間っぽい感じに見せてるけど、やっぱり凡人は凡人。本当の変人にはどうしたって敵わないわよ」

「先輩は本当の変人を知ってるんですか？」

すかさず訊いてみると、先輩は僕に振り返った。

「……あなたとか、いい線いってると思うけど？」

あれ。先輩の話の流れだと、『なんでもできる人間』イコール『本当の変人』じゃなかったのかな。この定義なら、少なくとも僕は変じゃない。

話しているうちに部室に到着して、僕らは適当な位置に腰掛けて不知火さんを待つことにした。風間さんと先輩はいつものように雑談をして、僕は携帯をいじったり。

「……やだつて」

やがてそれほど待たないうちに廊下から声が聞こえはじめた。

「嫌がるな」

不知火さんの声だ。

「めんどくせーよ」

「……………」

どうやらこちらは土屋の声だ。

「男出が要るんだ。残念なことに私ではお前にしか頼めない」

と、部室のドアが開く。僕らは入ってきたドアに視線を向け、土屋はぼつの悪そうな顔でそれぞれに目を向けていった。

「……………」  
土屋は不知火さんに腕を掴まれて、逃げようにも逃げられないらしい。激しく抵抗する気もあまりないようだけど。

「土屋君？」

「……………うわ、なんで……………」

そこに先輩が声をかけると、土屋の抵抗は完全に収まってしまった。

「あーあ、だから……………」

部屋の空気が微妙に張りつめたような気がしたのは僕の勘違いではないと思うんだけど、不知火さんは当り前な顔で土屋を引っ張ってきた。そして土屋をパイプ椅子に座らせ、彼女は我が物顔で一人掛けのソファに座った。

「さて集まったな」

足を組んで、不知火さんは肘かけに頬杖をつく。

「ではさっそく、峰木美弥琵琶先輩への暴行未遂事件について話し合おうじゃないか」

梅雨でじめつとしたこの時期に、さらにねばっこそうな事件が発生した。

被害者は三年五組、弓道部エースの峰木美弥琵琶先輩。生徒の中では学校一の美人だとか言われているとか言われていないとか。それなりに有名だが、知らない人はもちろん知らないくらいの知名度を誇る女生徒だ。

事件が起きたのはつい先日の部活の帰り、時間にして七時過ぎたところ。峰木先輩が学校から駅、駅から歩いて家に帰る途中で発生した。

音楽プレーヤーで耳にイヤホンをつっこんで歩いていた峰木先輩は、注意力散漫な状態で住宅街を歩いていた時に、突然後ろから誰

かに抱きつかれたのだ。幸い峰木先輩は持ち前の運動神経によってその相手をなんとか振りほどき、鞆で一発殴って即座に逃げ出した。覆面らしきものをしていて相手の顔は見えなかったが、殴った際の声と体格から男であることは間違いないそうだ。

「こう聞いてみると大した事件でもないような気がするよね」

不知火さんのホワイトボードに落書きしながらの説明を聞き終え、率直な感想を述べた。

「ま、あの女じゃ正直、事を重く捉える気にもならないわね」

くるくるした髪をいじりながら興味なさげに海原先輩が言う。

「しかもさあ、下手にすると過剰防衛になりそう。確か男と付き合ったことないとか聞いたし。なんだかプライド高いのか潔癖なのか、性格も悪いから絶対危ないと思うのよね。相手に切腹とか強要するんじゃない？」

「だよ。あの人の感じだと、逆に刃物とか持ち出しそう。私の価値がー、とか、男なんてー、とか、絶対他人を見下して過ごしてきてるもん。半端にやってキレたら、その反動で何するかわかんないよ」

風間さんと先輩は好き勝手言うが、女子高生二人が女の悪口を言う姿は妙に生々しく居心地が悪くなる。人のことを言えるのか、という言葉はこの状況では言っちゃあいけない。

「それには私も同意するが」  
「するんだ。」

「んな話されても困るわ。女子高生の生態を男の前で浮き彫りにするんなよ」

土屋がぴりぴりした口調で言うが、これはかなり思い切った行動ではないか。

「あら。土屋君は峰木先輩の肩を持つわけ？」

「俺はこの話が終わって自由になれればそれでいいんですよ、空姫先輩？」

嫌味ったらしい表情で先輩が噛みつくくと、土屋は笑顔でゆったり

と言葉を返した。

「ドライね」

「空姫先輩がそれを言いますか」

二人の間で黒い笑みが交錯している。やっぱり何かあったんだなあ。僕は肩をすくめ、不知火さんの方を向いた。

「それで不知火さん、どうするの？」

ん、と不知火さんは頷く。

「無難に尾行をしたいと思う」

「誰を？」

「もちろん峰木先輩だが」

「……尾行つて無難？ つていづか意味あるの？ どこまで？」

「家？」

ころりと首をかしげる不知火さん。思わず僕は頭を抱えた。

「絶対嫌なんだけど……それに峰木先輩の家知らないし、それなら他に方法とか考えてもいいと思うよ」

「おい水玖、それじゃ俺を連れてきた意味がねーだろ」

不知火さんは足を組み直して、遠い目になった。

「……たとえば峰木先輩の頭がおかしかつた場合、この話は単なる妄想からでつちあげられたもので、私は峰木先輩を病院に連れて行けばとりあえず解決だ。だがその場合数日間、少なくとも学校から帰宅するまでの間だけでも尾行して、本当に襲われる可能性があったのかを確かめなければならぬ。うん、頭がおかしかつた場合は何も起こらなかつたという裏付けの盗撮もしないといけなくなる場合もある」

「……は？」

僕は呆けた声を出した。

「たとえば。峰木先輩が本当に暴漢に襲われたのなら。言っているのか私から見ても先輩は美人で、夜道を歩いていたら突然襲われる可能性は無きにしも非ず。ストーカーの類が彼女についていて、先日はそいつに襲われてしまったとか、そういう可能性もあり得る」

「はあ？」

土屋が鬱陶しそうに口を開いた。

「たとえば。峰木先輩は何かの勘違いで、突然隠れて付き合っている彼氏か何かにサプライズで先制を取られてしまった場合。こうなると話はややこしい、先輩は彼氏の存在を公表したくないがためにこの話がうやむやになってしまう」

「その可能性はゼロだとして、別に尾行をする必要は」

「違う」

何が。

「この総てのパターンにスムーズに対応できるのは尾行しかない」  
ふふん、と微妙に格好付けて笑ったように見えたのは絶対に僕だけではない。

「それ以外の可能性があるとして、とても尾行が向きそうにない場合」

「特に思いつかないから、現状では尾行しかないと考えている」  
そこで土屋が無言で手を挙げた。

「どうしたつっちー」

「ナチュラルにあだ名で呼ぶな。だから、なんで俺を連れてきたんだよ」

「冷静に考えて毎日尾行するのは大変だし、大人数で動くとはばれるかもしれない。だから代わる代わるで尾行をしたいんだが、そうすると男出が原島君しかないではないか。さすがに毎日出勤というわけにもいかないだろう、第一先輩の家が何処かわからんからな。そのためお前が必要だ、夜道は怖いんだぞ」

冷静に考えて、毎日尾行するのがおかしいと思うんだけど。

「お前と空姫先輩なら並の男には負けねーだろ。それで原島と萌ちゃんをセットにすれば、お前の言い分的に問題なくねーか」

「それは駄目だ」

「なんでだよ」

「それだと面白くない」

ここでちょっと風間さんが不機嫌オーラを出した。このオーラの流出くらいなら最近なんとなく僕にもわかるようになってきた。その理由まではわからないけど。

「じゃあ不知火さんは尾行のことどうしようと思ってるの？」

案の定風間さんが口を挟んだ。

「私達を二つに分け、部活の終わりに毎日交互に追跡という当番制にする。ちなみに、私は暇、原島君は暇、空姫は暇、萌は部活、総助はバイト、という制約が日々の生活に存在するから、その点も考慮するつもりだ」

「わたしも入ってるのね……」

黙っていた先輩が呆れたような声を出した。

「あのさ。わたし達の家は駅周辺だけど、原島と萌ちゃんは電車にも乗るから大変じゃない？ っていうか、なんであの女のためにわたしが交通費出さないといけないわけ？ 言っとくけど嫌よ、尾行ならしてもいいけど」

普通は尾行もやりたくないだろう大丈夫か先輩。

「いや。峰木先輩は私達の隣の中学出身だから駅から歩いていける範囲に家があるはずだ。少し遠くかもしれないが、歩きで襲われたのだから言うほど遠くもないはず」

「そうなの？」

「ああ、この前のテニス部三年にちょっと聞いた」

「なら大丈夫ね、尾行しましょう」

「よし。では予定を立てなければ」

二人は力強く頷いた。

「……おい原島」

その二人を尻目に、土屋が僕のほうへ椅子を寄せる。

「なに？」

「お前毎日こんな調子で過ごしてんのか？」

「そうでもないかな。ねえ萌」

「そうでもあるよ、耕くんなんていつも通りじゃん」



「そうかな？」

風間さんは静かに頷いた。

「うわあ、心中お察し」

土屋が拝むように手を合わせる。

「いや、別に変に思ったことはないけど」

「……あー、やっぱり変わってるわ、お前」

これまた変わった冗談を。

というわけでこの日はバイトのある土屋がさっさと帰り、部活のある風間さんも途中から参加することになり、不知火さんと先輩が尾行について語り、僕は一人で座っていた。今日のところは不知火さんと先輩が峰木先輩を尾行するらしく、経過は明日報告になりそうだ。

次の放課後。

「つまらん鉄壁だった」

「あれは鉄壁っていうのかしら……」

「潔癖とか誰かが言っていましたよね」

「はあ。尾行してもウザい女なんて初めてよ、なんなのあの女」

「尾行の経験あるんですか……」

憤慨する海原先輩に、口を尖らせる不知火さん。

風間さんと土屋は峰木先輩が来る直前くらいに来るそうで、二人の話を聞くのは僕だけだ。

そこで「昨日さあ」と、先輩が口を開く。

「予定通りあの女を追ったわ。もちろんバスに乗る前からバツチりね。その時点では多分後輩かな？ 女の子たちに囲まれてクソみたいな会話してんのね、『きゃあ、先輩に褒められると困っちゃいます』『またまたそんなこと言ってるえ』とかそんな感じの、全日本猫かぶり選手権大会の本戦を見てる気分だった」

海原先輩のセンスは古い。さらに続ける。

「でさあ。そのやりとりしながら見るからに周りを警戒してるの、

いや違うのよ、ストーカーとか暴漢に警戒してるんじゃない、男の目線を警戒してるの。あの女もあの女なら後輩も後輩、すごい目配せ。男なら『あ、今俺の方見た』とか勝手に興奮して思いこむんだろうけど、女からすればあからさま過ぎてキモい。よくあんな恥ずかしいこと出来るわよ」

舌打ちが入った。

「それでバス乗るじゃない？ それでさ、部活の後って結構混むでしょ？ んなのにあの女ども、バスの真ん中付近で立ち止まってさ、『先に降りる人の邪魔だよ』とか周りに聞こえるように言う感じとか、てめえ気遣いの押し売りが混んでんだからさっさと詰める、って言いたくなかったわね。あまりにウザ過ぎて言わなかったけど」

何故か僕を睨んできた。

「はあ、男ってホントアホ」

「こつち見て言わないでください」

「それでもバスにはみんな乗るから、あの女どもはバスの真ん中で混雑状態に揉まれるわけ。それでさあ、なんていうのかなあ、とりあえず周りの男子に視線でアピールするんだよねあいつら。『あ、ごめんなさいぶつかっちゃいましたあふっふ』みたいな感じでくすって笑うのよ。ああウザい、それで男もでれでれして笑うのね、そのの繰り返しでもうあの周辺の雰囲気キモくてキモくて」

「すいません、本題の尾行には？」

先輩は座っている手前の長机にべったり伏せて、いかにもだるそうな格好になった。もう話す気をなくしてしまっただろうか。

「峰木先輩には頼りになるボディガードが居るようだな」

不知火さんが挟まってきた。

「へえ、タヨリニナルボディガードかあ。ベタだね」

「……」

「なに？ 不知火さん」

「……駅までついた峰木先輩達は、歩いて家路につくところだったようだ。懐いている後輩の話を盗み聞きしたところでは、一応家の

近所まで送るとかいう話もしていた。だが峰木先輩はあっさり断った

「タヨリニナルボディーガードのために？」

「何故か腹が立つからその抑揚のない言い方をやめる」

「すごい怖い顔をされた。」

「まあそうだな。後輩たちが若干食い下がったが結局すぐに帰宅し、峰木先輩は駅の周辺で携帯をいじっていた。それから十分ほどくらい経っただろうか、男が彼女のもとにやってきて一緒に歩き始めた」

「その人があぶない人の可能性もあるよね」

「そうも思っただけで尾行もした、だが、まあ遠距離から見ると隣りでは楽しげな会話もしていたようで、男もある程度の距離をとって先輩の隣を歩いていて。その様子から察するに事情も聞いているんだろう。そして駅からさらに十五分ほど歩き、先輩は帰宅した」

「やっぱり家までついてたんだ。」

「とは言っても家の直前までは嫌だったのか、先輩は大きな交差点の前でその男と別れてな。そのわりと近くのマンションまで近づいていったが、不審な男は居なかった」

「言葉が切れた。これで話は終わったようだ。」

「でも、そうなるか？」

「先輩の話は少なくともでっちあげの嘘ではない。しかし妄想である可能性は無きにも非ず」

「……妄想の可能性ってどのくらいのもり？」

「確率を知りたいならノーコメントだな。どうせ、事実の一つしかない」

「あらそう。」

「ながらら。」

「ただいま！」

「おかえり風間さん。今日会つのは初めてだったはずだけどね」

「うん、あたしが保険委員会だったなんて知らなかった」

「俺も数合わせだったみたいだ、これだから人気者は困るぜ」

「もっと積極的に会話らしい会話をしようよ二人とも」  
だいたい話が終わったところで風間さんと土屋がやってきた。僕は先輩と不知火さんの話をまとめて、二人にさっくり説明することにする。もうそろそろ峰木先輩も部室に来るし、尾行なんて単語は使わないように。

「どーもお」

峰木美弥琵琶先輩がやってきた。一昨日の姿と変わらない、やはり古風というか和風美人というイメージを喚起させるような長い黒髪とすらりとした容貌には、なにか完成されたものを感じざるを得ない。土屋もどうやら彼女に視線を釘付けにされてしまっているようで、海原先輩が溜め息をつくのが見ずともわかってしまった。

「どうもご無沙汰で、というのは誤用でしょうか。峰木先輩、昨日は平穩無事に過ごせましたか？ 私としても過去に似たような目に遭っていますので、不安はなかなか大きかったと思います」  
いけしゃあしゃあと。

不知火さんの様子があまりにも自然だったので、僕もさりげなくパイプ椅子を出した。

「はいどーも」

と、峰木先輩は僕から椅子を奪って部屋の中心あたりに座った。

「別に不安はなかった。弓道部の後輩の子たちに送ってもらったし、変な男が来ても撃退するつもりでいた。ってというか、様子見？」

「撃退？ どうするんですか？」

不知火さんが訊くと、峰木先輩は鞆の中から紐のついた丸いプラスチックの物体と、一本の缶を取り出した。

「催涙スプレーと防犯ブザー。無難なところでしょう？」

「ですね」

「ま、昨日出てこなかったからといって無差別犯と決まったわけじゃないわよねえ？ それでやっぱり考えてみたんだけど、私は犯人をぶっ殺す方向で進めていきたいわけ。でも私は出来る限りダメー

ジを受けたくない、だって怖いし、この顔に傷が付いたらそれこそ大問題。わかるかしらこの葛藤」

「お察しします」

「でしょ。だからさあ、不知火さんだっけ？ あんたに困になってもらえたらいいなあとか思ってるのよね。顔は私ほどじゃないけどまあまあだし、夜道ならどーせ問題なしで、背丈も近いよねえ。髪は多分、そのややこしくはねた髪を矯正したら私くらいの長さになるわよね」

「……はい？」

さすがの不知火さんも不審がるような声を出した。僕らもおそろく、似たような顔で先輩を見ていたに違いない。

「いや、だからあ。あんたが私の困になってえ、私に抱きついたフトドキモノを釣りあげるのよ？ えーっと？ この面子は今居る五人で全員なの？ まだ居るなら総動員してそいつを捕まえてリンチにでも遭わせてやりたいんだけど」

「はあ」

「オツケー？」

峰木先輩は片眉を上げて憎たらしい笑みを浮かべる。

「一応は」

「そお。じゃ、今日のところは私が持ってきたスプレーで髪固めて私の部活が終わったらさっそく作戦開始、駅のまわり適当にぶらついてればいいから。私の家その辺だし、捕まるまで毎日、いや、県大会が終わるまでかな？」

鞆の中から先程とは別のスプレー缶を取り出して長机に置くと、峰木先輩は立ち上がった。

「それと。この話無視したら、あんまりいいことにはならないかもねえ。ここって傍から見ればアヤしいところだから、男女がこっそり集まってナニしてるんだろっね、って話になるかもよあ？」

「がらがらばたと戸が閉まる。」

「……………」

最後のダメ押しはもう、脅しというか宣戦布告というか。

見れば不知火さんは不敵な笑みを浮かべ、風間さんは無関心そうに頬を引っ張って、海原さんは足を組んで携帯をいじり、土屋は僕に変な目配せをしている。

「なに土屋」

「なんだ今の」

「例の峰木美弥琵琶先輩だけど」

「原島ー、『性悪女の』が頭についてないわよー」

海原先輩が気の抜けた声で言う。

「違うよ空姫さん、『性悪陰湿勘違い女の』、だよー」

風間さんもいい加減なトーンで言う。

「いや、スマートに『加害者グループリーダーの』だな」

不知火さんは楽しげに。

「全然スマートじゃないし、まだ逮捕されても報道されてもないからね」

「地元新聞紙には載りそうなものだが。そういえば新聞社はどういった基準で事件をとりあげているんだ？ さすがに街の事件の総てが載っているわけでもないだろう」

そんな話を広げるつもりはないんだけど。

「で、水玖。どうすんだ？ まさか本気でリンチなんてしねーだろ」

僕の代わりに土屋が訊いた。不知火さんは頬杖をつく。

「確かにそんなことをするつもりはないが、犯人は特定したいな」

「これまたなんで？ 実際に困なんてやったら危ないと思うよ」

「犯人とコンタクトを取り、峰木先輩を襲わせるなんて面白いじゃないか」

……………。

「……………さっきの訂正、不知火さんにブーメランで返ってきそうだよ」

13・やまとなでしこ(後)

13 .

結局実際にそんなことをする気があるのかないのかわからないまま、不知火さんは髪をスプレーで固めた。

思ったより峰木先輩に似ていたのか、海原先輩と土屋が変な顔になった。風間さん曰く「思ってたのと違う」「らしいので、そういう視線だろうか。僕的には悪くないと思うんだけど。」

「さて、そういうわけになったので尾行は頼んだ」

「ええ……」

「萌ちゃん、そんな顔しないでくれると嬉しいんだけどな……」

だらしなく大口を開ける風間さんに、悲しそうな土屋。

今日の尾行の面子はこの二人だ。というか、事前に決めたプランでは月水金は僕ら、火木は風間さんと土屋ということになっていた。異論を挟んではいけないらしい。

「私達はふらふら歩きまわって犯人を特定できればする。まあ、萌達が空いてない日はやらずに、峰木先輩を尾行する、その程度だ。峰木先輩の件だけにかまけているわけにもいかないしな」

不知火さんはもそもぞとしきりに髪をいじって落ち着きがないが、はねてないと確かに視覚的に物足りないような気もする。

「不知火さん尾行したいだけなんじゃないの？」

僕が訊くと、不知火さんはかぶりを振った。

「尾行をしたいわけではない。私は無防備な相手を観察したいだけだ」

「いい趣味してるね」

「君ほどじゃない」

「そんな趣味ないよ」

「でも耕くん、前にさあ」

風間さんが何か都合の悪そうなことを言い始めたので、海原先輩あたりが食いつく前に僕はバス停前へ移動を促した。

「で、なに？ 萌ちゃん」

土屋がそこで絡んでくるか。いいよやめてよ。風間さんが微妙に得意げな顔をして一瞬こつちを見てきたような気がしたけど、知らないふりをしてもいいのかな。

「尾行中に話すね。つつちーと二人だと話すことないし」

「へえ、マジかい」

「マジだーい」

二人で僕を馬鹿にしたような顔で見してきた。バス停に着くまで出る限り無視した。

部活後の生徒の行列の最後尾について遠くから峰木先輩を眺めると、確かに周りの視線を気にしてそれなりの格好を取り繕っているようにも見えた。それでも、海原先輩が言うほど不快な印象は受けない。同性だからこそ目につく点もありそうなものだけど、僕らの部室で振る舞っていた傲慢な態度はかけらもなかった。

男って単純だなあ、とも思う。

「つつちーはともかく耕くんまで興味あるの？」

じつくり峰木先輩のほうを観察していた僕に風間さんが話しかけてきた。隣の土屋も確かに凝視しているが、これまたいろいろと考えていそうな顔をしている。

「割と興味あるよ。あの人、案外裏表ない人なんじゃないかな、とかね」

「あれで？」

「あれでかな？」

「あれでかあ……」

その呆れた視線の先には控え目な笑みを見せる峰木先輩。やがてバスがやってきて、駅につくまで風間さんと海原先輩はずっと、あからさまに眠たそうな表情を見せていた。



到着後は話の通り、駅の周りをぶらつくことに。

駅の立地は線路を挟んで住宅地側と繁華街側にはつきり分かれているため、風間さん達は先輩の尾行のため住宅地のほうへ、不知火さんは繁華街寄り歩いて、僕と海原先輩が念のため後ろをついていく。

こちらの方はわりと明るい道を歩くので、まだ七時を回ったところ、少なくとも不知火さんが襲われるような心配はない、と思う。だいたいこれから夏に向けて夜は長くなっていくうえに、外を歩く人間も同様に増えるわけで、期間が長引けば長引くほど変態が来る確率は減りそうなものだ。

「原島、目エ離しちゃだめよ」

適当に歩きまわっていると、先輩が唐突に言った。

「はい？」

「不知火から」

「いや離しませんけど」

「そ。じゃあ頑張つて」

と、先輩は交差点の横断歩道で、不知火さんの居ない方向向きを変えた。

「帰るんですか？」

「ちよつとお店寄るだけ。会えたら会いましょう。バイバイ」

そんなことを言いながら青信号の道路を渡る。僕の正面は赤のままで、先に居る不知火さんはふらふら行ってしまつた。

「あ。言つとくけどあの子、ほつといたらどこ行くかわかんないわよ」

「いやいやいや先輩ちよつと」

声の静止を易々と振りきつて、海原先輩まで。バイバイとか言っていたし合流する気なんて絶対ないのに。

「不知火さーん……」

信号も早くかわつてくれないものだろうか。不知火さんはちよつと、見える範囲にいないと心配な部分もある。ある意味子どもっぽ

いような、地に足のついていない感じの。

正面が青にかわった。僕は早足になり、変なタイミングで細い道を左に折れた不知火さんを追いかけた。

その先に、居た。飲食店が並ぶ狭めの路地をきよきよとしたながら歩いている。今は晩飯時で人の通りもちらほらあるので、なんだが危なっかしい。

「あ」

そう。危なっかしいなあ、と思っていたら。

そのまま路地の出口まで歩いていった不知火さんは、大柄な、おそらく男性にぶつかってしまった。不知火さんが右に曲がってすぐ怯んだような動きを見せたため、相手の顔までは判別できなかった。

「……………」

不知火さんは見上げたまま、何か真剣な顔で話している。僕も近付いてはいるけど、周りの飲食店の音であまり聞こえない。

「日本語で話せ」

ちよつと聞こえた。僕は多分顔を青くして足を速めた。

因縁でもつけられて喧嘩を買ってしまったのか。

「オーウ……………」

「日本語で話せばヒントをやる。ジャパニーズ、オーケー？」

「フウム……………ミチノ、エキ？」

「それでは目的地には辿りつけないな。道の駅はこのあたりには無い」

「……………何やってんの？ ねえ何やってんの不知火さん？」

僕が肩を叩くと、不知火さんはすぐに振り返った。

「ん？ 見てわからないのか？ こちらは外国人の方だ。どうやら駅への道がわからなくて困っているらしい」

先に居た不知火さんは、背の高いスーツ姿の白人男性と変な問答をしていた。相手もそれなりに困った様子で、僕を見ると何故か笑顔になった。

「見てわからない情報まで持つてるのになんで教えてあげないの」

「ちなみに駅で待ち合わせだそうだ」

そこで僕は彼の顔を見た。今の日本語が伝わったのか、苦笑いで腕時計を指差した。

「えーっと……ゴー、ストレイト？」

道順くらの英語なら、カタコトでも伝わってくれると思う。

僕は太い道路に沿うように、真っ直ぐ行つて信号左、という具合で彼に道を教えた。相手も一応理解してくれたようで、「アリガトウ」と硬い日本語で軽く頭を下げた。

「不知火さん、人で遊んじや駄目だよ」

彼が去つた後、僕らは適当に歩きだした。またこうなる心配もあったので、不知火さんと距離を取るのもやめた。本末転倒であることは気にしない。

「ここは日本だし、私が彼にわざわざあちらの言葉を遣う義理はない」

「でもぶつかつてつたの不知火さんだよ。それであの人も話しかけたんじゃないかな」

「話しかけたのは私だ。飲み屋の周りを歩く拳動不審な外国人なんて珍しいからな」

「ひどいね」

ん、と小さく返事をして、またきよるきよるとし始める不知火さん。

「そつといえは何か探してるの？」

「このあたりにおいしいラーメン屋があるとか。店の存在は山田が廊下で女子と話していたのを聞いたんだが、女性客が多かつたとかいうのを思い出してな」

ああ、意外と山田も抜け目ないところがあつたんだね。ていうか不知火さんも何気にけつこう聞き耳立ててるんだね。

「空姫は帰つたのか？」

「帰つたよ。不知火さんが心配じゃないんだよあの人」

「ん。なるほど原島君は私が心配だったと」

「……逆に訊くけど、そんなに薄情に見える？」

「さあな。自分で考える」

とりあえずで会話をしながら歩いているともういい時間になっていた。駅に戻るつかという頃に、ちょうど風間さんからメールが来て、特に問題なく峰木先輩は帰宅し、今からこっちも帰るといふ。

やはりというか、そんなにそんなに問題なんて発生するものじゃない。これが毎日続くともなると骨が折れそうだ。

翌日の朝、さっそく土屋が死にそんな顔をしていた。寝起きでそんな顔を見せられると放っておけない性分なので、僕は声をかけてしまった。

「美人とか可愛い子に変な彼氏がいるのを見るのはいい気分しないよな……」

「ああ、例の先輩？」

「おう。ついてくのは別に良かったんだけどよ、あの人駅に着くなりさっそく電話かけてさ」

自然と名前を伏せてしまうのはそれなりの気遣いなのだろうか。

「それもう聞いているよ」

土屋は顔の前で手を振った。

「いやいや、マジでそれがさあ、呼ばれて歩いてきた男が俺の知ってる奴で。人はみかけによらねーっつーか、そいつに絶対良いところないだろって感じだな。この年代の女の子はどうしてちょっと残念な奴に引っ張られるのかね？」

「気のせいだよな。ひがみだよな」

「ひがみじゃねーって。だってそいつこの前言った、俺んとこのコンビニで立ち読みしてる奴だぞ？ もちろん態度は悪い。コンビニ店員ごときに偉そうにしてる奴なんてろくなもんじゃない」

ということ。峰木先輩のタヨリニナルボディーガードはその人なんだ。どういう関係だろうか。

「その人いくつくらい？」

「三十手前くらい？ 見た目は若そうだから、老けた二十代と言ってもいい」

「うわー。女子高生は怖いね」

「手繋ぐのはどうなんだろうな。五年もすれば加齢臭移るわ」

そこで、黙って隣に座っていた不知火さんがぴくりと動いたような気がした。いつもの通り教室では話さないけど、たまに発作的に動くから気にはなる。

「そっぴいやそっぴいは大丈夫だったか？」

「大丈夫だよ。気まぐれな子がいるから危なっかしいけど」

「それはある、のかね？」

「あるよ」

ふうん、と土屋は低く唸った。

「でもお前、それを見てるのが好きなんじゃなかったっけ」

変な顔で何を言ってるのかと思えば、土屋は昨日風間さんと一緒だったんだった。おそらく変なことでも吹きこまれたか、そのままの事実を聞いたんだ。どっちにしる僕の失言からくるものだけだ。

「……まあ、行動的な人って面白いよね」

「なんだそれ……」

なんだそれなんて言われても。

「どうして頭の悪そうな奴と付き合うのかな」

その日の夜、駅の出入り口で張り込みながら海原先輩が言った。

「はい？」

「だってあの女の性格的に、もっといい男っていうの？ すごいアイドル高くしてそうだし」

まだ見たことない人のことをどうこう言ってもわからない。

「あれ？ 高校生ってやっぱりそんな感じなんですか？」

「は？ 何が？」

「頭がよくて顔がよくて性格もいい人がいいとか」

先輩は嘖き出した。

「そこまで求める人もそうはいないと思うけど、相手に要求する最低ラインってあるじゃない。あの女の場合、どの観点でもそのラインが普通より高いような印象。高慢だし」

「先輩もそんな感じじゃないんですか？」

僕は考えもせずと言ってみる。

「別に。馬鹿じゃなくて性格がおかしくなければ。話してて気が楽な相手が一番いい」

「なるほど。こうして先輩の本音を引き出せるような」

僕は得心して頷いた。

「わたしが本音を言う相手は、心底どうでもいいか本当に気を許してるかの二通りだけだ」

「つまりどっちにしろ、心底安心できる相手ですね」

「その解釈はキモい。心底キモい」

「ですよ」

さらにくだらな話を進めようとしたら、不知火さんが片手を僕らに向けた。

「来たぞ」

伝聞ではもう充分に聞いてきたけど、実際に峰木先輩の彼氏か何かを見るのは初めてになる。

駅舎の端近くに広がる信号交差点で待っていた峰木先輩に、上が七分丈の灰色のシャツ、下はスエット姿の男が歩いて向かっていく。髪は黒で、特にセットしているわけではなさそうだが、さっぱり揃えてある。

「来たね」

そこで僕は疑問を持った。どう見ても土屋の言っていたような二十代後半あたりには見えない。部屋着のようなラフな服装や背格好も大学生くらいの印象を受ける。夜で外が暗めだからといって、それほど老けて見えるものだろうか。

「ほら、頭悪そうじゃない？」

海原先輩は合流する二人の姿を視界の端に捉えて、声をひそめつ

つ言っ。

「別に普通じゃないですか。先輩のハードルが高いんですよ」

「違っつてば、なんかあの男動きがわざとらしくてキモいのよ。まあ、あの女にはびったりかもしれないけど」

不知火さんがこそこそ歩き始めたので、僕らもそこそこの距離をとって動き出した。

追いながら一応観察はしてみるが、特筆して峰木先輩の様子が変わっているということはない。相手の男性は聞いていた通りほどの距離を置いて、大きな身振り手振りで話題を盛り上げようとしているというところだろうか。

「んー……」

その様子を見つめながら不知火さんは顎に手をあてていた。

「どうしたの？」

「……いや、私は恋人が居たことがないんだ」

「あんたいきなり何言ってんの？」

海原先輩が即座に反応する。声が上がっていたので反射的なものなのだろう。不知火さんは言葉を返さずに、難しい顔で峰木先輩をこっそり追いかける。

やはり僕らも後についていく。

「それじゃ………ました」

やがて大きなスーパースタジアムの手前にある交差点で、峰木先輩が軽く頭を下げた。男性も「いやいや」といった具合に手を振って、何か言葉をかけている。

「聞こえませんか先輩」

「不知火は知らないけど、わたしは男女の会話まで聞く趣味はないわよ？」

尾行する気まんまんだったくせに。

二人はやがて身を翻し、それぞれの帰路につくところ。

「あ、男のほうこっち来るよ？」

「今の時間だぞ、全く不自然じゃない」

「そう?」

そのまますれ違った。ちらりとその男の表情を見たが、若干にやっついてるようだった。

「……うーわ、見た? 今のエロい顔。何考えてんのかしらね」

「なんでもかんでも文句つける先輩もどうかと思いますよ」

「空姫はものにけちをつけないと気が済まないんだ。ひねくれものだからな」

そんなことはない、と先輩が返す。

それから峰木先輩の帰宅を見送って、僕らも普通に歩いて帰るところになった。

それから一週間以上は経っただろうか。もう峰木先輩が最初に来た日がいっただったかなんて覚えていない。ただただ毎日の部活の帰りに尾行とおとり捜査をふらふらとして、結局成果は全くあがらず。プラスに働いたのは、不知火さんのおかげで駅周辺のマップはあと少しで暗記できそうなくらい。

海原先輩は途中で尾行に飽きてしまつて来なくなり、不知火さんは全然飽きないのか真剣に観察を続けて、手持無沙汰で歩くことが悲しいと知った。一方で風間さんは尾行期間中にそこそこ土屋と仲良くなつていて、微妙にジェラシーも感じておいた方がいいのかと思つた。

もつとも毎日の活動は何かしら行っているのです、そのうちの誰かと疎遠になることはない。

「というわけで」

「行つて来る?」

「ん」

不知火さんがおもむろに立ち上がり「というわけで」と言う時は、どこかに出掛ける合図のようなものだ。



「まだ吹奏楽部がアレらしいから、野球部のほうに挨拶に行つて来る。どう考えても私のおかげではないんだが今回の大会で一勝をもちとつたそうで、部員が感謝の引退記念ノックを頼みに来た。むろんピッチャーとキャッチャーの仲は解消されたらしい。まさに青春だな」

「不知火さんって野球もできたんだっけ」

「手に豆がぼっこぼこにできるくらいやったことはある。三百本ノックなら余裕でできるだろうな」

「それはすごいね。ちよつと引くよ」

「私だと子どもの時の話になるんだが、君の発言は少し問題がある」  
「がらがら。今日も不知火さんは出ていった。」

「……………もつとはつきり『君はスポーツに取り組む人間を馬鹿にしている』くらい言えばいいと思いませんか？」

海原先輩は勝手に自分のスペースを確保して、風間さんとこぞつて持ってきた古雑誌や少女漫画をどっかり部室に置いて、今もまさに読んでいる状況だ。

「知らない」

せめて一瞥くれてもいいんじゃないかな。

風間さんも土屋も今日は居ないため、先輩と二人になると会話が極端に減ってしまう。

僕ももつと、先輩なんかと無色透明な空気を作っていないで、不知火さんのように外側に向けて行動を起こし始めるのもいいかもしれない。

がらがら。誰かがやってきた。

「いらっしやませー」

「……………」

「……………いらっしや……………こんにちは」

「……………さあ気張ろうと思ったのが全ての間違いだつた。僕にはやはりそういうのは向いていない。外側になんだって？ 気でも触れたか原島耕。内側つまりこの部室にやってきた人間にすらうまく応

対できなかったじゃないか。

「不知火さんは不在ですけど……。何かありましたか、峰木先輩」  
「よりにもよってやってきたのが、今や習慣となった夜の散歩を指図してきた峰木美弥琵琶先輩その人だった。そういえば県大会はどうだったのだろう。今は少し機嫌が悪そうだから、そつとしておくとして。」

「犯人は見つかった？」

入り口に立ったまま峰木先輩は呟いた。

「いえ、毎日歩きまわっています。成果は無いですね。」

厳密には毎日ではないが、毎日であつても結果は変わらないだろう。

「ふうん……。」

軽そうに小さい頭を何度か頷かせた。

「心当たりでもあつたんですか？」

「ちよつとねえ……。あのさあ、悪いんだけどこれから三日間くらい、私が部活終わった帰り、後ろで尾けてくれないかなあ？ それが終われば県大会だから、どうせ負けるし、遅く帰ることもなくなるのよね。」

海原先輩が顔を上げた。僕はとりあえず訊く。

「もしかして知ってる人だったとか？」

「その人が前に抱きついてきたのかはわからないけど、なんだか別の理由で襲われそうなのよねえ……。」

彼氏がいるんだから問題ないでしょう、と言ったら峰木先輩はどういう表情をするのだろうか。「なんで知ってるの」で言い訳ができずに怒られるのが予想できるところだろうか。やっぱり黙っておこう。

いやまさか、外であの彼氏に襲われるのだとしたら。やっぱり放っておいたほうが面白いとか言いだしそうな人が二人くらいいる。ならばここは無難に安請け合いをしまえばいい。考えた時点で安請け合いと呼ぶのかは知らないが、適当に応じたところでも物事

はなるようになってくれるし、今の僕の行動を咎める人はいない。

「わかりました。いいですね、海原先輩」

「ええ、もちろん」

見ると、海原先輩は無駄に作りものじみた笑みを浮かべていた。

「じゃあ、そういうことでおねがい」

そのまま一步下がって峰木先輩はドアを閉めた。本当にこれだけの用事を済ませるためだけに来たのだ。見た目には気取らせないようにしていたようだけど、言葉に先日のような一言二言が足りていないところ、それなりに何かあるのだということは察しておこう。

「今の、先輩はどう思います？」

「さあ。襲われるところを途中まで眺める予定はできたんだけどね。あとはおまかせ、あんたがなんとかするんじゃないの？」

とんでもないことを言っているような。気のせいかな。僕は麻痺してしまっているのかな。

放っておいたら大変そうだし、実際に止められるならすぐに止めたいものだと思うのに。

「そうですね、なんとかできるならしますよ」

「原島は消極的ね」

「その程度ですから」

僕なんてその程度でしかありませんから。

そうして先輩と無意味な問答を繰り返した。やがて完全下校のチャイムが鳴る寸前くらいになって、不知火さんが頬を紅潮させて戻ってきた。話を聞くところ、ノックが楽しくて夕方まで野球部に付き合わせてしまったとか。

それから僕はそろそろ帰ろうと不知火さんに促し、峰木先輩が部屋にやってきていたことを歩きながら伝えた。

「なるほどなるほど、やはりそうか」

何がやはりなのか。

例によって峰木先輩の並ぶバス停の最後尾につき、駅に向かう。

峰木先輩は交差点で男を待ち、僕らはその様子を毎回違う場所で張り込んで観察するわけだけど、今日からは別に彼女から隠れる必要はない。そのため交差点から見える、土屋の働いているコンビニで観察することになった。ちなみに、提案したのは不知火さんだ。

「土屋ものすごいこっち見てるよね」

「私が見てるからな。仕方ない」

「普通に不審だからだと思っよ。土屋のあれは警戒してるポーズなんじゃないかな」

海原先輩はとにかく雑誌類が好きなのか、旅雑誌を手にとって真剣に眺めていて、一方の不知火さんは人間が大好きなのか、土屋や立ち読み客を舐めまわすように観察していた。

僕は週刊漫画誌を適当に手にとって土屋の言っていた態度の悪い客をこっさり見ようと思っただけど、今は帰宅前の学生と何か暇そうなスーツの男性がちらほらいるくらいだった。

「そろそろか」

と、コンビニの窓の向こうを見つめる不知火さん。突然首をぐりと回して動いたため、隣で立ち読みをしていたサラリーマン風の男性が怪訝な顔をした。

「じゃあ行くわよ」

ぱさりと雑誌を棚に戻して海原先輩がすぐに動いた。

「今日はやる気満々ですね」

「事が起こってからじゃ遅いのよ、早く」

どっという意味で言っているのだろう。先輩の事前の発言行動を見る限り、尊敬できる台詞ではないことは自明の理といって差し支えないかな。

軽く手招いた先輩の後をついて、僕と不知火さんは峰木先輩の待ち合わせ場所を遠巻きに眺める。間もなく例の男が手を挙げてやってきて、二人は歩きだした。

「心当たりってやっぱりそういうことなのかしら」

海原先輩が髪をいじりながら言う。

「あの人に、つてことですか？」

「うん。別の理由で襲われそうつてのは、要するに『ヤバい変な奴に惚れられちゃったなあ助ける愚民、原島この野郎』つてことですよ？ つくづく自意識過剰よね」

「そういう人間をたくさん相手にしてきた峰木先輩だからわかるんじゃないですか？ 危ない奴と危なくない奴の微妙な違いとか」

「そうなの？ 不知火」

海原先輩は振り返って、後ろで黙って歩いていた不知火さんを捉えた。

「私は峰木先輩のようにモテたことはない」

「あんたは、ね。でも似たようなもんでしょ？」

土屋の話の通りなら、それなりに、という感じではあるんじゃないのかな。

「ん……そうだな、無駄に自分に自信がある奴は少し危ないかもしれない」

「ふうん。あの男はどんな感じ？」

前方の二人に向かって指をさした。

「馴れ馴れしい仕草は見えるが相応の距離は取っているし、少なくともそういうものを前面に出すようなタイプではなさそうではある。どっちにしろ直接話さないとわからない。峰木先輩が危ないと思ったならそうだと思うっていいんじゃないか」

「女の勘つてやつ？」

「保守的ただけだと思っっている。自分が大事だから、自分の周辺に敏感なんだ」

「自分が大事だから、ああ。峰木先輩はそれっぽいね」

それは不知火さんにも当てはまりそうなものだけど、不知火さんは保守的ではないだろう。それでは自分が大事だという言葉には微妙に噛み合っていない。数学でやった必要条件と十分条件みたいなものだろうか。

「あ、ちよつと動きがあるわよ」

普段のルートだと、峰木先輩は駅から大きな通りを真っ直ぐ歩いてスーパ―の横の交差点で彼と別れるはずだが、今日は違うらしい。途中で急に狭い道に折れてしまった。

それを見た海原先輩は目を輝かせて、

「通報の準備しておいた方がいいかしら？」

と楽しい表情には似合わない至極まっとうなことを言い始める。

「せめて携帯片手に言ってくださいよ。笑いごとじゃありませんよ？」

二人は住宅地にどんどん踏み込んで行って、さすがに太陽の出ている間に限界もあり、辺りはしだいに暗くなってきた。

「どこまで行くんだ」

「人気のないところでしょうね。人気のない公園とか」

「今のセリフを活字にしたらややこしいですよね」

「どうでもいい」

先輩の言う通り、頃合いを見計らったのが男が公園の入り口を指した。

背伸びして傍から見た外観としては、それほど広くもないが遊具の種類もほどほどで、公衆トイレも設置されているしっかりした場所のようだった。

「あちゃー……」

「どうしたんですか先輩、この公園にトラウマでもあるんですか？」

「いや別に、本当に何かしら手出す気は満々なんだろうなあって。」

気の無い相手にあからさまにこんなのをされたらキツそう。さすがにあの女にも同情するかも」

「でもあの人って彼氏なんじゃ？」

「そうだったけ？ と海原先輩は首を捻る。」

「いや、あの男は違う。とりあえずしっかり見張るぞ」

「え？」

僕はそこから公園内には入らず、三人ばらけて外側からそれとなく歩きまわり、内部の様子をそれぞれで確認することになった。

僕はちょうど二人の座るベンチの裏側を見られる位置に立つて、すぐ電柱の陰に隠れられるように構えた。

見たところ、ベンチの上の二人の距離はほどほどだ。カップルらしくべったりついていなければ、赤の他人のように変に距離を置いているわけでもない。不知火さんはおそらく確信して彼氏ではないと言っていたのだけど、確かにその通りかもしれないなかった。

そもそも、僕は何故あの人を彼氏だと思ったのか。

夜の帰宅時に、家まで送ってくれる人間だから。後輩を帰して二人になってまでそうするのだから、そういうものではないかと思っただ。

それに。

それに、いや、僕がこの目で見たのはそれだけだったような気がする。それ以外で彼氏だと判断する要素となっただのは、土屋から聞いたことからだ。

「あ」

興味を持って考えてみればそうだ。峰木先輩の件は少し、自分に無関係だと思いつ過ぎた。

物事に関して無関心になると、どうしてもその事実を捉える事が出来なくなる。僕が風間さんを、小学校当時の「もえちゃん」と同一人物であるのだと気付けなかったことと同じように。

そもそも彼は峰木先輩と手を繋いで歩いていないし、峰木先輩は彼に一度も電話をかけていない。やはり年齢を三十手前と見積もるには、彼は若すぎる。

不知火さんが断定的な言葉を言えたのは、土屋の話を手勝手に聞いていたからか。

「……先輩、やめてください」

ふいに、静かな公園からくぐもったような声が聞こえた。

顔をあげてベンチのほうを見ると、二人の距離は先程より接近していた。何が行われているかはわからないが、峰木先輩が嫌がることなのは間違いない。

僕は公園に向かつて、早足で歩きだした。

「君、ちよつといいかな？」

「はい？」

突然声がかかった。

僕にはない、ベンチに座る二人へ向けて。

真っ直ぐ歩いてきたサラリーマン風の男性が、静かに二人を見下ろしていた。

僕は周りを見る。公園入り口のほうでは不知火さんが、車両進入防止の太い柱に座ってベンチを見ていた。海原先輩は僕の視界の右、トイレの脇で携帯片手に固まっている。

「その子とどう関係？」

スーツの男性が訊くと、スエットの男は不快そうに口を開けた。

「高校時代の先輩後輩ですけど。すいません、どちらさんですか？」

その瞬間、スーツの男性は男の胸倉を掴み、その目の前まで持ちあげた。僕の方から見ると持ち上げられた男の表情は見えないが、小さく悲鳴を上げた声は聞こえた。

「なら、そういうことをするには早い。その子も怖がってるじゃないか」

穏やかに言つて、至近距離で優しく睨むスーツの男。もしかしてこのまま殴り合いにでも発展しないか。海原先輩も察したようで、耳元に携帯を準備している。

「先生……」

すると峰木先輩が消え入るような声で口を挟んだ。

「ん？」

「先生、やめてください、警察沙汰はいけませんから……」  
「というか……先生？」

「もうそう呼ばれるような生活はしていないだろう。そろそろ先生と呼ぶのはやめにして欲しいね、美弥琵」

「先生って……まさかお前、ヨシムラか！」

掴まれていた男が上ずった声で叫んだ。次いで始まる知らない修



羅場に、僕は置いていかれた気分になってきた。

「そうだよ。『暴力強姦狂師』のヨシムラだったかな。君の顔は知らないんだけど、君は俺の顔を知っているのかな」

そう言つて、男を公園の出入り口に向けて突き飛ばした。男は何度もスーツの彼を見返して、おぼつかない早足で帰つていった。その出入口には既に不知火さんは居らず、僕は離れていた海原先輩に「離れましょう」と目で合図した。

翌日の放課後、五人揃つた僕らは部室で長机を囲む。

「ていうか不知火、なんであんな先に帰つたのよ」

「帰つてないぞ。いつの間にか二人が勝手に居なくなつてたんだ」

「ええ……」

あの後本当に不知火さんはどこにも居なくて、先輩と二人で歩いて帰ることになったのに。

「んで？ 俺が尾行から解放されるってニュースを聞いて来たんだけど、話は？」

僕も何か不知火さんに言おうとしたところ、土屋が急かした。

「ああ。昨日ようやく例の暴漢に出くわしたから、峰木先輩と吉村さんに手伝ってもらつた」

「マジかよ」

「ええっ！？ 大丈夫なの不知火さん！」

風間さんが目を見開いて不知火さんに詰め寄る。不知火さんはやんわりとその頭を押し返して、自分の腕を組んだ。

「真正面から掴まれ、腕の匂いを嗅がれたただけだな。どうやら例の男は強姦魔ではなく、フェチ寄りのド変態だったらしい。もちろん殴る蹴るの暴行をワンセット加えてやったが、そこまでしなくても良かったような気がする」

「うわあ、匂い嗅がれたんだ……変なところ触られなかった？ つばとかつけられなかった？ 体いたくない？」

なんとという質問攻めだろう。

「触られたら五セットで返す。唾も同様だ。体は痛くないが、何かあれば治療費を請求する」

「ならよかったあ、不知火さん敏感だもんね」

「ああ」

会話がおかしい。

「公園の近くに居た？ 一応先輩と周りをちょっと探したんだけど」

「いや。公園から変質者らしき男が見えたからついていったら、やはり変質者だったんだ。しかし原島君達が周りに居ないから、そのまま昏倒させて公園まで戻った。するとどうだ、峰木先輩が吉村さんと居るじゃないか。だから通報してもらって、という流れだな」

「そういえば携帯切ってたよね」

「違う、充電し忘れることが多いんだ」

駄目だよそれ。

「で、吉村さんって？」

「ようやく海原先輩が言った。僕としてはそれほど興味が湧かない。」

「そうだったな」

と、不知火さんは窓の方を見た。

「吉村さんは、二年前までこの部屋の主だった人間だ」

そして誰とも目を合わせず、口を開く。

四年前、吉村健さんはスクールカウンセラーとしてうちの学校に所属することになった。

話し方は穏やか、中年揃いの教師陣に比べれば随分と若く爽やかな風貌の彼は、着任してそれほど時間も経たないうちに、生徒の間特に女子の方でよく噂が立てられていた。

カウンセリング室の構造上、プライバシーの保護といえど完全に外からの視界を遮断することができるこの教室に、若い年上の男性と、これまた若いそういう存在に大して敏感な女性が二人きりになるといふことがどういふことなのか、といったような。

もちろん吉村さん自身は何をしたこともなかったが、女生徒が何かしらのカウンセリングを受けるたび、その人数が増えるたび、カウンセリング室から出た彼への視線は好奇心なものへと変わっていった。

けれど、所詮噂は噂でしかなく、吉村さんは真面目に仕事に取り組んでいたために問題となることは無かった。

しかしやはり生徒の目というものは確かに存在するものだ。仕事について一年もしないうちに、学校ではあらぬ噂ばかりが立っていた。吉村は女子を連れ込んで、吉村は学校施設を私物化して、なんでものが大半だった。

噂を流すのは主に男子生徒で、そのことを女子生徒が否定し、嫉妬のような念に駆られた男子生徒が、という具合で噂の拡大はなかなか収束せず、その噂が他の教師の耳に届くまでにそう時間は掛からなかった。

けれど、吉村さんはそんな噂が立っても真摯に仕事をし続け、着任二年目の半ば頃には生徒と教師の信用もそれなりのものに回復させることができていた。

問題が起きたのは二年前、着任三年目のこと。

峰木美弥琵琶先輩が入学した。

相談内容は友達ができないこと、部活動がうまくいかないこと、などといったものだった。当時から既に十分すぎるほど美しさを持つていた峰木先輩だったが、それによって溶け込めなかった環境から、救いを求めるように吉村さんに惹かれていった。

それからは、頻繁に出入りも増える。もちろん、それを見る者も増える、容姿に優れた峰木先輩がそこに入り浸ると、男子生徒の注視も増える、それが気に食わない、または面白がる人間が余計な噂を増やす。

噂がまた蔓延し、問題になるのはあつという間だったそうだ。以前にも噂が立っていたのだから、学校からすれば「次はない」という扱いだったのかもしれない。

そのうえ、そのすぐ後に問題になったのは紛れもない事実だった。実際に峰木先輩は、吉村さんを求めてしまった。校内では事を起こさなかったのだが、その光景は当時噂を気にかけていた野球部が目撃していた。

さらに数日もしないうちに、また事件が起こった。

噂が拡大し、事実が言葉となつて氾濫しても、峰木先輩は性懲りもなくカウンセリング室へとやってきて、吉村さんの目の前で泣き出した。吉村さんが慰めようと声をかけ続けていたが泣き止まず、なかなか部活に来ないと探しに来た弓道部の部員が、泣いていた峰木先輩を目撃した。

「……だいたいこれくらいだな。さらに詳しい話は訊かなかったが、吉村さんが今この場所に居ないことと、窓のすぐ下、それから、峰木先輩が学校を辞めておらず、変な噂も残っていないことを考えれば、だいたいの流れは想像がつく。先輩がこの部室を『最低なところ』と言っていたのも、要するにそういうことなのだろう」

と、不知火さんは言葉を切った。

昨日不知火さんは変質者を捕まえ、峰木先輩と吉村さんと共に警察署に行ったそうだ。その際峰木先輩と二人になった時に、「今回のお礼」だとかでこの話をしたらしい。もっとも、僕としてはそれは「お礼」ではないと思う。

先輩が首を捻った。

「そうなるにあの男は？ わたし達が尾行してた」

「ん？ 俺が尾行してた男とは別？」

土屋も首を捻った。

「あいつは弓道部、峰木先輩の二年上の先輩で、名前は多田だったか？ 峰木先輩の弁では大学デビューらしいが、このあたりのコンビニで働いていて、うっかり変質者に抱きつかれたことを漏らしてしまつたらしい。それでバイトの無い日はタヨリニナルボーディーガードとして働くだとか。峰木先輩はどうしようもない八方美人なた

め断れなかったそう。そして勘違いの兆しが目に見えてきたから、私達に尾行を頼んだ。多田も勘違いに気付く前に手を出してしまっただよつだな」

不知火さんが話している途中、土屋が驚いた顔になっていた。

「おいおいおい、多田って、うちのバイトの先輩じゃねえか……」  
そこですかさず僕は口を開く。

「ってことはやっぱり、土屋の接客が悪かったわけじゃないんじゃないかな？」

あそのコンビニで立ち読みをしていたのは、おそらく峰木先輩を心配していたとか、そういう理由だ。まあ、今の職業が何か知らないけど、吉村さんは色々大丈夫なのだろう。峰木先輩がわざわざ僕らに尾行を頼んだということは、おそらく吉村さんには多田のことを伝えていない。それでもあの場にやってきたのは、彼が自発的に追跡してきたためだろう。そのことにつすら寒さのようなものを感じるのは僕だけなのかな。

「フーことはそうか、あの態度悪い峰木先輩の彼氏が吉村なのか。あんな美人女子高生引っ掛けやがって、とんでもない奴だぜ……」  
眉間に皺を寄せていまにも恨み節を始めそう。

「ね、ね、耕くん耕くん」

そんな土屋にいつも通り構おうとしたら、風間さんが僕の腕を叩いてきた。代わりに海原先輩が土屋の恨み節に被せて、また峰木先輩の悪口を言っていた。あの時真っ先に通報の準備をしていたくせに、この辺はよくわからない。

「どうしたの？」

「なんかさ、あたしだけイメージしきれないっていうか、ちょっと情報足りなくない？」

「……………そう？」

風間さんは、言われてみればそうかもしれない。確かに今回の件で一番離れたところに居るよう。

「そうだよ、それに耕くんと一緒に歩いたりもしてないしさ」

「うーん。そうだったね」

「ふあっ！」

ふくれっ面でデコピンしてきた。

「痛いよいきなり……」

「後で聞かせてもらうからね、帰りとかがうちり聞くよ」

帰り。なら、せつかく問題も解決したのだし、晩御飯でも食べながら話すのもいいかもしれない。あの辺りの地理にはけっこう強くなったし、だいたい場所ならイメージ可能だ。

「いいよ。あとで晩ご飯食べながら説明しようか」

「ほんと？」

可愛くにごつとしてきたので、僕もそれなりに笑いかえした。

「もちろん」

多分この日、僕にとって初めて山田が役に立つ日が来たのだと思う。どうして利用したのかを訊かれたら、何か変なことを言い返されそうだけど。

ポケットから携帯を取り出す。

と、不知火さんが僕に指をさしてきた。

「じゃあラーメンを食べるぞ。例の店にまだ行ってないから山田に聞いてくれ」

「はいはい一応ね」

僕が適当に返事をしたところ、風間さんは長机に倒れる。

「ええ……耕くん、二人つきりじゃないの？」

「うん？ 真面目な話、ご飯は大勢で食べるのがおいしいよね。そうだ土屋と、せつかくなんで海原先輩もどうですか？」

何故か美人についての考察を海原先輩に聞かせていた土屋はすぐにこちらを向いて頷き、先輩も「いいんじゃない？」と首肯した。

その瞬間から完全下校時刻になるまで、僕らは晩ごはんを何にするか本気で討論をすることになった。ラーメンだとか、ポリウムたっぷりなものが食べたいだとか、変わったものに出したいだとか。

「総助の案は却下でいいだろう。さてどうする」

「さんせー。女の子の割合多いんだからちよつとは考えてよつちー。じゃあどうしようか」

「いや、俺、今日まで無理矢理付き合わされてただけど……つーかむしろ飯くらい奢ってくれよ……」

「土屋君知ってる？ 器の小さい男はモテないのよ？ あ、わたしはヘルシーなお店がいいかな」

「……あの、誰か聞いてよ、山田が駅前のいい中華料理店を薦めてくれてね……？」

春巻きにすればきつと丸く収まるのに、誰もわかってくれない。

夏は好きじゃない。

六月も下旬になると、気温のほうは滅茶苦茶な数値を叩き出してくる。

これは温暖化のせいなのかな、とも思うけれど、僕は未来の人類なんかよりも今まさに直面している熱気のことしか考えられず、部屋のエアコンを快適温度に設定し、好きなように過ごしてしまう。

地球温暖化問題なんて、騒いでるのは日本だけだとか、どうせ誰かが、とか、どうせ自分がやらなくても、とか、どうせ自分には関係無い、とか、結局誰かに責任を求めて、自分からは動かない。動こうとは思わない。

僕はそれでいいと思う。以前はそう思っていなかったかもしれない。

いつもと同じRPGをプレイしながら、涼しい部屋に僕は胡坐をかき。Tシャツに短パンという部屋着でテレビゲームのコントローラーを握り、目の前の液晶に映る世界の勇者として。

そう、世界を救う勇者だ。小さな町から志を持って飛び出して、色んな村、街、洞窟、迷宮をまたにかけ、剣を握って旅をする。

その勇者は万能だから、誰だって助けられる。力があるから、街の片隅にうずくまる家族だって、王宮に座した無能な支配者だって、人に忌み嫌われる醜い怪物だって、誰だって守って救うことができる。

子供心を刺激するその世界で唯一の存在に、プレイヤーは胸を躍らせる。

けれど本当の意味での子供は、そこで勘違いをしてしまう。

本来RPGは、ロールプレイでしかないのだ。作られた世界の中



で与えられた役割を全うするために、その通り忠実に動く。役割を果たすことのできる才能や能力を、無条件にただ与えられた状態で、そしてロールプレイをするゲームの世界は、努力や行動が常に実を結ぶようにできている。世界の全てが予定調和の上の過程と結果のために在り、それが現実にはあり得ないとわかっているからこそ、楽しみを見出すことができるものなのだ。

だけど幼くしてそれを知った子供は、そうは思わない。

こんな生き方があるんだ、こんなことができる人もいるんだ、と思ってしまう。

そんな人間が現実に居るわけがない。

どうしてそれほど簡単なことに気付くことができなかつたのか。それとも既に気付いていて、それでも勇者として生きていたかつたのか。

どんなに優れた能力を持っていても、社会に独りで立ち向かうことのできる個人なんて本当は居ないのに。単なる作りものでしかない、虚像でしかない、不可能だからこそ生まれた嘘でしかないのに。僕は電源を落とす。ゲーム機の電源も、テレビの電源も、エアコンの電源も、部屋にぶら下がる明かりも。

地球にはこれが優しいのだというけれど、これで人はとても寂しい気持ちになってしまう。

それらが全て一気に消えて、テレビに点いていたゲーム画面の残像が一瞬だけ見えた。

そこに見えた勇者の名前が「ゆうな」であることを確認して、僕は眠りについた。

夏服解禁。土屋や山田が少し前に、そんなことを言いながら楽しそうな表情をしていたっけ。夏服は男女を問わず半袖のワイシャツ姿になることを許され、女子の方は特にベスト等の着用を義務付けられない。男が嬉しいがるのはそういうわけだ。

意識してしまうと教室の内の空気も微妙に不穏になっているような気もする。ただ単に、僕の周りに不穏な人間が多いたためかな。

「暑い……」

白の光がリノリウムにぺかぺかと反射し、人口密度とあいまってサウナのような暑さになった廊下を歩きながら、誰かが言う。風間さんのお弁当がなかったたので、僕は普段の四人、土屋と山田、鈴木と一緒に学食へ向かっていた。

「ブレザー着てる奴はなんなんだよ……」

だから歩いて、土屋が学食の入り口前で言った。確かに今日の気温は二十度後半で、ブレザーどころか薄手のロンTですら着てられないのに、暑苦しい姿で席につく生徒は居る。男女を問わずちらほらと、グループによってはブレザーを着込んだ集団でテーブルを囲んでいた。

「ポリシーでもあるんじゃないかな。人の服装にあんまり口出すのはちょっと」

僕が応えると、

「他人に不快感を与えるようなのはポリシーっていうのかなー」

「別に与えてないよ。土屋のそれは理不尽な文句じゃないかな」

「おいおい一番恐ろしい顔で見てた奴が何言ってるんだよ」

「え？ いやいやそんな……」

なんと冷たい言葉だろうか。僕がそんな顔をするわけがないじゃないか。

「ああ、原島はな……」

「原島はねえ……」

ふらふら席を探していた山田と鈴木まで僕の方を見た。

「……なんなの？」

「気付いてないのかもしれないけどお前、思ってることめっちゃくちや顔に出るタイプだぜ」

「……」

言われると少し気になり、自分の顔を無秩序に揉んだ。別に顔は

疲れていない。なんとなく肩が凝っているような気がする。ストレスかな。

その場合は適当に濁して、井ものを四人で注文した。席は例によって座れないことはないけど、窓際の日差しが強いため、窓際以外の席が大体埋まっていた。なので少し遅れてきてしまった僕らはなし崩し的に直射日光の餌食になってしまう。

「暑い……」

「そればっか言ってもしょうがねえだろ」

鈴木と山田がだるそうに。土屋もやっぱりだるそうに。

「あ、逆にサウナとかに居ると思えば暑くなくなるんじゃないか？

まさに相対性理論だろこれ」

「相対性理論で扱う問題ではないよね」

「相対的に暑くない！ みたいなのって相対性理論とは違うのか？」

「さあ。とにかく今はどう頑張っても暑いよ」

相対的にどうかと言われるても、暑いものは暑い。というか、相対的に春に比べて暑くなるから夏が辛いんだ。敢えて言うなら、ずっとその辛さが続きさえすれば、そのうち慣れてしまえるのだけど。

「あ、暑いといえば山田」

そこで急に、チャールズを冷まそうとする山田を見て思い出した。

「ん？」

「なんか女の子をご飯に誘ってたらしいけど、その後の経過は？」

山田は僕の言葉を聞いて、まだ昼食に口をつけていないのに悪いものでも食べたような顔になった。その隣の鈴木は半目で、黙ったまま丼に箸をつけ始める。

「……何も、なかった……」

消え入るような声がちよっと聞こえた。

「あ……ごめ」

「いや、何もなかったんだ。だから謝ることはないだろ……？」

ああ、傷口に塩を塗ってしまったらしい。なんと申し訳ない。

「くくっ……」

土屋も知ってるなら言ってくればよかったのに。

放課後のカウンセリング室への来客は、峰木先輩の一件からまた若干増えた。最近では忙しいためか土日にも出勤を強いられることがあって、しかし大して変わったこともしていなかった。

もつとも、小さな変化はちらほらと。

「忙しい？」

僕は日光の当たらない部室の隅でパイプ椅子を広げて、文庫本サイズの英単語帳を開いたまま長机につく不知火さん達の背中を見た。「君がそう訊いてくるといことは、おそらく忙しくない」

振り返らずの言葉が返ってくる。まあ実際のところ、忙しそうには見えなかった。

「金銭的な問題もあるんじゃないかな……」

携帯を握った風間さんが言う。

「そうかしら。わたしは最初くらい頑張ってたほしいと思うけど……」  
雑誌を開いた海原先輩も言う。

「男の意見を言わせてもらうなら、むしろあんまり力の入らないところから……」

腕を組んだ土屋まで言う。

「でも耳は忙しいよね」

「それには同意しよう」

不知火さんが静かに長机を離れて、僕のほうに歩いてきた。パイプ椅子を渡すと、僕が肘かけにしていた机を挟んだ反対側に座って、ちよと僕の本横で鏡合わせのように三人を眺める体勢になる。

「他人のデートプランを構築するだけなのに、楽しそうだな」

そうして、僕の方を見ずに口を開いた。

「浮わついた話が好きな人は多いからね。土屋とか総助とか土屋総助とか。なんか普通に馴染んでるし」

どうして普通に馴染んでしまっているのかといえば、暇があればここに土屋が来るようになったからだろうか。峰木先輩の件の最中

も来ていたが、それは不知火さんに連れられてのこと。事が終われば来なくなるものだと思っていたのだけど、実際は違った。

とはいえ土屋から、行く、などと直接言葉にして聞いたことはない。この前のことがあってから土屋は不知火さんに対して丸くなったというか。もともと尖っていたわけではなかったけれど、今は教室内でも声をかけるくらいの変化はあって、土屋はごく自然にこの部室にやってくるのだ。

最近カウンセリング室に来客が増えたのは、そういう一面によるものもあるかもしれない。不知火さんもなんだか、にやりと笑うことが減ってにこりと笑うことが増えてきているような気もする。

「あいつは他人と馴れ合うのが得意だからしょうがない」

「確かにそれは言ってる」

僕らの目の前で問答を繰り返す三人は、現在吹奏楽部の問題について話しあっているところだ。男子が少なく女子の割合が圧倒的で、僕が中に飛び込めば肩身の狭い思いをしまいそう。ちなみに以前、微妙に関わりのあった部活だ。

つい先日まで、上階から流れてくる吹奏楽部の練習音に身が入っていないなあ、なんて思っていたら、本当に身が入っていないからしく。

「……そもそも、一対八ってどういうことだよ」

風間さんと海原先輩に押されていた土屋がついに呆れた声を出してしまった。確かに、土屋の気持ちは十二分に分かる。だから僕もこの議題にあんまり参加しようと思わなかったんだ。

壁際にあるストッパーの壊れたホワイトボードには、「吹奏楽部部長のオクトパスブッキングについて」と書かれている。この残念なネーミングは風間さんによって。

「なんか楽器ができるとモテるんだよ、すごいよね、あたしにはちよつとわかんない」

「何か特技があるといいんじゃない？ 吹奏楽部は毎日一緒に練習してるんだからギャップも何もなさそうだけど」

そして、風間さんと海原先輩はいつも通り思いついたことを適当に言う。それでは八人の女性に言い寄られ、まとめて一緒にデートをすることになった男の存在に対する土屋の不満を解消できないだろう。

「土屋、そういうのには天性つてもものがあるんだよ。諦めた方がいいっていつか、ものすごい修羅場になる可能性のほうはどう見ても高いから」

僕は僕なりの言葉を捧げてあげた。人生、諦めが肝心なのだ。

「原島」

「ん？」

「俺はな……」

すると土屋は振り返り、噛み締めるように僕を見る。

「……諦めることを、諦めたいんだぜ」

「あー、名言っぽいけど月並みな言葉だね」

「ひでえなおい」

ひどくないよ。

「諦めるなんてひどいじゃないか原島君」

「いやなんでここで不知火さんが？」

隣では真横の不知火さんが頬杖をついていた。

「人生諦めが肝心と言うが、私はそんな言葉は好かない。そんな月並みな言葉、挫折を助長でもしているのか、とな」

ああ、また長つたらしい一方的な講釈が始まりそうだ。

「そもそもだ。諦めるべき瞬間とはどこにある。目標に手が届かない時か？ 手を伸ばしても届かない時か？ 届かせようと必死に努力をして、どんな手段を使ってもと動き始めようとした時か？

できないことはできないだとか、駄目な物は駄目だとか、世間に指をさされた時か？ いいや、そんなものは関係がない。個人の諦めの尺度がどこの誰ともつかん人間に決められてたまるか。できない、無理だ、それが何だ。大きな壁にぶつかるより前に、以前の自分が何度小さな壁を乗り越えてきたかもわかっていないのか。文字を覚

えるのも、言葉を吐くのも、どれもが積み重ねの上で成り立った結果だろう」

「じゃあその大きな壁が、ねずみ返しみたいな構造だったら？」

僕は言った。

「ねずみ返しだろうがなんだろうが、力づくで這い上がる。形振り構わず不細工な形になっても、結果は結果としてついてくる」

……………。

「へえ。やっぱり変だね、不知火さんは」

「どこがだ？」

「絶対に無理だつてことは世の中に結構あるよ。テレビのニュースを漠然と眺めてるだけでも、仕方ないとかやるせないって思っちゃうような事件なんていくらでも見られるじゃないか」

「私は物事に対しての姿勢について話しているんだが」

「それでも、無理なものは無理だし駄目なものは駄目だよ。そういうものなんだから」

現実主義ともいわないけれど、僕はそう考えている。世の中には絶対に不可能なことがあるのだ、と。それは妥協ではない、客観的な自己評価をするべきとしてからの結果だ。おそらく間違っちゃいない。

「そうか。君はそう思っているんだな」

隣に居る不知火さんと僕は、一つの机を境にして対称的に頬杖をつき、土屋たちを眺めた。

「そうだね、ここは譲れないよ」

そんな僕らが今まで話していた途中でもう、長机の方ではデートプランの作成を再開していた。海原先輩が雑誌に何か書きこんだりして、話し合いの一連のメモをホワイトボードにまとめたいだとか。

「んじゃ、空姫さんのプランからまとめて」

とんとん。

と。風間さんが席を立ち、ホワイトボードに指をさした時、ちょ

うど声を遮るノックの音が。

「どうぞ」

不知火さんが大きめの声で言う。そしてすぐにがらがらと、カウ  
ンセリング室のドアが開いた。

現れたのは一人の小柄な男子生徒で、夏だっというのにブレザー  
を着込んでいる。彼にも服装に関して何かポリシーがあるのかな。

しかし服装のポリシーといえど、彼の第一印象を一言でいえば、  
地味だ。髪も土屋のように染めていないし、立っている姿勢は風間  
さんのようにハツラツとした印象を与えるものでもない。

「……………」

それに、黙ったままなか話したそうとしない。ちらちらと部  
室の中をうかがっているようではあるんだけど。風間さん達はドア  
が開いてからいそいそと雑誌類を片付けて席を立ち、座ったままの  
僕と同じく彼の様子を見た。

「ん？ 入っていいぞ？」

「あ、はい……………」

促されるがままに彼は部室内へ。不知火さんはその辺のパイプ椅  
子を指し、いつものように一人掛けのソファに座った。

「して、何の用かな？」

男子生徒が正面のパイプ椅子に座ったのを確認すると、不知火さ  
んは足を組んだ。

「……………」

……………。

「……………」

……………。

なぜだろう、誰も話をしようとしなない。風間さん達も見かねて離  
れた席についた。相談事が言いつらくて口ごもる人も居ないことは  
ないんだけど、ちよつと沈黙が長すぎる。

「……………」

ああ、今日も吹奏楽部の練習が聞こえる。まだ早い時間だから雑



音に近い。僕らがプラン立てに頭を悩ませている間に、普通に練習をしているだなんて。まあ、オクトパスブッキングを奨めたのが不知火さんだから仕方ないかな。

「……………」  
なんて考えている間も彼は口を開かない。土屋や海原先輩を見ると、それぞれ何か言いたそうな顔をしていた。

「……………何の用得」  
「あの……………」  
焦れた不知火さんが声を発した。

「……………」  
しかし彼の声がちょうど被ってしまつて、また沈黙が流れた。

「……………」  
「何の用得来たんだ？ 何か用事があるんだらう？」  
不知火さんは彼の次の言葉を待たずに。

「……………ああ、ええと……………」  
小柄な彼は応答にもなりきっていない声を出す。さすがにこれだけもつたいぶられると、いい加減じれつたい。

「なんだ」  
今にも詰め寄っていきそうな不知火さんもおそらく僕と同じ心境だろつ。

「……………あの、ですね……………」  
「だから何の用得」  
ついに苛立つた様子を見せてしまった不知火さん。土屋達は「やつちやつた」という感じの表情を見せて、おそらく僕も同じくハラハラしていたと思う。

「……………してください……………」  
小さい声で彼は言う。話し始めがうまく聞こえない。  
「何だと？」

彼の正面に居る不知火さんは聞こえたのだろうか。目を丸くしているような、じれつたさを抱えたままのような、あまり彼女の表情

に機微に敏感じゃない僕ではわからない。

「……僕を殺してください」

息を吸って言いなおした彼の言葉は、普通に僕が聞き違えたのか  
と思った。

けれど不知火さんのなんとも言い表せない表情を見る限りでは、  
それこそが違ったらしい。

「君は死にたいのか？」

不知火さんは無表情な顔で訊いた。足を組んで、頬杖をついて。  
「はい」

先程から曖昧な態度ばかりを見せていた彼だったけれど、この不  
知火さんの問いにだけはしっかりと頷いた。

だったら最初からそうやって、はっきりとした態度を見せてくれ  
ればいいのに。

一年一組、曾根命<sup>そねのみこと</sup>。先の発言を思うと、「命」と書くらしい名前  
はあまりにも似つかわしくない。

小柄で細く、見るからに暗そうな猫背な姿勢と伏せがちな視線。

声も小さく引っ込み思案そうで、物事に抵抗や反抗することはでき  
ないタイプに見える。ちなみに全部僕の主観だ。彼がそんなふうに  
自己紹介してきたわけではない。

「さて曾根君。君は殺されたいようだが」

不知火さんは僕らと曾根、双方の自己紹介を済ませ、ソファに座  
りなおす。

肩をまるめて床を見つめる曾根は、自己紹介の最中もこちらに目  
を合わせようとはせず、不知火さんに萎縮しているようだ。

「ええと………はい………」

頷いた不知火さんはソファを立った。

「殴殺でいいか？」

そして曾根の手前で腕を持ち上げ、

「え」

「ごきつ、と鈍い音。」

不知火さんは座ったままの曾根の頭に向けて構えた拳を、まるで野球のボールでも投げ飛ばすかのように振り下ろしたのだ。

なんてとんでもないことを。声をかけようとしていたらしい風間さんが完全に硬直してしまった。

「曾根君、悪いが人間というものは君が思っているよりも頑丈だ。私程度の力ではこの一発では済まない。三発でも十発でも、百発でも済まないかもしれない。だが、私はそこで手を止めることはないから安心してくれ」

振り下ろした拳を解き、軽く左右に振った。曾根は何が起こったかわからないような顔をして頭を押さえ、定まらない視線で部屋を見渡した。

「え、え……え？」

その反応は当然だ。何も間違っちゃいない。いきなり頭を殴られて驚かない人間はいない。

「さて」

だけど不知火さんはそれを気にも留めていない。すぐに拳を振りかぶろうと構える。

「水玖、やめろ」

もちろん、この部屋には曾根と不知火さんだけではない。僕も居るし、風間さんも居るし、海原先輩も居れば、不知火さんを止めようと席を立つ人間も居る。

「なんだ総助」

「お前がなんなんだよ、いきなり殴ってんじゃねーつつうの」

土屋は不知火さんの腕を掴んで怒ったともいえないような妙な表情をしていた。

「曾根君は殺されたいらしいが」

すぐに困ったような顔になって、不知火さんの手を離す。

「……………せめて。なんでそんな馬鹿な事を言ってるのか聞いてやれ」

「ん。そうか」

不知火さんはソファに戻り、土屋は疲れたような顔で長机についた。

「……さて、冗談はこれくらいにして。曾根君、大丈夫か？」

不知火さんがもう一度拳をあげてから、頭を抱えて小さくうずくまっている曾根。もちろん殴られた事實は冗談ではないし、そもそもあの行動が冗談だとは傍から見ても思えない。殴られた彼が動けなくなるのも仕方ないことだろう。

「え、あ、はい……あの……えっと」

おどおどとしてパイプ椅子に手を伸ばし、すがりつくように座る。それを確認した不知火さんは、改めて足を組んだ。

「まあ確かに、殺されたいと聞いたからといって、はいそうですかと殺してやるのも芸がないな。私もこの場で殺人を犯して捕まるのはどうかとは思っていたんだ。私は殺し屋じゃないし、人を痛めつけることに充足感を覚えるような人間ではないつもりで過ごしているからな。だが君は殺して欲しいと言っただろう？ 自分に殺されたいのではなく、他人に」

「……………」

曾根はシヨックだったのか固まったままだ。じれったい。

「だったら手加減する理由があるかと私は考える。私の答えはないと出る。君のそういう性癖なのかも知れんが、殺してくれと他人に頼み、公のものとするなど、所詮甘えから来るものだからだ」

公に晒すことは甘えだったのか。

曾根の反応を待たずに不知火さんは続ける。

「命は軽いものではない、と言いたいところだが、この話は今は別としよう。私達が生きているということは、すなわち自分の存在が周りの生と干渉し合うということ。君がそれを切り捨てる、切り捨てたいのだとわざわざ口に出すということは、切り捨てた後のことを既に自分で考えているからだろう？ 周囲や家族にろくな結果が及ばない、そのことが想像できている。だからこそ、自分はそれら

を断ち切りたいのだと知らしめることで、誰かが自分の行動に静止の声をかけてくれることを望んでいる。要するに自分を肯定してほしいのだ」

「違う……」

小さく呟く。対して不知火さんは悠々と、頬杖をつきなおした。

「違うない」

「ちがうよー！」

曾根が立ち上がった。まさか、今度は彼が殴りかかりやしないだろうか。さすがに收拾がつかなくなりそうだから、それだけは勘弁してほしいものなだけだ。

「……なら。何が違うか、言ってみる」

「……」

真っ直ぐな瞳で、切れ切れの言葉をはっきりと。曾根はぎゅっと両手を握り、しかし怯んだ様子は見せなかった。

「……このまま生きてたつて、なんにもならないんだ。不知火さんは知らないよね、隣のクラスで馬鹿だノロマだっていじめられてる奴のことなんて。毎日馬鹿にされて、日によってはさっきの不知火さんみたいに殴るんだよ。絶対にやり返せないことがわかってるから簡単に暴力を振るうんだ。そうでしょ？ 僕が弱いと思っただから不知火さんは女の子のくせして僕を殴ったんだ。僕が弱そうで見下してるから、劣って見えるから。確かにそうなんだよ。そんなふうにはわかつちゃうんだよ。今日初めて話した相手にも第一印象で見下される。間違つてない。でもそんな調子でいて、じゃあ僕ってなんのために生きてるの。だったら死んだ方がいいじゃん。一生このまま馬鹿にされて、誰かに殴られて馬鹿にされる人生なんだよ？ 最低だよそんなの。不公平だ」

「世の中が公平であるはずがない。何を言ってるんだ」  
すると、曾根の瞳が僅かに開く。

「そうだよ。不知火さんは良いよ。なんでもできるし見た目もいいし、会話もしない相手に話題にされるなんてどう考えてもおかし

いでしょ。確かにそういう人ってすごいと思うよ、天性の才能ってあるんだって。けどずるいよ、最初からすごい人間なんて僕みたいな劣等感がないんだから。僕はクズだから、自分が劣ってるってわかるもん。この世の中は僕みたいなクズじゃ、できないことだらけなんだって、何もしなくてもわかっちゃうんだ」

席を立った。

「原島君、急にどうしたんだ」

「な、なんだよ原島、お前も僕を殴るのか」

僕はそのまま曾根の目前に歩いていく。

「……何もしなくても？」

尋ねた。

「そうだよ。世の中全部、僕にとっては馬鹿みたいにハードルが高くてきてるんだ」

見上げてくるこいつは一体なんなんだろうか。簡単に自分を値踏みして、その時点で諦めているのか。

「原島だってそう思ってたくせに」

曾根は堰を切ったように続ける。

「見てたんだよ、四月の『おたけび事件』。あの時原島も言ったじゃないか。あんな無茶苦茶な行動力はあっても、結局はそうなんでしょ？ 僕みたいに、もうわかっちゃったんでしょ？」

あの時の言葉は、こいつのような思考の果てに行きついたものではない。

「僕も原島もその程度なんだよ。普通の人はそれくらいなんだよ。」

だから嫌なんだ。うんざりだ。だから殺してって言ったんだ。僕は本当は、他人に殺される価値もない。よくて通り魔に刺されるくらいだ。だったらもう手っ取り早く、なんでも手伝ってくれる不知火さんに」

「曾根」

「……なんだよ」

「はじめをつけたいなら、自分でつけるのが一番いいと思うよ。そ

れが正しいかは別として」

「……それができないから、ここに来たんじゃないか……」

曾根は俯いて、着込んだままのブレザーの袖、左手首を握っていた。

「へえ」

じゃあ彼の服装のポリシーは、長袖以外は着ない、ってところなのかな。

死にたいと思ってしまう理由は人それぞれだけど、曾根にも曾根自身がそう思うだけの理由はあつたらしい。

「……だから、無理なんだよ。生きてたつてしようがないつて言ってるんだよ」

言葉の暴力と、拳の暴力と、対等でないぞんざいな扱いを受けた。入学して、たつた三ヶ月でそんな位置に追いやられ、自分の人生の理不尽さを覚えてしまった。だからもう死んでしまいたい。とか、なんとか。

どこにでもありそうな話だ。

「生きてたつてしょうがないのか」

僕が席に戻ると、不知火さんが静かに言った。

「そつだよ」

「……まあいい。では、どうやって殺されたいんだ？」

「なんでもいいよ」

ああ、曾根、そんなことを言つたら。

「では殴殺で」

「だから待てつて水玖」

案の定土屋が強めの語調で止めに入った。不知火さんもふるふるとう首を横に振つて、あまりやる気が見えてこなかった。実際のところ、曾根の相手にうんざりしているのだと思う。

「いい加減にしる総助」

「そつちがいい加減にしろつーの」

「……………はあ……………」

不知火さんは心底不快そうに、ソファに深く座って足を組み直す。それにしても土屋の行動は、やはり曾根を止めたいということになるのか。五月の折、土屋が僕の自殺について話した時、死にたい奴は死なせておけばいい、というようなことを言っていたような気がしたのだけど。

そのうえ僕があの時話したことは、「不知火さんが僕を止めようとして悪かった」ということだったではないか。現状、曾根への対応を見る限りでは、明らかにその立ち位置は逆だ。さらに言うなら、今まで不知火さんと直接関わってきたことを顧みるなら、一般的におかしいところはあるが彼女の行動そのものは矛盾していない。

しかし土屋はどうなんだ。

「なあ曾根」

彼は口を開く。同時に立ち上がり、両手で曾根の胸倉を掴んだ。

「……………お前、簡単に死ぬとか言ってるじゃねえぞ」

一体、何を考えているんだ。



## 15・いままでのこと

15・

勝手に悲観して勝手に自己完結してる人間が正面きつての説教に応じるわけがない。土屋も彼の胸倉を掴んでからは何も言わずにただ睨みつけただけで、やがて「バイトだ」と言って鞆を掴んで帰ってしまった。

「曾根君、それで君はどうしたい？」

「僕は……」

土屋が去ると、曾根はまた曖昧な態度を見せ始める。

「……僕は簡単に死にたいって思ったわけじゃない」

「君がそう思ってるならそうなんだろう。総助の言うことは気にしなくていい。本題のほうは？」

「……僕は、死んじゃった方がいいんだ」

「……」

「……死んじゃえば今みたいに怒られなくていいし、胸倉だって掴まれないし、殴られないし」

ついに不知火さんも片手で頭を抱えてしまった。風間さんや海原先輩もなんともいえぬ顔でずっと黙ったままだ。

「そろそろ鬱陶しい。殴るぞ」

「いや不知火さん、それはちよつと……」

僕も声をかけてみたけど、不知火さんは口を尖らせた。

「結局何だ？ どうしたいんだ？ 言っておくが私は不幸自慢を聞く趣味はない。どうしても聞けというなら聞いてやるが、これから死のうと思う奴の話を経験的に聞こうという気にはならん」

「じゃあさつさと殺してよ……なんでもいいから……」

「……」

不知火さんは何故かちらりと僕の方を見た。

「……………今日は帰れ」

「え？」

「このまま話していても埒があかない。君が今日私達に話したことと、私達の反応を省みて、君がどうしたいのか考え直せ。私は別に君に死んでほしいわけでも生きてほしいわけでもないが、今の状態ではそもそも話になつていない」

「なんでそんなこと言つんだよ……………もしかして僕を馬鹿にしてるの？」

「してるに決まってるだろう。他人に殺せと抜かす阿呆に対して私が真面目に取り合うとでも思つてたのか」

ええ、そうだったの？ だからぶん殴つたの？

「それと……………曾根君、知ってるか？」

「何を……………」

「本気で死のうという人間はな、死ぬと決めたら迷わないんだ」

いや、そんなことはないと思うんだけど。

「何故かもわからないだろう。参考程度に覚えておくといい」

「……………」

曾根には何か堪えたものがあつたのか、床をみつめて黙りこくる。

「では、帰れ」

がらがら、とドアが開いた。見れば海原先輩がドアを開けていた。

曾根は無言で立ち上がり、丸まった背中そのまま部屋を出ていった。

「……………いやねー、ほんと」

小さな足音が遠ざかつていく中で、ドアを閉めた海原先輩が言う。

「さっきの話、まるつきり同じじゃない」

「え、いや、何の話ですかそれ」

「何の話って、今の話に決まってるでしょ」

当たり前のような顔をされてもわからないものはわからないに決まっている。不知火さんはその言葉にはつきりとした反応を見せず、ソファを立ちあがった。

「さて。デートプランの作成にでも戻るか」

「あんだ、大して何もやってなかったでしょうが……」

二人は何事もなかったかのような顔をして長机につき、また雑誌を開き始める。動揺しているのか風間さんは目を白黒させて僕や不知火さんを見回すが、僕も軽く首を捻るのみだ。

「えと、あたしは……？」

「萌ちゃん、とりあえずわたしのプランをまとめましょっか」

「あ、はい……」

となると、プラン作成を手伝う気にはなれない、また英単語の勉強でもしようかな。

それから数日が経っても、曽根は部室にやってこなかった。

隣のクラスのいじめの事実が存在していたのかも確認を取っていないため、曽根がどうなっているのかもわからない。未だに続いているかもしれないし、そうでないかもしれない。不知火さんはいじめ自体を止める気はないらしく、僕らも彼と直接の関わりがないため、徐々に彼の印象も薄くなっていった。

「というわけで、来たる日曜日に向けたデートプランが完成した」

珍しく黒板に大きな猫の絵を描いた不知火さんは、あんまり会議に参加していなかったのに偉そうに宣言した。

「あ、できたの？」

古文の単語帳から目を離す。と、風間さんと海原先輩が納得のいかなそうな顔をしている。

「不知火さんの案のせいで長引いたのに……なんかずるい……」

そのまま風間さんが言った。

「それはそれだ。むしろ私のおかげで萌たちの案を調整することができたと思いたい。いや、思ってくれ。なんか私が何の役にも立たなかったみたいだから悲しい」

「悲しいとか言われてもなあ。泊まりの旅行を本気で企画しようと言われても困るじゃん。月曜だよ次の日」

「個人的に無茶なスケジュールほど楽しい」

「それはわかるかも」

風間さんも一応同意しているようだけど、結局却下になってるんだから少なくともベストなものではないんだろう。正直男一人の集団で泊まり旅行なんて正気を疑わざるを得ない。部活動の集まり、という体ならまだマシだろうけど、今回は違うし。

「では、このデートプランをさっそく土曜日に決行してほしい」

「え？」

「は？」

「ん？」

一周回って不知火さんまで不思議そうな顔を。

「なんで？」

僕が訊いた。

「一度行っただろうが参考になるんじゃないか。どうせ暇だろう」

「ええ……あたし水族館とか行きたくないんだけど」

「萌が決めたんじゃないのか？」

「そこは違うよ。金銭的に無理がなくて大人数でも疲れなさそうなところだったからね」

海原先輩が急に口を押さえたのが見えた。なぜだろう、目が悲しそうだ。

「ちなみに私は行かないから、今居ない総助と四人で行くといい」

「え？ だったら五人で行こうよ」

これまた珍しい、とは思ったけど。

土曜に下調べに行つて、その日にプランを変えて、翌日出掛ける吹奏楽部に予定を伝える、なんてことにはおそろくならないだろう。単純に遊びに行けということなのかな。このあたりはやっぱり、不知火さんのことだからよく見えてこない。

「一応、私にも用事がある日はある」

「うーん、そっか……」

「ああ」

風間さんは微妙に納得していない顔だったけど、一応頷いた。

それはまあいいとして、土曜日に土屋を呼んでも来るのだろうか。もちろん僕は行くわけだけだ。

晴れの土曜日に駅前で風間さんと待ち合わせというと、まるで本当に付き合ってるみたいだと思う。

仮面カッブル確定後から一カ月半くらいが経過したけれど、休日に二人で出掛けたことはない。僕は誘うのが苦手だし、風間さんも無理に誘ってくるようなことが一度もなかったのだ。僕は誘われれば断らない性質ではあるんだけど、風間さんからしてみれば出不精でつまらないやつだと思われていそうなもの。まあ、その通りだ。

「あ、耕くん」

駅の椅子にもたれて携帯をいじっていると、のんびりとした声が聞こえた。風間さんだ。僕は声の方を向いた。

ヤシの木のようなごちゃごちゃしたデザインの黄色いTシャツに、青いショートデニムで露出が多い。というかシャツがぴったりしていて、細い体のラインが露わになっている。視線をどこにもってあげばわからなかったので足元を見ると、やたらカラフルなスニーカーを履いていた。

「なーに？ その品定めみたいな目」

「いやいや。こういうの初めてだなあ、って思ってさ」

ここで正直な言葉をこぼしてしまうと出会い頭なのにきつと嫌な顔をされてしまう。

だからその場はそれなりに濁して、僕は電車に乗ろうと勧める。それから風間さんが電車で揺られながらにこにこ話をしてくれたので、普段通り、特に気張らなくてもいいなと思わせてもらった。電車内ではすぐ隣に風間さんがいても暑くないけど、ここを出たらどうなるかな。

駅を三つ過ぎて、目的の街までやってくる。待ち合わせは現地で、という話だったので、風間さんが海原先輩に電話をかけようと携帯

を開いた。

「ヘーイ？」

あれ。

「ヘーイ！」

ああ。

「萌、電話かけなくていいみたいだよ」

「居た？」

「うん。萌のすぐ横だよ」

「え？」

駅を出ていく人の流れに身を任せていると、横から薄い茶色のフードを被った男が変な声を発しながら、僕らの歩調に合わせてきていた。

「うわっ！」

風間さんは軽く飛び退いて僕の背後に逃げる。

「土屋さあ、滑ってるよ」

「滑ってねえ」

僕が声をかけると、彼はフードを脱ぎ、中から茶髪が出てきた。

さらにその下からは土屋のしょぼくれた顔が露わになり、僕らに目を向けてくる。

「滑ってねー、けど、リアクションが悲しい……」

「そんなのどうでもいいけどっつちー。空姫さんは？」

口を尖らせた風間さんが言う。

「ああ、そんなのどうでもよくねーけど空姫先輩は売店で立ち読みしてる」

あの人は本当に雑誌類が好きなんだなあ。

「じゃあ合流してさっさと行っちゃおうよ」

「そうだね。先輩は気が長い方じゃないだろうし」

そうして僕らは駅の売店で先輩を拾って駅を出た。ちなみに先輩は薄手の白系のブラウスとキャミソールに七分丈のジーンズを履いて、シンプルなブレスレットや茶髪のパーマと相まって一瞬女子大

生と間違えた。

そのままさっそく水族館に歩いて行く流れになるわけだけど、会話は風間さんと海原先輩が主で、僕と土屋は暑さに辟易しながらその背中を追っただけだ。

「水族館なんて積極的に行くもんじゃねーな。この暑さならプールに行けばいいんだよ」

「それは敢えて言わなくてもいいよね」

水族館決めたの海原先輩みだし。

「ていうか、本当に不知火さんが何考えてるかわからないよ。なんでデートプランの決行なんて」

「まあ、あいつはな」

「ついでに土屋が何考えてるかもわからないよね」

「まあ、俺はな」

「……」

そうしてまた濁すのか。なんだか少し気にしてみると、不知火さんよりむしろ土屋の方が行動を読めないような。不知火さんは思いつきが大半だろうけど、土屋は基本的に意図があって動いているように見えるし。

「あんた達さあ、暑いんだからもうちょっと早く歩いてよ」

「いやいや遅いのは原島なんですよ、超怖いんで怒らないでください」

海原先輩が振り返っていた。

この人だつて入部届けを出したわけでもないし、暇だからつてどうしてここまで不知火さんと関わっているのか。まあ、先輩のほうはただ単に、不知火さんが親友だと言っていたし、風間さんとも大分仲が良くなっているから不自然ではないとも言えるんだけど。

もう少し言葉をしっかりと聞いていれば考えることもできたのに、あいにく僕は、興味が無かったことの記憶を引き出すことなんてできない。

「ええ？ 今日の空姫さんかわいいじゃん。つつちー目腐ってるの

？」

風間さんも振り返って、土屋にしかめた顔を見せた。

「なんで萌ちゃん俺にだけ辛辣なの？」

「自意識過剰だなあ。別につつちーだけじゃないから」

確かに、僕にもたまに落ち込みかねない台詞を言うよね。

風間さんの発言に同意して首を縦に振ると、何故かその本人から強く睨まれた。

水族館に到着すると、家族連れ中心の人の流れの中に若干の行列が飛び出していた。チケット売り場だ。僕らも並んで十数分、料金を支払ってチケットを受け取り、館の中に入る。

「小学生で通るとは思わなかったよ」

「あたしも」

チケット購入時、受付の女性に「学生三枚、こども一枚」と言ったのは海原先輩だ。あまりに突然の行動だったので僕と土屋は目を丸くしたが、風間さんはえらく堂々としていたためか滞りなく受け取れてしまった。罪だ。

「萌ちゃんならいけると確信したのよね。入場料割り勘でいい？」

「セコいつすね」

「何言ってるの土屋君。高校生なんだからこういう努力があつてこそでしょ？」

どうすかね、と土屋は呟いて、水族館ロビーの案内表の元に歩いていった。僕らもその後をのんびりと追う。幸い今は混んでいないので、変に離れない限り見失うことはないだろう。

「あ、十一時半からイルカのショーがあるってよ」

土屋が腕時計と時刻表を照らし合わせながら。

「あたしそういうの初めて！ 今何時？」

風間さんが嬉しそうな笑顔で僕の腕を引っ張ってきた。しかし残念ながら僕は腕時計をつけていない。空いた手で携帯を開く。

「今は十一時前だから、適当にゆっくり回りながらショーの場所に



行けばいいんじゃないかな」

「だな。シヨ一の場所はだいたい覚えたから、そんな感じで行くぞ」

歩きだした。水族館なんて小学生以来か。周りの客も家族連れが中心だし、たまに二人組がいるくらいだ。

全体的に青くて薄暗い館内は、ひどく効いた冷房と相まって海の洞窟のような印象を受ける。壁の中に入れられた水槽を片っ端から眺めて、説明文をあえて真面目に読んでいたりすると結構時間が潰せそうだ。海原先輩も僕と一緒に真剣に熱帯魚の説明文を読んだから、じっくりと魚群を見たり。

「つつちー、でっかいカメ！」

「萌ちゃん、こっちに変な頭の魚が！」

土屋と風間さんとはかく面白そうな形をした生き物に惹かれるように、その流れで僕らは二手に分かれた。お互いに見える範囲で、だけど。

「案外面白いでしょ？ 水族館」

「え？ ああ、そうですね」

最近ここに連れてこられたらしい擬態タコと一緒に眺めていると、先輩が唐突に言ってきた。

「なんで不評なのかしら。案出した時は萌ちゃんにも土屋君にもあんまりいい顔されなかったのよね」

「やっぱり見るだけってなると、イメージ的につまらないんじゃない？ 僕らは顔を合わせずに。」

「でも、見るだけなら映画だって同じだと思わない？ つまらない映画ならただの監禁じゃない。ここならほら、二人でタコ探したりできるし」

「映画館自体が嫌いじゃないんでなんととも言えません。ていうかタコ、右奥の隅っこに居るじゃないですか。探すまでもありませんよ」

「……………」  
無言になった。先輩を見ると、水槽に片手をつけて目を凝らして

いた。

水槽の中はかなり広々としていて、多段にでこぼこしたコケのついた岩山がどっしりと構えている。岩には灰色っぽい草があちらこちらに点在して深海っぽく、その中でタコは僕の言った通り、右の奥で草と一緒に揺れている。説明文に「探してみよう！」と書いているけど、割とすぐにわかる。

「居ないじゃない」

「え？」

もう一度見てみる。いや、僕の指摘した場所はもこもこと動いているように見えるんだけど。

「ここですよ、よく見てください」

水槽に指をさしたまま手をこまねいて、僕と立ち位置を交換して先輩に見せてみる。

「は？ だからそこって普通に岩でしょ？」

「でもちよつと動いてませんか？」

「草でしょ」

勘違いかな、と思って改めて水槽全体を見渡す、と。

水槽の真ん中で構える岩の、丁度真ん中あたりの山肌が一気にべろりと剥がれた。

「きゃっ」

先輩が短い悲鳴をあげた。僕も正直、突然のことに驚いた。

「うわ、けっこう大きいんですねこれ」

丸くて真っ黒なタコがふわんと舞って、僕らの目の前、水槽越しのすぐそこで着地をする。何かじっくり見るとスミでも噴き出してきたそうなくらい目つきが悪い。

「やだキモいキモいキモい、写真より全然キモい」

鳥肌でも立ったのか腕をさするようにしてタコを眺める先輩。タコは生きるための手段を人間にわざわざ披露させられているのに、ひどい言い草だ。

「ていうかやつぱ場所違ったでしょ。原島は視野が狭いわねー」

「わあ。きゃっ、とか言っておいて偉そうですね。あんな声出して  
おいて、普段の先輩は一体に何に擬態してるんですか？ 何かしら  
皮を被った羊か何かですか？」

「ノーコメントよぶん殴るわよあんだ」

ノーコメントなんて。タコの擬態すら見極められないんだから、  
人間に擬態されたらもう絶対わからないから大変だと思ったのに。

「あ、そろそろ時間ですね。萌達を捕まえに行きましょう」

「うわ切り替え早っ……、なんていうか、あんだってたまにやりづ  
らいわよね……」

「そうですか？」

もつとも天敵が少ない分、人間のほうが擬態は下手なのかもしれ  
ないけど。

「すごいね！」

「すごいね」

イルカショーってすごい。確かイルカの知性はヒトと大差がある  
わけではないとかいう話を聞いたんだけど。周囲を人垣で囲まれた  
水槽の中で調教師の指示に従って、大きく水面上でジャンプしたり、  
ボールをトスしたり、頭だけを出して並んで泳いだり。

たまに来る着水の衝撃で、横に並んで席に座っている僕らにも水  
しぶきがかかる。前もって借りたビニールはびしゃびしゃで、余剰  
分で体も濡れる。周りの客席では家族連れがわあわあきゃあきゃあ  
言って、僕らもその例に違えず、特に風間さんがわあわあ言ってる。  
小学生料金でもあながち間違いいではないのかもしれない。

「すげーな」

「すごいわね」

土屋と先輩もすごいすごいと口を開けて、調教師がメガホン片手  
にイルカに乗っているのを眺めていた。

「狭くないのかな」

「あれだけ動けるんだから、海に比べりゃ死ぬほど狭いだろっな」

たまたま呟いた言葉に、土屋が反応した。

「イルカって頭良いらしいけど、何考えてんだろうね。こんな見世物にされて」

「まあ、テレビ番組に出てくるびっくり人間みたいなもんじゃねーの？ 『金になるからやってやるよ』的な」

「でもこっちは生活まで拘束されてるよ、個人的には嫌だね、そういうの」

「生活が保障されてるとも言えるだろ？ 価値観はイルカそれぞれだよ。お前のそれは空気読めてない発言だわあ」

「まあね」

確かにこうしてイルカの踊りを見て楽しんでる部分もあるし、ケチをつけるのも無粋だ。

それでも少し、思うところはある。

「もし人間がああイルカの立ち場になったら、自殺を選ぶかもしれない」

野生でも集団自殺をする動物はいるというし、どこかの事例として、捕まえたイルカが長時間水槽から上がらなかつたとかいう命に関わるような不穏な動きを見せた、なんて話もあったような。

「そういう奴が少数派だから成り立ってんだろ」

まあ、そういう考えが少数派だから、社会は成り立っているのかな。

「そうかもしれない」

ふいに、わあっ、また歓声が聞こえた。

大きな水槽に意識を戻すと、イルカ達が次から次へと大きく飛び上がって空中の輪へと突入していた。機械的ともいえるその統一された動きは、意思なんて介在していないに違いない。彼らは生きるために仕事をしているのだ、きつと惰性と義務感に無理矢理引っ張られているだけで。

「耕くん、すごいよ!」

「うん、すごいね」

僕のポロシャツを引っ張ってきた。風間さんはこれだけ楽しんでるんだから、彼らのこの仕事には精一杯の感謝しなくてはならない。調教師が頭を下げて、イルカもそれに倣う。観客席からの拍手が波のように広がって、僕らもその中で一緒に、水に濡れた手を叩いた。

ショーを終えて、僕らはまだ見ていない水族館のスペースを回った。先程と同じように、基本的には僕と先輩がじっくりと、風間さんと土屋が慌ただしく。

ようやく全部を眺め終えて水族館を出ようという話になったのは、一時を少し過ぎてから。さすがに全員お腹が空いていたのだ。

「プラン的に次はー」

風間さんが海原先輩を見る。

「近場のデパートの上で昼食ね」

「だったっけ」

すると、土屋が不満げな顔になる。

「洒落っ気ねーな、それなら山田の方がセンスあるんじゃないか？」

「つつちーはわかってないなあ」

風間さんが嫌味つたらしく笑った。

「デパートのケーキバイキングが第一目標なんだよ？ それにあんまり気取っても、あたし達どうせ高校生だし」

高校生の限界なんてたかが知れてる、と言いたいのかな。それには僕も頷きたい。

「じゃあ行こう。先輩、どっちですか？」

「ここからバス乗るわね、暑いし」

水族館前のバス停で太陽を手でさえぎったりしながら待つことになった。話すことはつい先ほどの水族館の話が中心で、昼に海鮮ものは食べづらいだとか、それくらいの話だ。

バスに乗り込んで、目的のデパート付近まで来ると降車。そこから歩いてデパートへ行くとなると少し遅い昼食になるけど、蒸し風

呂のようなこの暑さで人混みに揉まれるよりはいくらかマシなのかもしれない。

「涼しいー」

さつきから暑いと涼しいしか言っていない。デパートに到着するなり、風間さんはエレベータを探しに先行してしまった。

「萌、迷子にならないでね」

「だいじょぶー」

本当に大丈夫かな。

「お前彼氏っつーか兄貴とか親父みたいだな」

つけてけと離れていく風間さんの背中を追いかけて始めると、土屋が言った。

「そうかな。できたら親父は勘弁してほしいんだけど」

「原島つてちよつとね……なんていうか、落ち着きすぎ？」

先輩まで乗ってきた。

「いや、実は全然落ち着いてないんですよ。常に何かに追われているような気分で日々びくついてるんですよ」

「嘘つくくなっつーの。お前結構顔に出るって前に言っただろ」

「だったら先輩の言葉と噛み合っていない気がするんだけど。」

「ほら不満たつぷりの顔になったじゃねーか」

なんと。

「え？ 土屋君、こいつの表情読めるの？ 常に一定のテンションじゃん」

「そんなに微妙な変化でもないっすよ。俺じゃなくても周りの奴はわりと気付いてます。落ち着いてるのは事実だと思いますけどね」

「へえ、そうなんだ」

うーん。

「……表情とか隠してるつもりはないんだけどなあ」

「実際隠れてねえよ。空姫先輩はお前なんか見てないってことだから安心しろ」

「嬉しいような悲しいような」

土屋と話す間に先輩の様子をうかがってみると、確かにもう僕の方は見ておらず、陳列される化粧品を見たり風間さんを探しているようで、しきりに首をくるくるさせていた。

「おそいよ」

「そっちが無駄に速いだけだよ？」

風間さんが既にエレベータを発見して待っていた。揃ったところで乗りこんで、十階のボタンを押した。

甘いものを食べ過ぎると胸焼けを起こしてしまいそうになる。といつか起こした。無理して食べなくていいのに、食べ放題となると無理をしても元を取ろうとしてしまうのは人間の性に違いないのだ。

「で……次は……？」

青い顔の土屋が先輩に言った。先輩は携帯を開く。

「ええと、自由ね」

「なんだよそれ……」

「なんだよそれって土屋君、ここからの選択肢としては色々あるでしょ？ これからお腹を落ち着かせるためにウインドウショッピングでもしようかなあとか、腹ごなしにスポーツでもしに行こうとか」  
その場合僕らはどうするべきなんだろう。

「九人も居たら絶対グダる」

「ぐだつたらどうせ近場のカラオケで落ち着くわ。そしたら九人もいるからいい時間まで潰せる。そのあとは帰ろうってことになるでしょ」

「じゃあ俺らがしてきたあの壮絶な議論がほぼ無意味に……」

胃がそんなに苦しいのかいつの間にかタメ口になっている土屋だけど、先輩は気にしていないようだ。

「変にガチガチにするよりはいいと思うけど？ わたしはそれくらいゆとりを持った人のほうがいいな」

「そういうことじゃなくて……」

あてもなく歩きだした二人に、僕と風間さんは勢いだけでついていく。

「やっぱり二人って仲良いよね」

すると、脈絡なく風間さんが言った。

「そうだね。もともと同じ中学だったみたいだし」

「この前空姫さんから聞いたんだけど、小学校から同じだったみたいだよ。家も近かったんだって」

「へえ、幼馴染だ」

そうになると、不知火さんもそうなるのか。

「あたし達と一緒に！」

「そうだね。萌は途中で引っ越しちゃったけど」

「……………」

風間さんは少し暗い顔になった。また僕は言葉を間違えてしまったらしい。

「……………だよね。やっぱり期間が空いちやうと、どんな風に相手が過ごしてきたかわからないよね」

「それは違うと思うよ。どれだけ一緒に居てもわからないこともあるし、短い期間でも色々わかったりすることもあるんじゃないかな」「わからないよ」

二時をまわった街の路上でこぼした言葉は、異様に冷たいものだ。「あたしは、まだ耕くんがわからない、わかりたいけど、やっぱり難しいよ」

「でも確か。時間をかければ、って不知火さんも言ってたじゃないか。別に今すぐ無理してわかるうとしなくても」

「ねえ」

「なに？」

「せっかくだから、お互いに話し合わない？ 今日はまだいっぱい時間があるし、初めて耕くんと出掛けたんだから、一緒にゆっくりしたい」

「……………いいけど、なにを話すの？」



風間さんは僕の目をじっと見つめて、無表情に口を開く。

「いままでのこと」

今までの、どこまでを話すのかな。

それを訊いたらきくと風間さんは「全部」と言っと思ったから、わざと訊かなかったけれど。

## 16・だめなんだよ

16・

先を歩く土屋と先輩に声をかけて、落ち着いて座れる場所を探することに。静かに話ができそれなりに人の少ないところはどこになるだろう。

「萌ちゃん、話したいことって?」

適当に街を歩いていると、先輩が振り向かずと言った。

「これからじっくり話すよ。今、不知火さんも居ないし」

不知火さんが居ると何か不都合でもあるのかな。今までのことを話す際に、彼女が居ると困るようなことが。

「水玖がいるとまずいの?」

土屋が訊くと、風間さんは苦い顔になる。

「不知火さん、不幸自慢嫌いって言ってたし。あたしも自分語りみたいなのは好きじゃないんだけど、耕くんには話さないと、多分ずつとわかってもらえないから」

「……そっか」

土屋はそれから僕を見た。僕の気持ちが顔に出るというけど、彼が今見る僕の表情はどうなっているのだろう。

誰かが誰かに言っていたけど、他人が他人を理解することは絶対に不可能だとか。僕もその意見は間違っていないと思うし、事実僕が風間さんを理解することはできないと思う。風間さんが僕に対して何かを解ってほしいらしいのに、僕は風間さんの何を理解すればいいのかすらわからない。

「だってよ原島。お前愛されてるな」

「うん」

「うんってお前……少しは……」

うん、僕は何を考えてるんだろう。わかりにくい。

先輩が道の先で僕らに声をかけてきたので、体に絡みつく異物を振り切るように足を進めた。ついさつきまでケーキを食べていたのに、またレストランに入るのもどうかとは思ったけど、この際。

入り口の広告からとりあえずコーヒーがおかわり自由だということとは伝わった。「いらっしやいませ」と女性店員が寄ってきて人数を確認する。店内は空いていて、風間さんは禁煙席の一番奥を要求した。

僕らは席につき、揃ってコーヒーを頼む。お腹の方は十分に膨らんでいるのだ。

「それで？」

僕は風間さんの正面に座って、言った。隣が土屋、風間さんの隣が海原先輩だ。

「……………」

じつくりと見つめると風間さんの丸い瞳がくるくると泳いでいるのがわかる。言いづらいのなら無理しなくたっていいんだけど、大丈夫かな。

それでも僕の口は開くのだけど。

「萌？」

風間さんは小さく頷いてテーブルに手をべったりと置くと、すうっと息を吸った。

「……………よし、言うね」

「うん」

「耕くんはあたしが転校した理由、覚えてる？」

全く覚えていない。そもそも、理由なんて聞いていなかった気がする。その時の風間さんは、もえちゃん最後まで笑っていたので普通に引越したからではないのかな。

首を横に振った。

「だよ。もし知られてたら緊張が無駄になっちゃう」

「知られてたらって」

「あたしが転校したのってね、お母さんの実家についていったから

なんだよ」

風間さんが？

「……………」

「びつくりした？ 改まって人に言うの初めてだから、どんな風に言えばいいのかよくわかんないかも」

「恥ずかしいな笑顔になつて、両手を顔の前で振った。顔が赤いのが見えた、けれど、それはそんな単純な理由で赤くなっているわけじゃないだろう。」

「ちよつ、つと、待って萌。その話は簡単に話していいことじゃないよ」

「それでね」

風間さんは続けようとする。

「萌」

「なんでそうなったのかだよね」

「萌、いいから少し待って」

「僕の言葉を聞いてくれない。そんなこと言わなくていいのに。」

「あたしのお父さん、あの時はお母さんに乱暴してたから」

「……………萌、無理しなくていいから」

「風間さんは深呼吸をする。その目が潤んでいるのは、絶対に僕の勘違いなどではない。」

「無理じゃないの、聞いて、耕くんには聞いてほしいから」

「それでも僕を見返してくる。このまま、彼女にこの話をさせてしまつていいのか。僕だって他人の不幸自慢は聞きたくない、というよりも、風間さんのこの話を僕なんか聞いていいのか。」

「……………」

「考えても、頷いてしまふ。僕の本心では何を思っているのだ。好奇心なのか。」

「お父さんその頃、仕事でちよつとゴタゴタしてたんだ。だから家に帰ってもずつとピリピリしてて、お酒飲んだ日は特にひどかったの。そのせいで、身辺が落ち着くまで別居って話になってただけ」

ど、お母さんの親のほうに怪我したお母さんを見て離婚の話を進めちゃって、お父さんもそのまま承諾しちゃったんだ」

風間さんは続ける。

「それであたしは転校。でね、その頃まだ小さかったから家の状況よくわかんなくてさ。とにかくおばあちゃんがお父さんに怒ってたから、お父さんが悪いことしたんだ、やっぱりお父さんが悪いんだって思ってたね」

目線を下に落とした。

「それからなんか、急に男の人、っていうか、知らない人が怖くなっちゃって」

え？

「でも、萌は結構友達いるでしょ？ それに」

「今はね。でも、中学の途中くらいまでずっと人見知り。中学校にあがっても小学校からの友達とか一人も居なかったから浮いちゃって、誰も寄りつかなくてさ」

「……」

何故か、風間さんが言葉を切ることに胃の痛みのようなものを感じる。

ちょうどその時、ウエイトレスがコーヒを四つ運んできて、ぐゅゅくりどうぞと言葉を残していった。

「……あ、ごめん。それに、何？」

「いや、なんでもないよ」

「言つて。今だけだよ？」

今だけなんて、そういう問題なのか。

「……その、萌のお父さんが大変だったのって、いつからだったのかな、って思ったんだ。もちろん答えたくないなら答えなくていいよ、何も言わなくても怒らないから」

客観的に見て、一回や二回の問題でそこまでのものに発展はしないだろうし、離れることになった理由は短期間のものではなかったと考えるのが自然だ。そう逆算的に考えると、『もえちゃん』は。

「二年生くらいだよ、小学校の」

それを聞くと、僕は溜め息をついた。

「やっぱり、それくらいなんだ」

「……怒ってる？ ちよつと顔怖いよ？」

「怒ってるよ、自分に」

あの時の僕は、正面からもえちゃんの姿を捉えていなかったじゃないか。もえちゃんが家でどんなことになっていたのか察することもできずに、向けられる笑顔からしきりに目を逸らしていたのだ。恥ずかしいから、なんて幼稚な理由で。

「やっぱりやさしいね」

風間さんはにこりと笑いかけてきた。僕はその泣きだしそうでもある震えた顔を、まっすぐに見返した。

「ごめん、鈍かったみたいで」

「いいんだよ。耕くんとかみんなが居たから、学校は好きだった。支えなんて言ったら大げさだけど、一日中ずっと学校に居たかったくらい好きだったもん。とか言っつて、学校には耕くんが居たから好きだったのかもね」

また笑った。

「うん。耕くんが好きだったから。色々あつても、他の学校に行っても、忘れないで覚えてた友達とのことは耕くんが中心になってたことばかりで」

そこで一旦言葉を切った。

「……それからここからが、あたしが本当に話したいこと。空姫さんも土屋君も、話長くてごめんね」

一度に聞くには十分すぎる話を聞いてしまったのに、まだ風間さんは何かを抱えているらしい。僕らは頷いて、風間さんに視線を合わせる。

「耕くん、なんで自殺なんてしようとしたの？」

「……」

それは間違いなく僕に向けた言葉だった。つい今までの笑顔は消

えて、潤んだ瞳は乾かすまっすぐと。

「……あれはおふざけだ、って話になつてなかったけ？」

例の建前の話をするが、おそらく意味はない。風間さんはかぶりを振った。

「耕くんはふざけてそんなことをする人じゃなかった。強いて言うなら、無理にでもそういう人を止める側にいるはずでしょ？ だからあたしは、不知火さんの活動に耕くんが入ったんだと思ってたんだよ。昔の耕くん、不知火さんに似てたから」

不知火さんに似ていたのは、僕じゃない。

「自殺者なんて止められるわけがないじゃないか。死ぬ人間は勝手に死ぬ。今回はたまたま不知火さんを見つけただけなんだから」

「変だよ、耕くんの言ってること」

どこもおかしくないつもりだったのに。

風間さんはコーヒーを一口すすって、息をついた。

「自殺なんて、絶対だめなの」

「それは自殺する人が決めることじゃないかな」

「だめなんだよ」

頭から否定されては何も言い返せない。

「……あたしのお父さんね、お母さんの親戚に散々なこと言われてたんだよ。お金はちゃんと入れてたんだけど、それ以外は全部通行止めだったの」

「？」

「それでね。身边が落ち着いてから、お父さん色々と考えたんだよ。離婚したことか、お母さんのことか、あたしのことか。でも、せっかく周りが静かになってきたのに、お父さんのところには何も残ってなかったって」

そこでまた風間さんは泣きそうな顔になった。

「萌、わかったから、もう」

そこからは話の流れで理解できた。それに、もう風間さんには言わせたくない。

「でも……お父さん、一度間違っただけど考え直したんだよ。おばあちゃんに門前払いされても、何回も連絡して、お母さんと直接話もして、あたしにもいっぱい謝ってきたの。あたしがこっちに帰ってきたのだから、お父さんの家が近くになるからで……」

「……」  
「いまの耕くんは変だよ……飛び降りのときだって、今までの活動のときだって何か中途半端だったし、曾根君のときだって、変だった。さっきのイルカショーのときだって……土屋君と自殺のこと、話してたでしょ？」

「あ……」  
風間さんの瞳から涙が零れ落ちた。僕のせいで落とさせてしまったんだ。

「それは……」  
「耕くん、いままで何があったの？ おかしいよ、変なんだよ。死んじゃったらそれで終わりなんだよ？ 取り戻せなくなっちゃうんだよ？ そんなの、誰も許す訳ないでしょ？ あたしのおばあちゃんたちも、お父さんのことはもう悪いように言わなくなっただよ。でも、一人で考え込んで、諦めて自殺を選んじゃったら、本当の意味で居なくなっちゃったら、もう……」

風間さんが声をあげそうになった時に、海原先輩が彼女を抱き寄せた。耳を真つ赤にしてそのまま風間さんは先輩に身を委ね、喉を絞るように泣いた。

「……」  
その原因をつくってしまったのは、僕だ。

「俺からも訊いていいか」  
先輩が風間さんをトイレに連れていった後、土屋がぬるくなったコーヒーを眺めながら言った。

「……なんだよ」  
あまり会話をしたい気分じゃない。今は風間さんのことが心配で、



一緒に居たほうがいいのか、それともそっとしておいたほうがいいのか、胸に引っ掛かってしょうがない。

「『この世の中は出来ないことが多すぎる』、まだそう思ってるよな？」

「その言葉って……」

「お前が例の飛び降りりで主張してたことだ。俺も確かにその通りだと思っぜ。よくよく考えてみれば、自殺する理由に成り得る言葉かもな」

「そんなの受け売りだから。個人的な主張じゃない」

「誰の受け売りだ」

土屋は冷たい声で詰め寄ってきた。睨むような視線だけど、僕は正面から対応しようとはまともに思わなかった。

「土屋には関係無い」

「ある。俺はその言葉を知ってる。ついでに言うなら、水玖も、空姫先輩も知ってる。それで萌ちゃんがさっき言ってたけど、昔の前と今の水玖が似てるってのが引っ掛かったんだよ」

知ってるって、それは僕が言ったからじゃないのか。

「絶対に関係無いって、本当に」

「いいから言え」

なんでそこまで。

「……」

「なら、俺から言った方がいいのか？」

何故か肌がぴりぴりと痛い。刺さるような声と土屋の視線が、再開した学校生活初日のあの視線のどれよりも。今の相手はたった一人なのに、どうして。

「言わなくていい。ろくなことじゃないのはもう、目に見えてる」

仮にその言葉を言った人間が別人だろうが同一人物だろうが、その人の結論は同じなのだと思うた。

「不知火だよ。空姫先輩が呼んでる方の」

「……は？」

わざとややこしい言い方をしていないか。

「土屋君」

僕が返す言葉を考えようとした時に、先輩が戻ってきた。風間さんが一緒じゃないところ、まだ落ち着いていないのかもしれない。

「空姫先輩……」

「あなた、まだそんなこと言ってるの？」

先輩が席に座って、真剣な顔で土屋を睨みつけた。

「俺は間違ってるんでしょ。空姫先輩があいつを不知火って呼ぶのもそういうわけだってことはわかってる。今までは名前で呼んでたくせに」

「全然違うわ」

土屋も眉間に皺を寄せた。

「違う。だったらあいつをなんで認めてやらないんだ。今のあいつの活動に付き合ってるのはどういう理由なんだ。先輩の今の行動は中学から何も変わってない、一方的な俯瞰だろ。何がしたいんだよ」

「それを言ったらあなたも同じ。あなたこそ何がしたいの？」

ファミリーストランで話すには少し大きい声で、二人が口を閉ざすと同時に、沈黙が降りた。

「……他人行儀な話し方はやめようぜ、めんどくせえ」

「いいわよ。そうなるかと冷静じゃなくなるかもしれないけど」

二人は自嘲するように笑った。

「改めて言うけどな、俺はお前が嫌いだ」

「あら。わたしもそんな調子のあんたは大っ嫌いよ」

「いちいち押し付けがましいんだよ。たった一カ月早く生まれたくらいでめえの価値観押しつけてくんじゃねえつつの。水玖は水玖だ、お前がいつまでもあいつを名前で呼んでやらねえのは、中学からずっと恨んでるからなんだろ」

「恨んでるなんてよくその口で言えるわね。一番怒ってたのはあんたでしょう？ 今更まともなふりしたって全部わかってるんだから」

あんた、高校でわたしと会った時に『なんで』って言ったわよね。そんなこともわからない時点でたかが知れてる。わかったつもりになって全然わかってない。今あの子にわたしが付き合ってるのは、あの子に頼まれたからだし、わたしもほっとけないからよ」

「それが押し付けがましいつつつてんだろ。ほっとけないとか、お前はあいつを何だと思ってるんだ」

「不知火水玖」

土屋は面喰らったような顔を見せる。

「だからお前は水玖を……」

「あの子は弱いから、誰かが一緒じゃないと駄目なのよ。総助が最近あの部室に来るのも、本来的にはわたしと違う理由であるはずがないわ」

「……………」

「それでもあの子を頭の中で認めようとしてないのは、総助なんじゃないの？」

「……………」

「あんたは、明確な区別をつけようとしてるんじゃないの？」

「……………」

「似てるから、似せてるから、違うところを見つけようとしてるんじゃないの？」

「……………」

「本当は全然違うのに、あんたが似てると思い込んでるから余計にくちやくちやになってるんでしょ？」

「……………」

先輩は僕を見た。

「原島」

「はい」

「萌ちゃんはおんたが連れて帰りなさい。ここの代金はわたしが払っておくから」

そのまま伝票をひつつかみ、早足でレジのカウンターに向かった。

残された僕らに言葉はなかった。

土屋はテーブルに両肘をついて、顔を隠すように頭を抱えていた。僕は黙ったまま、視線をコーヒーに注いだ。

二人の会話を聞いているうちに、彼らの中で何があつたのか大体想像がついてしまったから、僕は上手い言葉を紡ぐことができなかつた。

「……ここまで聞いたなら、言った方がいいよな？」

土屋は姿勢を変えないまま、こもった声で言った。

「いいって、言わなくて」

「じゃあ、俺のために聞いてくれ」

「……………」

それから長い長い沈黙の後、ようやく店内に僅かな話し声が戻ってくる。

土屋はそれを見計らつたように、小さく。

「……俺には好きな女が居た。保育園からの付き合いで、多分物心がついた時からずっと好きだつた奴だ」

どうしてみんな、一方的に話を始めてしまうのだろう。もちろんそれは、誰かに聞いて欲しいからなのだろうけど、僕なんかに聞かせてもどうにもならないじゃないか。

「そいつはなんでもできた。勉強はもちろん運動も、色んな知識も持つてて、話も遊びの発想も面白くて、そいつの周りにはいつも大勢の人間が居た。俺だつてそこに居た。俺はそいつとずっと一緒に居たかつたから、元が不相応でも釣り合いが取れるように頑張つた」

顔を隠したまま、語り続ける。

「そいつは多分、天才の類だつたんだろうな。何をしたつて誰にも届かないような結果を叩きつけて、それが当然であるような顔をする。でも、全然嫌味つたらしくない。相手に与える印象は嫉妬より

も羨望が強い。俺が好きになったのも、そういう部分があるんじゃないかと思う」

息を深く吐いた。

「それで中学の頃遠いところに行くとかいう話にもなったんだけど、あいつはそうしなかった。俺はその時、俺のためにそいつがこつちに残ったんだと思った。まあ、実際は全然違ったんだけどな。どう勘違いしたのか、俺はあいつと両想いだと思っていたし、あいつも否定をしなかった。色んな活動をし始めたのも、そのあたりだ」

「不知火さんと、だね」

敢えて僕はそこで確認をした。土屋は多分、僕の質問の意味もわかってるだろう。

土屋は笑う。

「……さすが、鋭いな原島。そうだ、俺は中学の時、不知火と一緒に色んなことをしてきた。俺の名前をもじったように、狂ってんのかってくらい」

「……」

「でも現実はそのような簡単なもんじゃない。「総てを助ける」ことなんて、実際には無理な話だ」

「……うん」

「そいつは、自分以外の総てを助けようとして、自分の意思を置き去りにした」

「……」

「中学二年の時、不知火氷実しほめいは不知火水玖みなぐを救った。出来の悪い双子の妹を、暗い部屋から助けて出してやったんだ」

土屋はテーブルに手を置いた。彼のその表情には、まるで生気がない。

「それから三日経って、氷実ひみは首を吊った」

僕は土屋を見ると、土屋は僕に一瞥をくれた。

「できないことがあったって、その時気付いちゃったから」

「……耳が痛い。」

「……………大丈夫？」

「頭を整理するには、これくらいが丁度いいんだよ……………」

土屋は赤い目を擦って、控え目な笑みを見せる。

「じゃあ、そろそろこっちも話そうか」

「……………は？ いきなりどうしたんだよお前」

「『この世の中は出来ないことが多すぎる』って、誰の言葉か知りたいたいんだよね？」

土屋は無表情になる。

「八つ上の姉さんだよ。海外ボランティアとかにも行っていたし、とにかく人助けが好きだった」

「……………」

「でもね。ちよつとした事故に遭って体を悪くしたんだ」

海外に行ったから事故に遭ってしまったとか、そういうものではなかった。単純に運が悪かったただけだ。日本でトラックとの交通事故に遭って、姉さんは下半身の機能をほとんど失くしてしまった。

「何度もリハビリしてたし、いつも頑張ってた。誰かの為に生きてたような人だから、再起したかったんだと思う。また誰かの為に、また自分の為に動きたいって言っていたし」

僕の表情はどうなっているのかな。土屋とかは確か、僕の気持ちを表情から読めるんだっけ。

「でも、結局無理だった。姉さんはそれから一年も経たないうちに諦めた。退院してから、本当にあつという間だったよ」

どうして姉さんが諦めてしまったのかは、未だにはっきりとわかっていない。誰かに迷惑を絶対かけたくないだか思っていたのかもしれない。本当はプライドの高い人間だったのかもしれないし、本当は周りを見下していたからこそその自己満足だったのかもしれない。事故を起こした時点で、もう投げやりになっていたのかもしれない。八つも離れていた僕とはあまり話していなかったから、本当の部分は見えてこない。

どうせもう答えはもう聞けない。僕もその時は、考えるのが嫌になっっていた。

「憧れが消えてなくなるのは、結構辛い。そうだよ、土屋」

それが今年の三月。

原島はらしま勇奈ゆうなの卒業した、第一志望の難関校に落ちたことが、決定した日だったかな。

## 17・手、出さないでね

風間さんにメールを送った。「土屋と先輩はもう帰ったから、二人で帰ろう」と。トイレから戻ってきた風間さんは未だに顔と目を赤くしていても、僕と目が合うといつもものような笑顔を見せてくれた。

それからウエイトレスを呼んで、あまりにも失礼なことに手をつけていないコーヒーカップを温かいものに交換してもらい、改めて僕らは正面から向き直った。風間さんは帰った二人のことを訊いてこなかったので、特にそこに触れようとは思わなかった。

僕は、姉さんのことやいままでの僕のことを風間さんに話すことにした。泣かせてしまったお詫び、とは少し違うと思いたい。僕が彼女には話すべきだと思ったから、そうすることにしたのだ。

なんでもできた姉さんに憧れていた僕は、小さな頃からその背中を追い続けていた。何かをすればどうにか真似て、両親にもよく褒められていた姉さんのようになりたかった。幼稚園の頃から、中学一年くらいまで。中学になってやっとわかったのだ、僕は姉さんのように万能ではない、どこにでもいる凡人の一人でしかないということが。

気付くのが遅すぎたのかもしれない。その辺りから徐々に、姉さんへの憧れは嫉妬のような感情に変わっていたような気がする。せめて特別な何かの一つでもできたら、とも思っただけけれど、中学生時点ではもう、どれから手をつけていいのかなんてわからなかった。

中途半端な意識のまま勉強をしていたって身になるはずがなかった。とはいえ、年齢差のせいか両親は姉さんと僕を比べたことがなかったから、表面的な負担はなかったと言っている。当時から姉さんは常に忙しそうで関わりは薄かったけれど、僕をかわいがってくれることも少なくなかった。

だからこそ、このあたりから本当に嫌になったのかもしれない。



姉さんの存在は憧れであつたし、目標でもあつたし、好きでもあつたのに、過保護というか、あくまで対等でない扱いが気に入らないと当時は思っていた。曾根の言っていたような劣等感に、背中を何度も突かれていたのだ。

それでも。姉さんより劣っているんだとわかつてても、簡単には諦めたくなかつた。姉さんは諦めなんて知らない人間だつたのだから、僕だつてそう在りたかつた。

今にして思えば、それは板挟みのような状態だつたのかな。

そんな想いが炸裂しそうになつた寸前、すなわち中学二年の夏に、姉さんが事故に遭つた。

事故の直後の姉さんを見舞いに行った時、まだ頑張れるだとか、頑張りたいたとか言っていて。親からはリハビリに励んでいる姉さんの話を聞いたりして、たまに姉さんの友達とも顔を合わせて、その人達からはどれだけ姉さんが凄い人だつたのかを客観的に聞いた。それは辛くもあつたけど、誇らしい気分でもあつた。姉さんはその話を聞いているときには笑顔でいて、彼らが帰つた後は、真っ白な顔になつていた。

僕は落ち込んだり強がつたりする姉さんを見て、がむしゃらに頑張つてみようと思つた。そこから自分の努力で得られた結果は、常に上の下といえるくらいのものであつた。求められる百パーセントには応えられないけど、八十五パーセント以上の結果は確実に出せるようにはなつていた。姉さんの通つていた難しい高校にも、ギリギリ手が届くんじゃなかつてくらいに。諦めなければなんとか姉さんに追いつけるものなのだと、その時は思っていた。

けれど、中学校生活の締めくくりに僕は不合格の通知を受けた。原因は無い。単なる実力不足だ。

姉さんがおぼつかない足で飛び降り自殺をしたのも、その日だつた。

その日に姉さんが死んだ理由はやはりわからない。姉さんの自室に遺してあつた言葉の本当の意味も、僕には未だにわかつていない。

この世の中はできないことが多すぎる。  
そんな言葉を姉さんが遣すなんて、未だに信じられないとも、思っている。

「……耕くん、耕くん」

話している間に、向かいに居る風間さんは心配そうに僕の手を握ってくれていた。

「大丈夫だよ」

できるだけ笑顔を返した。

「それで、滑り止めの今の高校に来たんだ。そして新しく何かを始めようと思ったけど、まだ頭が真っ白で、結局どうしたらいいかわからなかったけどね」

実際のところ、完全に投げやりになっていたのだ。レベルの低い高校に通ったところで僕の身になるとは思えなかった。だから周りを見下して、どうでもいいと考えていた。両親も僕には何も言わなかったから、結局、僕は姉さんのついでのような存在でしかないのだ。

「……だからあんなことしたの？」

風間さんの手が僕の手を少しだけ強く握る。

「まあ、ね。そこで不知火さんを見て、やめることにしたんだけど、自殺に対して、その程度の決意しかなかったともいえる。」

「お姉さんに、似てたから？」

「そうかな。おかしな状況下においても自分のペースを貫いていたし、見た目も少しだけ、特に目が似てると思ったから。あの楽しそうな表情は変わった人にしかできないんじゃないかな」

「不知火さん、あの時楽しそうな顔してたの？」

風間さんは目を丸くした。

「少なくともその時はそう見えたけど……本当は、どうだったんだろうね」

これで話すべきことは話した。そうすることで、風間さんに僕のことを解って欲しかったのかもしれない。

あと一つ、自殺未遂の後に父さんが本気で僕を殴って、二日間の説教をしたことは言わなくてもいいことだろう。「お前のせいで勇奈は死んだんじゃないのか」と言われたことも、母さんが壊れてしまったように泣いていたことも、僕の話ではない。

もしかしたら僕のせいなのかもしれないけれど、事実の確認はもう不可能なのだ。

コーヒーを空け、僕らはファミリーレストランを出た。

時刻は四時を回っていて、傾いた陽が建物の合間を過ぎて僕らに突き刺さり、無理にでも振り払いたくなるくらいの熱を帯びた。

「あ……えっ、と？」

そんな暑さから逃げるように駅に向かってしていると、風間さんが困ったような声をあげた。

「こうするほうが自然だと思ったんだけど、嫌かな」

かぶりを振った彼女の綺麗な笑顔がオレンジ色の光に焼かれた。この時僕は初めて、自らの意思で彼女の手を握った。そうしてむせかえりそうなほどに熱くなった僕の胸は、街の暑さとはまた違った異物感を与える。

「相変わらず積極的なんだね、ケンくんは」

「ケンじゃない。耕だよ」

それが心地よいと感じるのはきつと、お互いの理解に少しでも近づいたためだ。

「わかってるよ」

降りる駅につくまで僕らはあまり言葉を交わさなかった。いままでのこと、これからのことで色々考えることもあったのだろうけど、それ以上に、無理に口を開かなくてもいいような気がしていた。僕はそう思っていた。風間さんも同じくそう思っていてくれれば、何も言うことはない。

「それじゃあね。今日は色々あったけど、楽しかったよ」

「うん。月曜日にまたね」

「ばいばい」

手を振った。僕らはそれぞれの帰路についた。

確かに今日は、色々あった。時間に見ればそれほどのもではないのに、それ以上に得たものが多すぎた。

風間さんのことと、土屋たちのことと、僕自身のこと。今日交わした言葉だけでは、きっとその全ては伝わっていないし、僕らそれぞれが自分の過去の全てを開示しようとしたわけではないだろう。

それでも過程は見えた。今日に限って言えば僕だけは、いずれの過去にも少なからず触れたことになる。そしてその話を聞いて咀嚼しても、僕の考えが全く変わらなかった、なんてことはない。

不知火さんは今日、何をしているのだろう。

こうして彼女のことを想うということは、僕は彼女をどう思っているのだろうか。一応の意識下では今、不知火さんのものに強烈な違和感を持ってしまっているような気がするのだけど。それに、無意識下ではどうなんだろうか。以前彼女は僕に対して、自分で決めた自意識が剥き出しになっていると言った。それは果たして正しいことなのか。それとも不知火さんの視点の問題なのだろうか。

確かに僕は決めつけた。自分は凡人でしかなくて、他人に干渉することなどできない、誰かの手助けなどもつてのほかだと。それは姉さんへの劣等感と、自殺に足る理由がなんだっていいから欲しくて無理に塗り付けたものだ。

その時の僕にとってはそれが本当であったのかもしれない。しかし今の僕にとっては、それは本当とは言えないかもしれない。自分で決めつけたという自意識が今どこにあるのか、掴めない。

僕はもう、自殺を肯定することはないから。

自殺を完全に否定するに足る過程を持った風間さんと、一人の友人の自殺によって軋轢が生まれてしまった二人を見たのだ。そんなもの、無関係な人間にとっては知ったところではないことかもしれない。しかし彼ら自身には大きな爪痕が残っていて、それは確かな

現実として存在する。

だから僕も姉さんの出した結果を見て、選んでしまいそうになった。飛び降りる寸前までは確かに死ぬ気だった。どうだっていい、どうでもいい、死んでしまえばそこで終わりだ、あとのことは関係無いと思っていた。何も知らない、今すぐ死ねばいいのだと自己の選択を肯定して、諦めそうになった。

そうじゃないんだ。自殺だけを肯定してそれ以外の全てを否定することは、結局自分の全てを否定していることになる。それでは矛盾している。自分の過程を認めた結果の一つとして、自殺があるのだというのに。

自殺という手段そのものが逃避だとは思わない。どうしようもない現実には常に存在しうるのだ。僕の姉さんが体を悪くしたように、絶対に元には戻らない、取り返しがつかないということは確かにある。

だがそれでも、最良の手段とも思えない。風間さんのお父さんは考え直した結果が良いものへと結びついた。自分の全ての可能性を切り捨てる前に考える余地をもったのだ。その行動に向く前に自殺を選びそうになったのはきつと、今までの自分の過程から大きく外れた行動を取らない限り、手に戻せないものがあつたからだ。

姉さんはそれが嫌だったのかもしれない。風間さんのお父さんは、それを自分で振りきったのかもしれない。

僕も馬鹿みたいに無気力ぶって、変人ぶって、自殺を諦めたような顔をした。「自殺をやめた」という僕と、「それ以前の」僕は、明らかに噛み合っていないから。世間体なんて無視してしまえばいいのに、僕はそれを許さなかったのだ。

もう今は気にしなくていい。気にするつもりなんてない。頭を整理して徐々に自分の感覚を取り戻していけば、きつと風間さんとも解り合える。その動機だって、無闇に考えずにシンプルでいいんだ。

今日のことですべて自覚できた。僕は風間さんを好きだと思えたから、

言葉を掛け合える友達が居るから、素の自分で向き合うべきだと思  
った。それだけのことだ。そうしていけばきっと、誰かの後を追う  
ものでない自分自身の生活の中から何かを見出すことができる。も  
う姉さんに憧れを抱くこともしないし、自分の感性を軸にして過こ  
していくのだ。

いつまでも絶望に助けを求めていたって、誰も救われない。

「ただいま」

その日、僕は両親に自分の考えを簡単な言葉にして、何も浮かば  
なくなるまで話を聞いてもらった。耳を傾けてくれた父さんは終始  
変な顔をしていて、母さんはまた泣き出した。あまり覚えていない  
けど、僕も泣いていたかもしれない。どうして泣いたのかは自分で  
もわからない。泣こうと思ったからなんとなく泣いただけかもしれない。  
ない。

ある程度それですっきりとした。わだかまりなんてなかったのか  
もしれないけど、胸にかかる霧のようなものが晴れた気がしない  
でもない。実際は何も変わっていないなくても、変化があったと思えるの  
なら、僕はそれでいいといえる。

両親とじっくり夕食を食べ、バラエティ番組が終わったところで、  
自室に戻った。

それから日曜の朝まで、姉さんのお下がりですつと先に進まな  
かったRPGをプレイした。タイトル画面には昔に途中でやめた姉  
さんの冒険のデータが残っていて、勇者の名前は「ゆうな」という。  
再開すると、冒険を重ねてきた彼女は圧倒的な戦力で魔王をあとと  
いう間に倒し、世界を魔の手から救って、人々から大滝のような賛  
美の雨を受けた。

僕はそのクリアデータをセーブして、すぐに消去した。

月曜日、朝の駅で風間さんを見つけた。

「おはよう耕くん！」

「おはよう。朝からフレッシュだね」

夏らしく元気に人混みを抜けてきた彼女の目は幸いにも腫れていないようだ。そして風間さんは僕の元にやってきて、自分の体を抱くように。

「あたしはそれだけが取り柄だもの……」

「だものって全然似合わないけど」

「だもねー」

「……だもね？」

スタンダードな会話ができないまま、僕らは電車に乗りこんだ。ほどほどに混んで席は埋まっていて、風間さんは縦に伸びる手すりを掴んだ。僕は吊革に手が届くので、そのすぐ横に並ぶ。

「そういえばちょうど来週からだよ、学園祭準備」

「あれ、そんなのあったっけ」

学校行事には無頓着だったからそんなこと気にもしていなかった。というか来週からなんて、僕のクラスは何かするのかな。一年生だし、大がかりなものをやらないことに期待しておこう。既にしっかりと話が進んでいて、わけもわからずおいてけぼりにされるのは嫌だ。「あったよ、ものすごいあったよ。つつちーとかそういうのちゃんとか参加してそうなんだけど、耕くんはダメなんだね」

残念だけど土屋は、ホームルームの時はだいたい僕と実にならな話をしていた。もしくは僕と同じく話も聞かずに寝てた。

「だったら土屋も駄目なほうだよ。それで萌のクラスは何かするの？」

「え？」

「いや、だから学園祭の企画とかそういうの」

「うお……なんだったかなあ……」

うおって。風間さんも駄目じゃないか。

「ええつとね……多分、教室で展示ものとかやるんじゃない？ あたしフリスビー部の発表があるからあんまり関わってないんだよね」

「だよ。こっちもボランティア同好会の活動があるから……」

「学園祭に関しては何も無いじゃん」

もちろん、学園祭のことなんて目もくれず、普段通り適当に動いていただけけども。

「ていうか不知火さんには何かするのかな？ 耕くん知ってる？」

「わかんないなあ、どうなんだろう」

不知火さんは今日もまた、何かしらいい加減な活動をするのだろうか。僕の意識はある程度変わってはいるけど、もちろん不知火さんは何も変わってはいいない。以前から理解に遠い存在だったのに、またさらに何処か掴めないところまで離れてしまったかもしれない。考える間もなく降車駅に停まった。バスの時間に余裕があまりないので、僕らは他に降りていく学生たちの流れに乗った。

「あれ……」

「なに？」

学校へのバス停前で、風間さんが何かに気付いたらしい。

「いや、曾根君久々に見たなあって」

並んでいる列の先頭に、確かに曾根のような小柄で丸い背中があった。今日はブレザーを着ておらず、半袖ワイシャツと左手に黒いリストバンドをしている変化があるけど、確かに曾根だ。

「ほんとだ……」

そして彼から若干距離をおいて乗車列が並んでいる、が、なんで変な間ができているのだろう。気にしてもしょうがないのでそのまま僕らもその列の後ろについた。

「なんかすごいにやにやしてる」

「にやにや？」

落ち着きのない風間さんが列の横から顔を出して、先頭の曾根を観察する。

「うん」

「なんかいいことでもあったんだろうね、うらやましい」

「曾根君もいいことあったのかな？ そういう感じの笑い顔には見えないけど」

僕も顔を出して見てみると、確かにちょっと。



「うわ、こわいねー」  
「ねー」

それから数分、高校行きの通学バスがやってきて、僕らはすし詰め状態で運ばれる。車内に冷房が効いていなかったらどうなっていたか考えたくもない。

生徒の波に押しこまれていく中で、ちょうど僕の二人前くらいに曾根が居た。曾根はリストバンドをしている腕を吊り革にかけ、その二の腕の辺りまでぼつぼつとした打撲のような青あざを見せびらかしているようだった。傷が曾根のいじめの証なのだと言張しているようにも見え、にやついた表情もまさにそれをアピールしているよう。なんだかバスの冷房が効きすぎているか心配になった。

玄関で靴を履き替えていると何人かの生徒が大きなダンボールをせつせと部活棟の方に運んでいるのが見えた。何人かは知っている顔で、テニス部の小柳部長など。おそらく学園祭の準備だろう、それ以外にも朝からジャージ姿で玄関前をうるつく生徒が多い。

「もしかして今週から準備なんじゃ……」

「いやいや、来週からだよ？ あたし達あんまりやる気ないけど」

身も蓋もないことを言ってしまう風間さん。そのまま一緒に階段を上がって、教室の前で立ち止まった。

「おっと？ どうしたの耕くん」

風間さんは僕の行動を見ていやらしい笑みを浮かべる。

「……いや、なんでもないよ」

「……」

無言でじっくり見つめ合っていると、風間さんはふらふらと左右に鞆を振り始めた。

「……」

「……おひるごはん。なにに、しようかなあ」

「わーかったよもう！ ちゃんとさえばあたしもちゃんと渡したの

に！」

振った鞆の勢いそのまま、風間さんが素早く赤い風呂敷を取り出したのを確認、それと同時に僕の胸に強い衝撃が走った。突き飛ばされるように二組の教室に押しこまれた僕は受け取ったお弁当を抱くようにして、粘っこい視線を受けながらも自席についた。とりあえず後で謝っておこう。

「おう、朝っぱらから」

窓際の席で横向きで座っていた土屋が僕を迎える。

「そう？ 朝っぱらから？」

「対応がぐつちゃぐつちゃねえか何だてめえは」

「寝起きだから」

言葉が雑になったことは否定しないけど、余計な茶々を入れてきたのは土屋だ、と言いたい。それに対する反論も目に見えてるから何も言わないんだけど。

「ところでうちのクラスって学園祭何かやるの？」

「話題が唐突だな」

「これはしょうがない。全然話聞いてなかったのに、もうあと一週間前だつて聞かされてびっくりしたからさ」

「俺と話してて聞いてなかったんだから俺が知ってるわけなくねーか。学園祭実行委員会とか確かあったけど、俺らんとは誰だったかな……」

何か視線を感じた。

「私だ」

「お前だったのか」

不知火さんは暇でも持て余していたのかな。文庫本を片手にしていたけど開いてもいなかった。朝から不知火さんが教室で声をかけてくるなんてなかなかある事じゃないし、そこにも何か理由があるんじゃないかと勘繰ってしまう。

「ん。そのことで少し。今日は昼から委員会があつて席を外すことになるんだが、本日の部活にもかかるくらい忙しくなる可能性もあ

る。まあ、私としてはもつと個人単位で動きたかったがそうもいかない。集団とは一人で為し得ないことを可能にするものであり、特にこういった祭りなどはその好例だ。これだけ楽しいことに私が関わらない理由などは無いし、むしろ引っ掻きまわしてやるくらいの意気である」

この場合の不知火さんが言いたいことの要点は、部活に遅れるということなのか、学園祭をめちやくちゃにしたいということなのかというかどう見てもテンションがあがっているのはどういう理由なんだろう。彼女が半袖で居ることに違和感がないという違和感がある。

「大変そうだね」

「そうでもない」

そうでもないらしいので、僕と土屋はいつも通りにショートホールームの開始を告げるチャイムを無視した。

その後の一時間目の授業から教室の空気は落ち着きがなく、まだ学園祭準備段階のさらに一週間前であるというのにそわそわとした動きが目立った。もしかしたら学園祭以外の理由もあるのかもしれないけれど、他の理由は生徒間の情報に疎いために想像がつかない。

「……でさ……」

「まじでー？」

授業中の女子の声はひそひそ声でも目立つ。いつも適当な注意をする現国の教師も、珍しくまともな注意をしていた。

その次の休み時間でも、特に女子の動きが多かった。教室を出たり入ったりする人がいて慌ただしく、僕が目もやはりそちらに気をひかれてしまう。

「……やばいよ……」

廊下で声がした。

「不知火さん、居るかな？」

そして同時に教室に男の声が入ってきた。静まり返った教室で彼は頭をきよろきよろさせる。よく見なくてもその顔に見覚えがあっ

たけど、何の用だろう。

「あいつって……」

「瀬上先輩だね、例のオクトパスブックキングの」

瀬上先輩は二年の吹奏楽部の人だ。見た目を端的に言えば爽やか、立ち振る舞いも爽やかな……ベーストかなんかだったっけ。別にものすごいイケメンというわけではないけど、悪い点を見つけようと思っても多分彼には見つからない。だからオクトパスにまで発展したんだ、きつと。

彼は不知火さんを見つけたらしく、「ちょっとごめん」と言いつつ早足でこちらにやってきた。

「不知火さん！」

机の前で必死そうな声をかけられても、不知火さんは頭を上げなかった。明らかに注目を浴びているのに眉一つ動かさないのは見習いたい凶太さだ。

「日曜日の件、まずはありがとう」

教室で様子を見ていた生徒が「ええー」とか反応した。大方ろくな勘違いではない。

「私は何もしていない。結果は一応聞いたが」

不知火さんは目も合わせずに。

「なら、俺がここに来たの理由もわかるよね。不知火さんは鋭いか」

「今日は忙しい。明日にしてくれないか」

「……………」

微妙な沈黙。休み時間は十分間しかないのにこんな調子で大丈夫だろうか。瀬上先輩は苦笑いで固まった。それに、不知火さんは別に忙しくないだろう。

「……………なら。明日の放課後、俺に時間をくれ」

「私が学校に来れたらな」

「わかった。じゃあまたその時に、よろしく」

瀬上先輩はそれを聞くと、満足そうな顔で帰っていった。ざわつ

きが大きくなるのと同時にチャイムが鳴り始めて、何かうやむやになつた感が強い。さらにその次の授業が始まって、も女生徒の動きはとどまることを知らず、クラスが落ち着きを取り戻すのはいつになるのか。

「うっせ……」

そんな状況で前の席の土屋が、窓の方を眺めながら呟いた。多分その言葉は僕にしか聞こえていない。確かにこの展開は土屋としては面白くないだろう。朝から聞こえていたひそひそ話は「瀬上が一日で八人振った」とか、「瀬上は媚を売る女が嫌い」とか、「瀬上には実は好きな女が居た」だとか、噛み砕けばそういう内容だ。

その噂のどこまでが本当なのかは別としても、火の無いところに煙は立たない。

逆に言えば煙が立っているのなら、火種となるものは確実に存在する。

要するに、不知火さんって大変だ。

昼休みになって噂好きの女子の不完全燃焼感はピークに達したらしい。焼き尽くして欲しいと願う生焼けの、いや、修羅場の渦中に立ちそうな不知火さんを狙った野次馬が教室の入り口に押しかけ、教室内に熱い視線を注ぐ。

「すごいことになつたな……」

山田が鈴木と共に僕らの席で昼食を広げつつ、囁くように言った。

「山田は瀬上先輩のこと何か知らないの？」

僕が訊いてみると、山田は首を横に振る。

「普通に男には興味ねえって」  
「ごもつとも。」

ゆつくり弁当箱を開けていると、教室がまた動きを見せた。

不知火さんが勢いよく立ちあがったのだ。五月に見せていた冷たい無表情のまま人の群れを睨み、海を割くように出口の人を退かせた。その手には携帯が握られていて、不知火さんは廊下に出て行き

ながら耳にあてる。

「少し遅れる」

言って、突然廊下の外で駆け出した。数人の生徒が反応し、不知火さんの後を追おうと騒ぎ立てた。もしかしたら、瀬上先輩に振られた人のグループだったりするのかもしれない。

「あいつはまた余計なことを……」

土屋が先程のように呟く。僕らがのんびり昼食を始めようというところで、どうしてこんな大きな騒ぎになってしまっているのだろうか。

元々ややこしいことの少ない学校であるし、学園祭前の浮かれた気分を加速させるきっかけにしようとしても考えているのだろうか。当事者にとっては冗談にもなっていないのに。

「あれ……？　って、なんだろ」

ふいに、パンを食べながら窓の外をぼうつと眺めていた鈴木が何か目を丸くした表情を見せた。

「どうしたの？」

訊くと、その方向に指をさす。

そこには何かが見えた。

僕らの居る本棟の向かい、部活棟の音楽準備室のちょうど反対側一般教室と同じつくりの自習室の中に、人が居たのだ。彼は机をせつせと運び、窓際に三段ほどの高さで足場を組んでいた。彼がつくる机の山は、何か別の用事で積んでいるのかもしれない。例えば何かの会議で使うためとか、整理や掃除のために部屋を広くとるためとか、いくらでも考えることは可能ではある。

それでも、僕はそれを「足場」なのだと判断する。

組まれた机の段の天辺に、箒を横に倒して置いているのが見えたから。

「土屋、ちょっとトイレに行つて来るから。手、出さないでね」

開いてすぐの弁当をそのままにして、席を立った。

未だに教室入り口でたむろしていた数人の生徒をすり抜け、僕は

部活棟の方に歩き出す。

あそこにオルガンはない。オルガンのあつた部屋はもう一般生徒が出入りできないようになっていたのだ。だから足場が必要になる。それは自分で準備しなければならぬ。なんだっていい、周囲に大量にある机が妥当だ。そして外側に備えられた四角い排気パイプに登るには、そのすぐ隣の開かない四角い窓を割らなくてはならない。割るには拳は難しい、何か道具が必要になる。ならばどこの教室にもある筈で思いきり突けば、割れないことはないだろうと判断できる。

しかし何故それを選んだ。自身が絞り出した結論はそれが正しいと判断したのか。覚悟でも決めたのか。朝の笑みは何を示していた。一泡吹かせてやろうとも思ったのか。あの痣を見せつけて、心身の傷跡を見せつけようとも思っていたのか。それでも最後にそれを選んでしまえば、結局他人の、自殺志願者ぶつた僕なんかの真似事にしかないだろう。

不知火さんは委員会だ、このままでは僕の時のように思いとどまる理由が彼には無いままかもしれない。だったら僕がそれを止めるしかない。同じ淀みを背負ったつもりになった彼を、僕が止めなくてはいけない。

なによりそれは僕自身のために。曾根の姿は昨日までの僕の映しでしかないのだと確かめるために。これが傲慢でも自惚れでもあり、曾根はそんなことを考えていないのかもしれなくても、僕はそこにそういう意味を撫で付け、この行動に結びつけた。

それでいいのだ。

半端な自殺を止める理由は、雑然としたもので十分だ。

小走りで自習室に向かう。今ならまだ、大した騒ぎにならないで済ませてしまえる。あの部屋は内鍵なんて掛けられないようになっていたため、無駄足になることはないはずだ。

二階の渡り廊下に降りて部活棟の四階まで駆け上がり、その廊下を軽く走った。昼休みが始まってそれほど経っていないからか、生徒の姿は見えない。やはり、僕くらいしか曾根を止めに行こうという人間も、止めに入れそうな位置にいる人間もいない。

けれど耳を澄ませると、背後の廊下で足音がした。

僕の駆け足よりも数段早く、全力で走っているのかと思わされるくらいに強く階段を蹴っているのがわかる。徐々に迫ってくるその音は追いたててくるような圧迫感を与えて、急ごうとする僕の足を止めた。

「待て、原島君」

正確に言うなら、駆けてくる足音を聞いた僕の意味で、その場に立ち止まった。

「……委員会があるんじゃないか？」

「君こそ、萌のお昼ごはんは食べたか？」

振り返ったそこには不知火さんがいた。少し息を切らせて、多分さっきの人達から逃げてきたのだろう、顔が上気している。

「落ち着いてからゆっくり食べたいんだ」

「そうか」

不知火さんは立ち止まる僕の横を、普段のペースで過ぎていった。

「そっちには何も無いよ。全然人の気配もしないから」

「そうか」

返事はするけど、歩いていく。僕はもう一度振り返って、不知火



さんの背中を見つめた。

「……不知火さんが勧めたの？」

訊くと、はねた髪の先をいじる。

「そうだ。曾根君の出した答えが最終的にそれに落ち着いたらいいからな」

ここは、やはり、といえいいのかな。だったら土曜日に僕らを出掛けさせたのも、僕らのうちの誰かが学校に来る可能性を極力無くしたかったなのかもしれない。

「不知火さんはそれが正しいって思ってる？ 校舎の上から身を投げるなんてこと、間違ってると思ってるの？」

不知火さんはいつかのように、ゆっくりと歩きだした。僕もそのペースに合わせて、追う。

「個人の選択には、正しいか、間違いかどうかの尺度などない。正義も悪も成功も失敗も、一個人の観点でいえば全く意味を為していないものだ。たまたま偶然今の世の中は、生きることと常に連動する社会が個人にまとわりついて、その存在と価値を必要とさせるに至っただけだ。曾根君のように後も先も見ることが辞めるなら、一つの選択は一つの目的を果たすための単なる行動そのものでしかなく、意識的な構造や思想や理性を積んだ普段の行動や言動とはあまりにかけ離れたものだ。言ってみれば、君が勝手に口を出すことが間違っている、とするのが正しいと思うが」

「そうは思わないよ。君が言う個人は、変化し続ける周りの存在があるから信じることができるものじゃないか。それを押しのけて「自分の為にある命を好きにして何が悪い」「自分のものなんだからどうなったっていい」なんて顔をされても、そんな行動に移されても、なんの説得力もない」

自習室に着くまでに、この話は終わるだろうか。

「原島君の言葉こそ何の説得力もない。自殺しようとした人間が他人に講釈を垂れようなんておかしいとは思わないのか？ 少し前の部室での曾根君に対しても、まるで殴りかかるのかと思わされるほ

ど君の表情は憤りに満ちていた。あれはどう考えてもそれまでの君の発言や行動と矛盾している。そんな素振りを見ている以上、私は君が自殺を高尚なものだと勘違いしている節があるのではないかと思つた。だからあの場では彼を帰らせたんだ。君が居ては、ややこしいことになりそうだと思つたからな」

僕があの時点で怒つていたのだとしたら、確かにそういう一面もあつたのかもしれない。なにもしなかつたと言う曾根には、自ら命を断つだけの理由も過程も存在していないだろう、と思つたかもしれない。だけどそれは、実際のところ僕も同じだ。

「そうかもしれない。でも、今話したいのはそんなことじゃない。ここで起きてることが君自身と、曾根自身が本当に納得できた理由だとは思えないんだ。こんなことを勧めるだなんて絶対に狂つている。せめて方法の一つとして曾根に言葉をかけたのならまだいいかもしれない、でも君は今、わざわざこんなところにまでやってきているし、それは飛び降り肯定する証といえるじゃないか。もしかして曾根の悩みを解消するにはそれが最適な手段だつて思つたから？ 最後の言葉を聞いてやらないと折り合いがつかないと思つたから？ 色々理由は考えられるけど、そんなわけないよね？ どれも君が曾根の自殺を肯定する理由には足り得ないじゃないか」

「何故そう思つんだ」

「悪いけど言わせてもらうね。土屋から聞いたんだ」

不知火さんは急に目を丸くして、立ち止まつた。

「君のお姉さんのこと」

「どうして……」

僕は続ける。

「そのあたりの話を全部聞いたわけじゃないけど、今君がこうしているってことは、亡くしたことで大きく変わったことがあつたはずだ。それを考えるなら君の行動はおかしいじゃないか。どうして曾根には生きることが勧めないんだ。自殺は周囲の人間にとって得ることも失うことも多いんだって、君は解っているはずだ」

「曾根君は、私と同じだから」

不知火さんは小さな声で。

「はつきりいつて君が何を言ってるかわからない。以前は他の人間にも似ていると言っていたよね。以前の話の観点で捉えるなら、曾根はそれとは違っている」

「君にはわかるはずがない。私に似ている君と、私に似ている曾根君は違う。私は、違う」

少し前のことを思い出す。不知火さんには常々興味を持っていたのだ、思い出せないことはない。不知火さんは「自分を両立させるのが得意じゃない」と言っていた。土屋と先輩は、不知火さんが誰か、何かに「似ている」と言っていたのだ。ならば、それは単純すぎる話だ。

「俺は君の姉さんには似ていない」

ガラスの割れた音がした。

「似てるんだ。君は似てる。氷実おんじが遺した言葉と、そっくりだ」

不知火さんのお姉さんが遺した言葉は偶然姉さんと似たような言葉だったただけだ。それは僕は真似をしたに過ぎないし、きつと言葉通りの意味ではないのに、僕はその本質を理解していない。

「でも君は生きてるから。きつと、できるようになったことがあったから死ぬのをやめたんだろう？」

黒い瞳で僕を見据えて、掴めない問いをかけてきた。

「そうじゃない。何もできないしわからないままだ。単に君にすがるうと思っただから俺は死ぬのをやめた。君の姉さんと似た言葉を遺した死んだ俺の姉さんに、君は少しだけ似てたから、君を見ていたと思っただけなんだ」

彼女の目が更に開いた。多分、驚きはあつたのだろうけど、そんな場合でもなかつたのだ。

「……じゃあ君は何なんだ、だったら何がしたくてここに居る、君の行動は、意識して見始めた時から全く掴めない、やはり、変なんだ」

「不知火さんが間違ったことをしようとしているみたいだから、曾根も間違ったことをしていたから、止めなくちゃいけないと思った。だから変でいいんだ、行動に信念なんてなくてもいいし、明確な基準や指標なんて持ってない。そうしなきゃ俺が納得できないから。それだけだよ」

「君が納得できなくても、私は間違っていない。曾根君は一度死んだ方がいいんだ」

「不知火さんは歩きだした。」

「どちらにしろ、おそらく君にはわからないこと。大きな妬みねたや嫉そねみは、心に根差してしまつた瞬間から世の中の全てに対して際限なく生まれてしまう。以前に君が言っていたように、確かにどれだけ努力をしても届かないものはある。しかしそれを認めてしまうことは努力の可能性すら奪いとることをわかっていない。まあ、だから私は諦めることはしなかつた。諦めないでいたから、嫉妬の対象が消えて無くなつた時、それに成り変わることができた」

「それって」

「しかし曾根君はその相手が多すぎる。だから曾根君自身が死ぬことがもつとも効率が良い。幸い殺人をするほど彼も私も狂っていなかったから、この方法を取ることにした」

自習室の前に立って、ドアを掴んだ。

「彼を止めたければ止めればいいが、それでは救いにはならない。単なる君の自己満足では、変わることでできない曾根君を助けてやることなどできない。念の為に言うておくが、私は私のためだけでなく、誰かのためにも動くこうとしている。私は、氷実とは違つんだ」  
がらりとドアが開いた。

そこには壁際に積まれた机の山と、そのてっぺんで割れた窓枠のガラスを取り除いている曾根が居る。

「あ、不知火さん。結構もう注目され始めて」  
こちらを見た曾根は動きを止めた。

「曾根」

「原島？」

睨むような目つきになって僕を見る。

「なんで原島がいるんだよ」

「やめさせに来たって言ったら、怒るかな」

「ふざけるなよ原島、どうせそつちの都合で勝手なこと言おうとしてるんだろ？ どこにでも居るよね、そういうやつ」

それは否定しないし、できない。不知火さんは僕の隣に立ったままでも言おうとはしなかった。

「どこにでも居るってことは、そういうことは一般的に誰も認めないってことだ。そんなことわかってるのに、どうしてそこまでしようとするのか俺にはわからないよ。自殺をするなんてまだ早すぎるし、考えだつてまとまってもいないんじゃないか。そんな衝動的にこんなことをしたって」

「お前の言うことなんて聞く価値無い」

「……曾根、聞いて」

「不知火さん、いいよもう」

曾根は窓枠から身を乗り出した。僕のように換気口からよじ登って、高さを得たところで飛び降りる気だろうか。それなりに度胸はあるけど、曾根は気にもしていない。机の山を蹴飛ばしてしまえば曾根が出ていくのを阻止できるかもしれないが、無理に動くとかやり窓から落ちてしまう。

だから僕は動けなかった。それ以前に、ここまで聞く耳を持たれないとは思ってはいなかったし、動きが少し遅かった。不知火さんに付き合っていなければ、まだ力づくにでも止められたかもしれないのに。

「そういうことだ、原島君」

携帯を手にしていた不知火さんが言う。

「死にたがりが救われる方法は死ぬことしかない。飢餓にあえぐ人間が助かるには水と食料が要る。人には常に、救われるための条件があるんだ。それを人からの言葉で埋めるか具体的な行動で埋める

かは、他人が決めることじゃない。その中で私は曾根君の望みを叶えてやることにしただけだ」

「でも！」

僕は大声ともつかない声をあげた。自習室に曾根の姿はもうなかった。空いた窓から本棟で騒ぐ声が聞こえた。この調子なら教師達もすぐに気付いて、誰かがここに来るかもしれない。

「……不知火さんは、自殺を肯定するつもりなの？」

不知火さんはかぶりを振った。

「否定しないだけだ。例を挙げるなら、私の姉は馬鹿だったから勝手に死んだ。そのことを肯定はしないが、もうそれは終わったことだ。その死を今になって否定したところで、得られるものはない」

「そんな言い方ないじゃないか……」

「私の為に私の席を空けようと思った馬鹿の全てを私は認めるつもりはない。姉は自分が居ては私を尊重することができないと勝手に思い込んだんだ。姉のことは総助から聞いたのだろうか？ だったら総助はその時、ろくな顔をしていなかったはずだ。あいつは氷実が死んだ理由を勘違いしているからな」

結局不知火さんには不知火さんの考え方があって、僕とは噛み合ってくれないのだろうか。

「そう。自殺はそんな結果しか生み出さない。それでも、当事者はその結果で無理にでも納得するんだ。生き続けていれば間違いだとか気付くかもしれないが、死んだ人間はそれ以上を考えられないから……じゃあ、諦めそうになっている人に自殺を薦めるのはどうして？ 曾根はまだ生きているし、考える時間だっていくらでもあるじゃないか」

「曾根君にとつての時間はもう、とつくに限界なのかもしれない。ならば、それを無下にすることは道徳的でないと私は考える。だから今日のためにリハーサルだってしたんだ。万が一、失敗してしまわないようにな」

曾根は窓の上で、「飛び降りる」だとか叫んでいた。あの時の僕

のように、要領を得ない無様なものだ。

「……」

失敗とは何を指しているのか。

「不知火さんって、変だよ」

「君の変化ほどじゃない」

「これまた、冗談ではないんだろう。」

僕だって少しは変わったつもりだけど、一朝一夕で大幅に変わるものではないことはわかっていた。それでも、何か自分からの行動に繋がれば、とは思っていたのに。

僕のこの変化は、変なものだったのかな。

「話はこれくらいでいいだろう」

不知火さんは窓際まで行くと、本棟の様子を眺めているのか少し背伸びをした。

「この際だ、改めて訊く。以前は本心からの言葉ではなかったらしいからな」

そして言葉を切ると、立ちつくす僕に振り返った。この際なんてどういうつもりで不知火さんは言っているんだ。

「原島君、君はなんで生きているんだ？ 先程話した、結果としてものではなく、今出せる君の言葉で答えてくれ」

窓の外から誰かの悲鳴が聞こえた。誰が叫んでいるのか知らないけれど、耳が痛くなるような声だった。その時ちようど自習室のドアが勢いよく開いた。そちらを向くとそこに居たのは三人の教師で、僕を五月の頃に取り押さえた人だったかもしれない。

そして、教室の一部が暗くなった。僕がもう一度窓の向こうを見ると、その影は消えていた。

鈍く重い音がしたのは、その直後のことだった。

心臓が早鐘を打っていた。

「先生！」

窓際で地面を見下ろす不知火さんが叫んだ。

「お前達、どうしてここに居るんだ！」

それに呼応するように、やってきた体育教師が鬼のような顔で怒鳴る。そして僕を一瞬睨みつけて、窓枠まで走っていくと身を乗り出した。

「曽根君がガラスを割っていたのを見たので、急いで原島君と一緒に止めに來たんです」

おどおどとした様子で不知火さんが言うと、身を乗り出した教師はすぐにドアのほうに駆け戻る。

「……とにかくお前達は無事なんだな？ 先生たちは曽根のところに行くから、この後放送で呼ばれたら職員室に來るんだ」

「わかりました……」

そうして、教師たちは何かを話しながら自習室を去っていった。

「……………」

「ふう」

一息つく不知火さん。

「……………」

一息つくのは勝手だけど、今はそんな場合じゃないのでは。

「なかなか焦らせてくれるじゃないか」

不知火さんは窓枠を背に肘をかけて、空いた手で前髪をかきあげた。

「見てみる原島君」

指したのは窓の外、まさに今、曽根が飛び降りた地面だ。僕は言



われた通りにそこまで行って、顔を出して下を見た。少しだけの覚悟をして。

「……………」

「これが曾根君と、私自身の答えだ」

僕が見降ろした場所にあったのは、中庭の土の上で大きな白い正方形を土台にし、カラフルな袋のようなものがごちゃごちゃと置かれ、さらにその上にダンボールが積まれた、まるで映画撮影用のクッションだった。現在は曾根が落ちた衝撃で、ダンボールがぺしゃんこになって、その下の袋が一部吹っ飛んでいる。

中心では横倒れに曾根がうずくまっていたけど、ここから見る限りでは大きな怪我はしていない。

「あっはっはっはっは！」

と思っていたら、曾根は怪我どころかびんぴんとした様子で立ち上がり、ひしゃげたダンボールのいくつかを蹴飛ばして狂ったように笑いだした。

同時に、何故か本棟のギャラリーからは拍手がちらちらと挙がって、未だに混乱した様子の子の生徒も見受けられる。僕ももちろん、混乱している側の人間だ。

「……………無事なようだ。これで曾根君は色々吹っ切れることができるだろう。まあ、その先の責任を取る気は全くないが」

一方的に清々しく言い放つ不知火さんは、訊かれないと説明はしてくれないのかもしれない。

「これってどういうこと？ どこまでが不知火さん？」

「全部に決まっている。下の準備はまあ、学校の友人達に手伝ってもらったが」

そう言った不知火さんの携帯が鳴った。不知火さんはスカートから携帯を取り出して、耳に持っていく。

「……………ん。小柳部長。曾根君が無事なら、全て昨日話していた予定通りにしてくれればいい。もしジャージの袋が破れていたなら、悪ノリした奴の自己責任だ。……………ああ、わかった。ありがとう」

携帯をぱたんと閉じた。

「この世の中、独りではできないことが多すぎる。私の姉はやはり馬鹿なんだ。それに気付いた時に、自分にはそれができないと思いついてしまった。その方法がわからなくて、どうしたらいいかわからなくなり、そのまま全部独りで決めつけた。まあ、それを気付かせるきっかけを与えたのが、私になるんだが」

「……………」

以前言っていた「死なせた」とはそういうことだった、のか？

「誰かにすぐることも、誰かに救われることも、助けを求めることも、全て独りでは絶対にできない。悩むことも、苦しむことも、受け止めることも、独りでは辛すぎる。ならば誰でもいい、そばにいる誰かを頼ればいいだけのことだ。集団は個人よりも頑強で、温かいものだからな」

不知火さんは僕を見つめた。

「私は凡人だから、その全てがいかに大きなものかを知っている。今日のこの結果も、万能だった馬鹿の姉には絶対にできないことだ」  
それは、そうかもしれない。僕の姉さんも、そういう部分があったのかもしれない。

「………… 敵わないよ、不知火さんには。全然、そんなの想像もしてなかった」

「そうでもない。正直、君の行動には驚かされた。さきほど話したことも本音がいくらか混じってしまったな。本当は曾根君の飛び降り作戦の確認に行っただけなんだが、下手にしていれば君が妨害に入ったタイムロスで教師に止められるところだった」

「そうだったの…………？ というか、どういう作戦？」

「聞きたいか？」

不敵に笑ってきた。

「もちろん聞きたいよ」

頷くと、不知火さんも楽しそうに頷いた。

「最初に曾根君が来た瞬間から、いや、彼を殴った時か。その時に

はもう、これを実行しようと考えていた。あの場で言わなかったのは空姫あたりが賛成しないと思ったからだ。君はわからなかったが、怒っていたのは確かだし、一応やめておいた」

僕が怒っていたというのは本当だったんだ。

「そして後日。休み時間に曾根君に死ぬような飛び降りを提案してみたら、案の定死にたくないと言いた」

「ええ……？」

殴られて泣かなかったのに飛び降りを提案して泣くというのも変だけど。多分実力行使で何かをしたんだろう。やりかねない。

「だったら、と私は今日の飛び降りを奨めることにした。作戦は単純、美術部のキャンパスを土台にし、運動部のジャージ袋をできる限り用意、そして「学園祭の準備のため」だということと各部活動で貯蔵したダンボールを組み、クッションとする。二分程度でクッションを形成できるようにするには三十人ほどが息を合わせなければならなかったが、昨日の土日とその前の日曜日の時間を借りて、それぞれ部活動の無い時間に顔を出してもらった」

「よく顧問の先生とかにバレなかったね、それ」

「学園祭前、というのが大きかったな。それから私の活動はそれなりの知名度もあったから、多少の奇行は黙殺される」

「へえ。でも、それだけ？」

それだけなら、曾根がにやついていていた理由も、今日飛び降りを迷わなかったことも納得できない。

「察しがいいな。もちろんそのことで色々弊害もあったが、とにかく曾根君と私は頭を下げた。「派手なことをしよう」と。そして曾根君には、この作戦を笑って済ませるためにある練習を強要した」

「練習っていうのは？」

「ん。五点接地法というのは知ってるか？」

「知らないよ」

「スタントマンや自衛隊などが使う、高所からの衝撃を軽減する方法だ。素人がやっても上手くいくとは正直思っていなかったが、曾

根君が飛び降りるにはそれくらい理由が必要だった。だから、一週間くらいはずっとそれをやるように指示した。たまに私も付き合っただけだが、阿呆のように公園の遊具から飛び降りたり、やたら楽しそうだったのは覚えてる」

何気に途中でとんでもないことを言っていたような気がする。しかし、ということとは、曾根の腕の傷はいじめで受けたものだけではないのかもしれない。

「野球部はユニフォームもあったから、クッションを積む高さも一階の半分程度までは盛れる。着地も足からならば、着地法がなくともへし折れるだけで済むかもしれない。曾根君は昨日の時点で、その方法があれば三階からでも植え込みに着地することが可能だった。そして条件が揃ったから今日実行に移すことになり、実際に成功してみせた。これだけのことがあったなら自信にもなるし、曾根君もそのつもりでいたのだろう。自分は生まれ変わる、といった具合に」  
救急車の音が聞こえてきた。

下を覗くと既に曾根の姿はなく、クッションの残骸を撤収する生徒たちと、それに対して何か言葉をかける教師の姿があった。

「でもこのこと、バレたら問題にならない？ 自殺扶助だとか言われるかもよ？」

「その通りだが、全員に緘かんづれい口令を敷いたから問題はない。」「放課後の部活の準備をしていたら、飛び降りる生徒が見えた。だから私達は対処をしなければいけないと思った」そんなところでもいいだろう。表面的には何も悪いことをしていないのだから、咎められることはない。教師の方もわざわざ追及してくる人間は少ないはず。この学校は何気に問題が多いからな、一緒に変なものまで引っ張り出したくはないと考えるだろう」

確かに多い。知っている中で言うならこれで四つ目になる。もっともごく最近のものが三つを占めているというのは、それはそれで問題だけだ。

「さて、昼休みもそろそろ終わる。本題に戻ろうか」

不知火さんは髪を撫でつけつつ、言う。

「……あつたつけ、そんなの」

「君はなぜこうして生きているのか。それに、前に言ったはずだ、私は君に興味があると」

「それは、姉さんの言葉を真似たのが、偶然君のお姉さんの言葉と少し順序が交錯しているが、今私がしている質問は違う。私が声をかけたきっかけはそれなのかもしれないが、私が君に興味を持ったのは、部室で言葉を交わしてからだ」

「……」

「何故生きているか、聞かせてくれ。君なら面白い解答ができると踏んでいる。私はなんだかんだと言ってきたが、何故自分がこのうと生きているかはわからないままなんだ。だから、君に少しばかりの期待をしまっている。いくばくかの参考にできそうだからな」

そんな期待をされても、僕にはもう月並みなことしか言えない。

「そうだね」

僕は少し考えて、本当につまらないことを言おうと思った。

不知火さんに一杯食わされたばかりなのだ、ふてくされても文句は言わせない。

「救われてるからだよ、できないことばかりでも」

「何に？」

「萌とか、土屋とか、先輩とか。不知火さんがいる、今の生活に胸を張って言うと、不知火さんは「良い言葉だ」と笑った。

これまた、面白い冗談だ。

## 20・自殺にまつわるエトセトラ

20・

それから一週間。

不知火さんの言っていた通り、飛び降りに加担していた生徒は誰一人問題にされることはなかった。僕と不知火さんはその放課後に呼び出しを受けたけれど、不知火さんの言い訳に簡単に納得して、すぐに開放された。

曾根はねんざをしていたらしい。それと同時に、三週間の停学を言い渡されたそうだ。実際、生徒間では彼の扱いは「本気で飛び降りた」ということになっているので、この件は「飛び降り事件」として校内で有名になっていた。それでも全校集会が行われなかったのは、僕に対しての配慮かもしれない。

そして今日、学園祭準備前のホームルームで、「自殺に関するアンケート」が配られた。

あなたは自殺を考えたことがありますか？

それは、どんなときですか？

誰かに相談しましたか？

といった具合に、よくあるアンケートだ。

真面目に答えてしまおうかと思ったけど、それは全部過去のことです。もう引つ掛かりもないこと。書くまでもないだろう。前の席の土屋も紙を貰った段階ですぐに寝ていた。この紙を書くために十分も取っているのだ、寝るのが正しい判断だと思う。

隣の不知火さんは、何かをかりかりと書いていた。多分、暇だか

ら裏に変なイラストでも描いているに違いない。こういうことを真面目に書くタイプではないだろうし。

それが終わって、学園祭の話が持ちあがる。僕のクラスの実行委員は、やっぱり不知火さんじゃなかった。あの時に嘘をつく理由もなかったと思うんだけど。そこで始められた変な議論を耳を傾けていたら、お化け屋敷をやることになっていたことがわかった。山田と鈴木が終始うるさくて、みんなはごく自然に相手にしていなかった。

放課後、僕らは部室に向かった。僕と土屋と不知火さんは、当日の実働隊になっていた。衣装合わせもまだする段階ではないので、仕事がないのだ。

「そついや水玖、お前大丈夫か？」

土屋が思い出し顔で不知火さんの方を見た。

「何が」

「なんか瀬上に言い寄られてただろ」

「なんだ？ 総助は私が心配なのか」

「別に瀬上の方はお前の勝手にしろとしか言わねーけど、女子のほうで穏やかじゃなかったんじゃねーの？」

土屋はなんてドライなことを言うんだらう。

「ああ、それは大丈夫。校内最大勢力のボスに守ってもらったから問題はない。もちろん瀬上先輩は振った。彼は少し爽やか過ぎて、興味が湧かない」

「ボスって誰だよ」

「峰木先輩だ。なんだろうな、あの人は仲良くなったらすごく良い人になるタイプらしい。プレッシャーを与えるようにやんわりと言葉をかけるなんて、私も惚れそうになった」

そつえばそんな人も居た。やっぱり後輩に慕われているみたいだから、まともな性格を持っていてもおかしくはなかった。まあ、暴漢に襲われかけた危機感からか知らないけれど、ひどい暴言まで吐く人間でもあるのは御愛嬌と言っておけば丸く収まるかな。

「あ。それならさあ、土屋こそ大丈夫なの？」

僕も敢えて、ここに突っ込みを入れる。大体のことはもう、萌のほうから聞いているけど。

「何がだよ」

「なんか海原先輩と言ひ合いになつてたよね」

「おい……それ、言わなくていいだろ……」

その反応を見るや否や、不知火さんがぴくりと動いた。

「それは初耳だ。何かあつたのか？」

「原島、てめえ、マジで、さすがにキレてもいいよな……？」

「またまたそんな」

萌から聞いたところによると、昨日、先輩と土屋は付き合つことになつたそうだ。理由の具体的なところはあまりに突然すぎて全く想像がつかないけど、萌によると「つつちーはへたれだから」らしい。

「それと不知火さん、土屋ってへたれらしいんだけど、どうなのかな？」

土屋は青い顔になつていた。

「ああ、ひどいぞ。へたれすぎて私も引くレベルだ。もう色々と原島君は知っているし、話してしまつてもいいだろうか」

「やめてくれ、本気で。つーかお前……原島と何話したんだ？ 何で原島が色々知つてることを知つてんだよ」

「原島君は死ぬほど口が軽いからだろうな。そこで私も少し、原島君と話させてもらった」

二人の視線が僕に向く。

「いや、よくあることだよ？」

「ねーよ……」

視線をかわしながら部室の前までやってくると、既に萌と先輩が待つていた。

「遅いわよ。わたしこれから忙しくなるから、今の内にだらけようと思つてたのに」



「ん。空姫、最近どうだ？」

「絶好調よ」

即答が飛んできた。

「なるほどな、そういうことか」

このやりとりで何に納得できる部分があったのか、僕にはさっぱり理解できない。

その流れで部屋に入って、定位置についた。

不知火さんは一人掛けのソファに座って、他の三人は長机を囲み、僕はその中間あたりのパイプ椅子で適当に座る。萌と先輩のせいで僕が座るスペースが基本的になくなるから、これは仕方がない。

「原島君、さっきのアンケートは書いたか？」

不知火さんは暇そうに頬杖をついて、同じく暇な僕に言った。

「書かなかつたよ。自殺について書くことなんて、今更何もないから」

「お前は書くことあるだろ。もうあれだろ、腐るほどあるだろうが」  
土屋は微妙に怒った声で。そんなこと言われても。

「ないよ。自分は過去を振り返らない主義とか言ってたくせに、土屋って結構グズグズだよな」

思い出せる限りを見ても、土屋の言うことはどこかちぐはぐで、特に不知火さんのことに関しては、不知火さんのお姉さんのことと混ぜて話している部分があったように思う。そのことについてはもう直接の確認はしないけど、きつと土屋は海原先輩の言っていたように、不知火さんを同一視している面があったから、二人を交えて言うことが少なくなかったのだ。

不知火さんの現在を見る限りでは、土屋の言っていた姿とは違っていると感じる。言ってしまうえば、過去に一番囚われていたのは土屋だったのではないか、とも考えることができってしまう。

それを客観的に正しく評価することは、きつと不可能なのだけだ。

「過去を振り返らない主義？ へえ、総助ってそんなに男らしくかたかしら？」

「……………うう……………」

先輩も嫌味つたらしく言って、土屋を困らせた顔にした。

「私は書いたんだ。たくさん書いた」

「なに書いたの？」

萌が訊く。

「私が思いつく限りの、自殺にまつわるエトセトラ」

陰鬱なイメージしか湧いてこないのは、僕の想像力がないからなのかな。

「原島君はいろいろと面白かったからな、原島君のおかげで自殺について考えることがあった。この前なんて私をずっと見ていたと思った、と言われてしまって。死のうとした人間のくせに、鬱陶しいくらいの食欲さを持っている」

「そんなこと言っただけ……………」

「耕くん最低……………あたしというものがありながら！」

ふざけた調子で言われても、緊迫感も緊張感も持てやしない。

「ああ、それでだ萌。君の頼みは達成されたか？」

「あれ？　なんかあったっけ」

「原島耕くんを昔の姿に戻したい、と確かに聞いたが」

「あ、それかあ……………」

随分と前のことを持ち出してくる。それを訊いてくるということはたぶん、不知火さんは僕自身に変化があったのだと認めているのだ。それも、萌が望んでいるような方向に。

「……………全然戻ってないよ。でもその頼みの目的は、お腹いっぱいになるくらいに達成されちゃったかな」

萌は僕を見て笑った。僕も笑い返すと、急に恥ずかしさがこみあげてきた。こんなこと今まで無かったのに、変に意識してしまったせいだろうか。

「ん。それはよかった」

不知火さんは足を組んで何度か頷く。そこで納得をされると、少しむずかゆい。

「では、この生徒活動向上推進同好会における学園祭前までの依頼はなんとか全てを達成することができたことになるな。拍手！」  
ぱちぱちとまばらな拍手。

「今は五人になっているし、部に昇格して学園祭に何か企画をぶち上げるのも悪くない。では何をしようかと、考えるべきだと思わな  
いか？」

「それは無理」

先輩がきつぱり言う。

「なぜ」

「わたし生徒会長だし入部不可。そもそも同好会が部に昇格するのは来年度からだし、顧問だって多分見つからないわよ？ あんたたち萌ちゃんしかプラス要因ないじゃない」

「えっへへへ」

別に笑うところじゃないよ萌。

「なんだと……」

一方、青い顔になった不知火さんは何故か僕の方を見てきた。

「では原島君が誰かを脅すとかしなければ……」

「何でそうなるのかな」

「確かに原島は何気に強面だし、頭がイカれてるって評判もあるからな。うまくすればいくらだって顧問を捕まえることが可能な気がしないでもない」

不知火さんの代わりに土屋が応えた。僕はそれほど強面ってわけでもないと思うんだけど、どうしたらそうなるのかな。それに頭の中も平平平凡、なかなかつまらない人間だと自負している。

とんとん。

ふいに、ドアがノックされた。これから学園祭の準備に入るとい  
うのに、何か面倒事でも発生したのだろうか。

「今からかよ……じゃあ俺バイトってことで……」

「あたしは学祭もあるし、フリスビー部に行こうかな」

「生徒会の仕事とどっちがめんどくさいのか……」

みんな随分好き勝手なことを言う。いや、萌はしようがないかな。  
「そうだ原島君、次に入ってくる生徒をうちの部に引き込むぞ。部員が足りないと聞くと急に五人目を欲してしまう」

「どうぞー」

無視して僕はドアの向こうに言葉を投げた。すると軽く返事が返ってきて、ドアが動く。

がらがら、がっ、がっ。

「あ」

なんと、ドアが途中で止まってしまったらしい。

「神の思し召し……なるほど、次の来客は私達の部に入る資格がないと言っているのか！ ならば帰れ！ 相談があるなら後日にしろ！」

「わかりました、すみません」

「ちよつと待って！ ごめんなさい、今ドア直すんで待っててくださいー！」

おかしいことを言っているのになぜ簡単に了承してしまうんだ。

神の思し召しなんて突拍子が無さ過ぎる。他の四人を見ても愉快そうに笑うのみで、誰も相談者を相手にしようとしなない。

「似合わないな」

不知火さんはおそらく、ドアを直す僕の背中に言った。いいじゃないか、僕がこういう行動したって。

「似合わないね。耕くんもつとドライじゃん」

「確かに似合ってるねーな、そんな普通の反応なんて」

「まるで良識ある高校生ぶっててキモいわよね」

がこん、とドアが直った。ゆっくりドアを開けてみると、既に誰も居なかった。

「ほら、不知火さんがひどいこと言うから帰っちゃったじゃないか」  
振り返ってみると四人は愉快そうに、いや、馬鹿にしたような笑顔を見せていた。僕のこの行動には愉快さのかけらもなかったから、彼らを見習って愛想笑いを返したりしようとは思えない。

きつと理解には遠いだろうけど、僕は彼らに説教をすることにした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9114n/>

---

自殺にまつわるエトセトラ

2010年10月23日11時40分発行